

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成二十七年一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷一〇五二号



日川協加盟

No.1052

同人特集・私の一句

一月号

### 第三回春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第三回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

#### 課題と選者(各題二句 共選)

課題吟 「来る」 津田 暹(川柳研究社)  
「来る」 新家 完司(川柳塔社)

「ポーズ」 木本 朱夏(川柳塔社)  
川上大輪(川柳塔社)

#### 雑詠

「大西泰世(樹々の会)  
小島蘭幸(川柳塔社)」

#### 投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

#### 投句料 一〇〇〇円(切手は不可)

#### 投句締切 平成二十七年二月二十日(金) 消印有効

#### 送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―四―一七―二〇―一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX (〇六)六七七九―三四九〇

#### 賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上  
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
緩和ケア (ホスピス)  
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

## 情熱と情熱

小島 蘭 幸

明けましておめでとうございます。

私は、あざみエージェントオリジナルカレンダーを書斎に飾り、新年を迎えました。そして「よし、今年も頑張るぞ!!」と誓ったのでした。

### 情熱と情熱握手して静か

実は、今回フォトグラフィア藤田めぐみ氏の美しい写真と共にカレンダーの1月を飾っているのが私の1句なのです。川柳だけはらの平成2年9月号鉄路集に発表したもので、当時、近詠の鑑賞をされていた石原伯峯先生は、この句について次のように書いておられます。――本誌9月号で橘高薫風氏が静水さんを見舞われた記事を読んだ。情熱家同士のお二人が、固く静かに握手をされた光景を臉に浮かべて、その友情に感激した私である。――「橘高薫風副主幹来竹」と題して記事を書いたのは私ですので、ここにその一部を再録いたします。

――川柳塔社副主幹の橘高薫風先生が8月15日、山内静水会長のお見舞に来竹されました。「新幹線に乗

ったら二時間ちよつとで竹原、竹原はとても近いんやなあ」と薫風先生。午後一時、静水会長宅へ私と一緒に訪問、「思ったより元氣そうで安心しました」と薫風先生。話はすぐに来年の九月八日開催の第35周年大会のことに移り、「私の最後の大会になると思うので、選者は葉先生と薫風先生にお任せします」と静水会長、薫風先生の快諾を得て静水会長も安心されたご様子でした。約一時間半、川柳人同士の熱い会話を耳にして、私も頑張らねばという思いが込み上げてきました。――

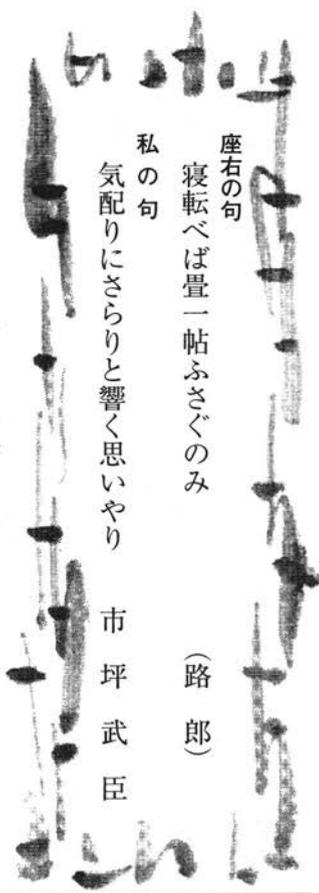
平成3年9月8日、竹原川柳会創立35周年記念大会は、お話に西尾栞主幹、選者に小松原爽介、去来川巨城、渡辺蓮夫、磯野いさむ、橘高薫風の五氏をお迎えして盛大に開催されました。ただ残念だったのは、その席に静水会長の姿がなかったことでした。

ようようしてもろてしあわせでした 静水

さて、今年は未年、私は本号自選集の中の

そばにいますだけでやさしくなる羊

を年頭吟としました。1月4日に岡山県金光町で開催される新春たまし川柳大会から、また川柳の旅がはじまります。多くの人との出会いを大切にしたいと思います。本年が皆様にとって良い年でありますように心から願っています。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

気配りにさらりと響く思いやり

市坪 武臣

# 川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「未」

■巻頭言 情熱と情熱……………	小島 蘭 幸 ……(1)
福壽草松にしたがいそろかしこ……………	西出 楓 楽 ……(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島 蘭 幸 選 ……(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑩……………	木津川 計 ……(43)
自選集……………	……………(44)
温故知新……………	……………(47)
水煙抄……………	西出 楓 楽 選 ……(48)
新川柳鑑賞 ③⑤……………	麻生 路 郎 ……(69)
西尾 葉句抄……………	……………(70)
■書評 永田俊子著「野 菊」……………	水野 黒 兎 ……(71)
誹風柳多留一二篇研究 19……………	……………(72)
英語 de Senryu ③⑦……………	吉村 侑 久 代 ……(74)
民族の詩歌 (31)……………	三好 専 平 ……(75)
愛染帖……………	新家 完 司 選 ……(76)

## 福壽草松にしたがいそろかしこ

麻生 葎乃

西出 楓 楽

路郎師と葎乃夫人が夫婦になられたのは、前世からの因縁で川柳の神様の采配に違いないと思う。

葎乃夫人は母親を早く亡くされたものの、父親の掌中の珠として育てられた。にもかかわらず四男五女(二男と二女は早世)を育て、豊かでない家計のやりくりをし、気性の激しい夫・路郎師に表題の句のように仕え、自由闊達な川柳活動をさせて上げられた人柄は、現代の若い女性には信じ難い存在であろう。

私はまだ川柳を始めていなかった頃、二回お会いしているので、この一文を在りし日の夫人の姿を想像してもらう足掛かりにしていただければ、これにまさる幸せはない。

昭和40年わが家で「川柳婦人友の会」の新年会が開かれた。柳界は男性社会で女性家事に専心、外で趣味を楽しむことは珍しかった時代である。だから広くもないわが家の二階で、女性陣二十数人が

檸檬抄 「太い」…………… 牧野芳光・古久保和子共選 …… (80)

「前向き」…………… 平田実男選 …… (83)

一路集 「忙しい」…………… 平松かずみ選 …… (84)

「パチパチ」…………… 関本かつ子選 …… (85)

初歩教室 「わくわく」…………… 山口光久 …… (86)

川柳塔鑑賞…………… 早川遯行 …… (88)

水煙抄鑑賞…………… 片山 忠 …… (90)

せりりゅう飛行船<sup>④</sup>…………… 新家完司 …… (91)

インスピレーション・ナビ 印象吟…………… 大西泰世 …… (92)

『麻生路郎読本』余滴<sup>(25)</sup>…………… 栗原道夫 …… (94)

同人特集 私の一句…………… …… (96)

十二月本社句会…………… …… (104)

各地柳壇(佳句地十選)／三浦強一・渡辺富子…………… (109)

一月各地句会案内…………… …… (122)

柳界展望…………… …… (124)

■編集後記…………… 朱夏・いさお …… (156)

座右の句

子の為の川の幅なら跳んでみる

(たず子)

私の句

努力の芽気長に見よう子を信じ

蔵田光子

一堂に会することができた。何分50年ほど前のことでおぼろげな記憶しかないが、不思議と夫人の舞だけは鮮明に覚えている。今のようにカラオケなどない時代、皆さんが謡・小唄・端歌・舞踊などを演じられるのを、宴席の手伝いをしながら楽しませてもらった。夫人は指名されるのとゆるりと羽織を脱ぎ、

「白扇の末広りの末かけて

堅き契りの銀要……………

と小唄「白扇」を見事舞われた。今思えば娘時代に当時の嗜みとして、身につけられたものだったのであろう。

二度目にお会いしたのは昭和46年。義母の川柳句集「ねっくれす」上梓の相談に付き添って、同居しておられた奈良県生駒市のご長男のアートさん宅へ伺った折である。当時夫人は79歳。端然と机に向かっておられ、その佇まいに圧倒された記憶がある。現在その歳に近づきつつある私は、内面から来し方の充実の人生が滲み出るような、あの雰囲気には程遠く毎日をあくせく過ごしていることに反省しきりである。

その後、昭和59年、89歳で夫人は路郎師の元へ旅立たれた。

# 川柳塔

## 小島蘭幸選

倉吉市 牧野芳光

この国が好きでツバメが飛んでくる  
書棚から消えてしまったトム・ソーヤ  
導火線濡らせ戦地に降る雨よ  
淋しさを形にすると人になる  
年をとるたびピーマンになっていく  
どこを見ても言い訳が見つからぬ

弘前市 高瀬霜石

関節をボキボキ鳴らし朝を出る  
のりしろはまだたつぷりとある野心  
ファイト・ファイト鏡の中のほくに言う  
投票に行くぞ目薬差してから  
一生涯消えない傷と陽を浴びる

松江市 石橋芳山

追憶のゴツゴツとした握り飯  
晴天の下でざっくりした話  
レディーガガゆらゆらマドンナぐらぐら

生き恥であろう腐ってきたリンゴ  
凹み代ないほど心べっちゃんこ  
恥部消えぬままに消しゴム使い切る  
和歌山市 木本朱夏

肺活量鍛えて春を待つことに  
キンモクセイ匂うわかれたひとのこと  
榎山へ行く日は花の種持って  
樹木葬も悪くはないわ五月なら  
木の葉降るペープメントは巴里に似て  
虹は消えてわたしひとりの原っぱに  
大阪市 谷口義

遠い人思い出させるお正月  
ねぎ坊主わたしのどかが気に入らぬ  
朝起きてみないと分からないことだ  
略式省略じゃんけんには負ける  
殊の外むつかしいのは晩年だ  
もう一度トイレに行ってから決める

京都市 高島啓子

守秘義務があるので帯がついている

勝てないとわかっていても四つに組む

こちらからにこっとすればいいのです

栗ごはん飽食の孫たべ残す

時雨きてはたん鍋など思うなり

結着がつかずに年を越しそうだ

吹田市 山本希久子

輝かす八十歳のイヤリング

初日の出傘寿の数を誇りとす

人生の宿題解けぬままの椅子

住所録から省く淋しい冬の音

シルバーに陽当りのよい公園だ

なるようになるさ年金だけの杖

松江市 川本 晔

ハラハラと紅葉 嫌だ嫌だと紅葉

スープを作る トロイメライを混ぜながら

熟柿がひとつ冬に奏でるバイオリン

ひと駅を歩いて今日の満足度

石垣の隙間を埋める石でいい

大吉が出そう玉葱剥いでいる

横浜市 菊地政勝

神様が御膳立てした良き出会い

逢いに行く顔を鏡に聞いてみる

悪筆が直せないまま喜寿迎え

人の波止め愛妻をスマホ撮り

難聴を使い分けする老いの知恵

腰据えて罵詈雑言にたじろがず

尼崎市 山田耕治

自分ひとり食べるケーキは買いません

じいちゃんに爪を摘ませてくれました

候補者の握手を逃げる遠回り

代打逆転監督さんは忘れられ

トロ・ウナギ食べないわたしなりの善

月冴えて今宵わたしも虫になる

鳥取市 福西茶子

フラフラくびれが無くて回せない

マイカーは主より高額納税者

踏ん張って踏ん張ってブービー賞とった

一筆で描ける私の脳回路

我儘を言うことに気付かない

あれそれで会話できればまだ若い

出雲市 伊藤玲子

ほどほどを教えてくれた母の匙

増税に約束一つ忘れてる

渦を巻く意見も酒で道がつき

ライバルもお手本磨き合っている

お手本の通りに書いてもの足らぬ

入院しアレソレ通じないあなた

榎原市 安土理恵

カマキリの殉死しあわせと信じたい  
からめとるつもりで腕を組みにい  
気がかりはドルの相場と寿司の時価  
昨日まではタブー犯したことはない  
銀色の道へいざなう冬の蝶  
さざんかはらはらはあなたはもういない

堺市 柿花和夫

見え透いた嘘に浮輪を投げてやる  
三次会で氣勢あげてる理想論  
雪月花お酒が友を連れて来る  
我が身を除いて断捨離は完璧  
シュレッターにかけた内緒が歩いてる  
こだわりの欠片奥歯で粉にする

松江市 藤井寿代

生き抜いて天使になつてデイの椅子  
七色の飛び箱とんだ紋白蝶  
優柔不断悩みの種が一つ増え  
歯ぎしりをしただけで埴輪にされた  
バーボンに晒すと熟れてくるリンゴ  
ゴッホの絵ひっくり返し冬になる

奈良市 大久保眞澄

謝罪会見お見苦しくてすみません  
息とめて着るワンサイズ下の服  
私が履くと靴も外反母趾になる

背伸びしてた背中が丸くなってきた  
ホントの自分恐くてとても探せない  
手抜きせずパツクのおかず皿に盛る

篠山市 酒井真由

置き手紙して土砂降りの雨の中  
待ちわびた便り忘れた頃に来る  
駆けつけてくれた手ぶらの手が温い  
別れぎわ情の深さをみてしまう  
反古を焚く青い炎が雪の上  
雲行きがあやしくなってきた花野

八幡市 今井万紗子

ちよこつと来てすぐ出て行つた福の神  
秋日和夫の靴も磨いとく  
この先も幸せ捜し辞書を繰る  
復習はしません時間ないのです  
ずつとずつと今が幸せ感じたい  
呼べばすぐ答える広さ夫と居る

米子市 吉田陽子

青空のサブリ効果を疑わぬ  
甘くてもいい直球で勝負する  
凍ってはいないか心振ってみる  
散歩道足が百景知り尽くす  
太陽と沐浴冬はこれがいい  
紅葉のしんがり雪の綿帽子

札幌市 三浦 強 一

加速度が付いて転がる老いの坂  
少しずつ阿吽の呼吸ずれて老い

ダブルパンチだ増税に物価高  
鉛筆にご無沙汰してる肥後守

自画像はやはり仮面を付けて描く  
エンディングノート随所にユーモア句

川西市 山口 不動

レシビ本一人だけには多過ぎる

妻が待つ病室にある出勤簿

年金を貯金している豪の者

カルチャーに熟女が増えてやめられず

通学路六年生は頼もしく

柳誌きて五臓六腑に刺激受け

高知市 小川 てるみ

ポジティブに生きてみようとする

ぶっかってみよう流れが変わるかも

猪口ふたつこんな幸せだつてある

へソ曲げた鬼がてこでも動かない

頂点を極めた芸が枯れてくる

恰幅の良さを買われてエキストラ

香芝市 大内 朝子

新しい年へ脱皮の朝ほらけ

木洩れ日と揺れるテネシーワルツなど

喜びを分かち笑顔のハイタッチ

孤独な日母さん偲ぶ煮転し

リベラルに生きるこの世がおもしろい

昭和っぽい匂いぶんぶんする夕日

宝塚市 田中 章子

いくつまで生きるか金は残しとこ

二人でも四人分あるゴミ袋

検診の度に背丈書きなおす

娘には娘の生活があり他人めく

古稀過ぎて仮面を全部脱ぎました

本音聞く愛のスパイスかけながら

藤井寺市 高田 美代子

年賀状書いてお節に取りかかる

また選挙民のふところ当てにして

正月に国旗久しく出してない

鈍角鋭角その日其の日の星の位置

人間の弱さ穢さ情けなさ

Uターン出来ない訳も無くはない

寝屋川市 籠島 恵子

ブーッと笑って何も言わぬ好きな人

行きつけの店持つ人に付いてゆく

心残り今年は虹を見ていない

いろいろな呼び名を持っている野菊

返事のないトビラを開けるサスペンス

ふるさとの水が少おし苦くなる

鳥取市 中村金祥

天空の城が天国にも見える  
赤サンゴ育てた海が荒れ狂う  
七十の爺にナンパをするライン  
九条のパズルが元に戻らない  
さわやかな顔で過ごそう三ヶ日  
世界中みんなが持つている明日

大阪市 津守なぎさ

早朝のチャイム居留守をつかいたい  
米の値も知らず増税考える  
柿たわわ車窓嬉しい万華鏡  
入院のためキャンセルをした湯宿  
秋夜長読書の時間足りず朝  
待ち合せ早く着いても先が居る

西宮市 亀岡哲子

デパートが好きで鍛える足と脳  
整地され萩も芒もない月夜  
大根を選ぶ小さい方選ぶ  
転ぶなど自分に釘を刺しておく  
人生論語る講師の子の如し  
大笑い集合写真揺れている

富田林市 関 よしみ

木枯しが晒す私の人間味  
元旦は玉砂利の音潔い  
柚子風呂でやんわり外す蝶番

うとうとの炬燵の中は早や五日  
パソコンに今日の幸せ保存する  
魂を揺さぶりに行くフェルメール

大阪市 津守志華子

まだ生きる約束をした睨み鯛  
丸い背を伸ばして仰ぐ初ひかり  
ゆったりと齡を重ねてマイペース  
指切りの約束がある年金日  
羊千匹数えて夢に迷い込む  
ハルカスから望むちっぽけなキリン

出雲市 小白金房子

ご神灯心の迷い照らし出す  
千木高くライトに浮かぶ大やしろ  
玄関へ羊舞いこむ新春の音  
歙胼胝に新春を寿ぐ雑煮箸  
大黒恵比寿話上手な炬燵酒  
絵手紙で心の一句差し上げる

鳥取市 吉田弘子

風鈴に夏の余韻を仕舞いこむ  
未来より過去慈しむ喜寿過ぎて  
ポイ捨ての世に老いの身を重ねみる  
医者へ行くその気になると痛み消え  
意識して肩の力を抜いている  
お互いに透明体になってきた

さいたま市 星 野 育 子

行く人がファッションショーのような街

ポケットに夢を詰め込み子は自立

ひとりになって記念日が減ってゆく

朝昼晩食べることは生きること

院内のことは掃除の人に聞く

衣替えとしを忘れてファッションショウ

むすんではほどくスカーフくたくたに

つぎの夏も着られますよう好きな服

秋の暮れ「お姫さまごっこ」散り散りに

整頓せよさけんでいます台所

調布市 伊勢田 毅

小春日に亡妻の影追い暮参り

肩書を外し立ち呑み美味な酒

胃袋を失くし懲りない父の酒

念仏の向こうちやりと銭の音

城下町袋小路の美味しい店

横浜市 小 野 句多留

乱高下購買欲を信じない

立ちくらみ連絡網に知れ渡る

ハロウィン定着しだす祭り好き

ロッカーに少女預かるアキハバラ

メモ書きの二枚が違うから困る

富山市 島 ひかる

再会Ⅱ 一気に読んだ秋夜長

再会Ⅱ 家族師弟にある絆

富山百山 今年も付ける○印

下山したところ温泉待っている

亡き父母の写真とはなしして安堵

コーヒーとバツハ聴ければよい老後

もめぐとを月の兎は何と見る

すんなりと行かぬのが常国と国

そのうちに変わる空気を期待して

笑わせてくれてサンキューふさいだ日

犬山市 金 子 美千代

頼られてオーバーヒートしてしま

パックでもしてみようかな秋夜長

暴風雨に耐えたクモの巣払えない

立ち読みと言わず椅子まで置く本屋

福島をもう忘れたか再稼働

犬山市 関 本 かつ子

真実と事実紙面の難しさ

見とれてる平等院へ救急車

車椅子押して仲間と京の旅

中国の研修生という仲居

年賀状夫は減らし妻は増え

京都市 清水英旺

朝刊の冷たい手触りきょう立冬

仰ぎみる京都秋天雲一つ

透析に妻送り出し主夫となる

妻は留守残りのカレー一人食う

飴玉をまだ噛み砕ける快感

京都市 藤井文代

こそこそしか逢えない恋がしたかった

賞味期限気にかかるのは食べてから

封筒も切手も主張する手紙

気力失せ口に代わりをさせている

市長と知事組んで大阪どうするの

長岡京市 山田葉子

引き返そうかな消した筈のガス栓

準備万端お天気だけがままならぬ

簡単だが後が厄介家族葬

鍋囲みふうふう冬を迎え撃つ

今日を楽しくただそれだけを願ってる

大阪市 阿野壽美子

会合にすぐに呼ばれるまともめ役

蟹料理無口になって話題あと

子供留守騒音なしで拍子抜け

おねだりを笑って済ます母の腕

ダイエット好物が出て小休止

大阪市 池上清治

うまい柿土に老母の汗がしみ

車列止め子連れカルガモ里帰り

七五三たらふく食べて子等帰り

シベリヤへ無事に渡れよ鶴帰る

気をつけて真っ直ぐかえろ下校道

大阪市 井丸昌紀

秋の七草咲かぬススキが気に掛かる

竜巻の中に入れば痩せるかな

無礼講けどいちびりすぎやあんな

ススキの穂ひとりぼっちで光れない

母さんの便りは丸いポストから

大阪市 江島谷勝弘

我を通し不協和音が流れ出す

歯にやさしい豆腐バナナが好きになり

ヘソクリとにらめっこして遊んでる

職退いてもう十年も素浪人

芯がありブレることない友がいる

大阪市 榎本日の出

スパイスを効かせて走る八十路坂

バラ一輪ご飯の味が違う朝

担がれて火の鳥になるスケジュール

無駄だとは解っていても無駄が好き

なんやかや言うて幸せそうな顔

大阪市 榎本舞夢

政界の不祥事つづき案じられ  
同窓生つぎつぎと逝く落ち込んで  
悲しみもしっかり受けて立ち直る  
ストレスが溶けてゆきまず出で湯旅  
蓼科の風とささやき希望湧く

大阪市 大川桃花

介護保険使わぬ気概だけは持つ  
付き合いもちよつとドライがうまく行く  
自分のことは棚にあげてるお説教  
観光もグルメも混せる遍路旅  
文楽の頭美女から鬼女になる

大阪市 奥村五月

貧富も境界も無い青い空  
石段の下から拝み賽銭は  
欽杖に青い空見て吸う煙草  
偉大なる先生あわれ紙オムツ  
止めさせた酒をたつぷり墓にかけ

大阪市 笠嶋恵美

縁起良し元気尚良し塔まつり  
お気に入りの服が幸せ言うてます  
ノーベル賞師弟の愛にほろほると  
台風も無事通過して朝ごはん  
地図と勘頼りに歩く脳パズル

大阪市 川端一步

わたくしの漢字一字は句である  
年金もボーナス欲しい年の暮れ  
暗い世だせめて愉快の詩詠まん  
趣味いっぱいあるので呆ける暇がない  
本の虫なるより散歩虫になる

大阪市 熊代菜月

守るもの無くなり母は認知症  
柳友の元気が見える年賀状  
神様のいたずらですか嬉しい日  
愛二つ両手に持って春が来る  
携帯が遠くで私呼んで居る

大阪市 古今堂蕉子

駄句の山燃やし今年の供養する  
露天風呂一人で入るサスペンス  
ゆつくりと青い意見を聞くとする  
八%こんな曲者と思わず  
もくもくもくもくもうすぐ君の番ですよ

大阪市 小谷集一

裏の裏読むと世間が狭くなる  
人生は二流の方が生きやすい  
美しい嘘で綻び縫い合わず  
切り札を使うともとに戻れない  
泥んこで愚直に生きて来て傘寿

大阪市 近藤 正

フクシマの牧牛の子は元気です  
都構想肩身が狭くなつてきた  
病院食松竹梅の品ぞろえ  
金婚の旅宇奈月は雨だった  
十%財界様の言うがまま

大阪市 坂 裕 之

好き嫌い何の理由もないままに  
雨の朝明日は晴れると言われても  
本音出て急に温度が下がります  
手を繋ぎゆつくり歩く八合目  
思い出のこの一枚は仕舞つとく

大阪市 佐藤 忠 昭

気配りが過ぎて嫌味なお節介  
気配りが出来ず嫌われ蚊帳の外  
気配りは小心者の処世術  
割り勘に気配り不要もつと飲め  
気配りが自然に出来る友立派

大阪市 田 浦 實

朗らかな笑顔名刺の代りです  
おせっかい下町らしいアドバイス  
痛い所衝いてくれますだから友  
電子辞書胸のポッケに持つ自信  
般若心経妻も唱和をしてくれる

大阪市 寺井 弘子

優勝もピリも感動ありがとう  
身の丈に合った暮しの箸二膳  
コスモスの恋占いに風の使者  
体育の日二人三脚天高し  
誘われてうかうか乗って勘定書

大阪市 栃尾 奏子

元旦の清楚は神さまの香り  
角松を目指してお正月が来る  
さあ神を酔わしにかかる吟醸酒  
後悔が闇を纏つてせめて来る  
風となり母が涙を拭きに来る

大阪市 板東 倫子

美味しいと言うて買わない試食品  
天高く閑中閑を持って余す  
夏野菜酒肴に世事を論じてる  
インテリが理屈に詰まる世界感  
師でもあり友でもありし人が逝く

大阪市 原田 すみ子

物干しにやる気を干して膨らます  
いい人だがさよなら言つてほっとする  
正解と信じた道が消えている  
しくじりを繋ぐとわたくしが見える  
楽ばかりすると体調悪くなる

大阪市 平嶋 美智子

気象が変春夏秋冬危ないな  
青空のぼっかり雲に母が乗る  
花はみな国境なんて気にしない  
八パーセント仏壇の花省いてる  
消費税上げればおかずおとさねば

大阪市 伏見 雅明

本心を隠して列の中にいる  
広い空を羨ましがるワンルーム  
ユーモアのある叱責はよく応え  
点滴を見上げ孤独を噛みしめる  
巨万の富築き失う真の友

大阪市 升成 好

呱呱の声地に足つけて明日に立て  
失意の日雨は破調の音で降る  
和菓子買う色もかたちも味のうち  
終活へスローライフに切り替える  
人間に性善説という重荷

大阪市 松尾 柳右子

齢のせい二階降りるも力要り  
足痛めウォーク出来ないいら立ちさ  
子供達おすし買って来て賑わった  
老い二人今日何食べる思案中  
あるがまま生きる事出来感謝する

大阪市 山崎 君子

むらさきの朝顔二つさびしげに  
朝早くお菓子が届く嬉しさよ  
お菓子食べ元氣出します子の様に  
カラス二羽親子でしようかアンテナに  
寒い朝何を話すかカラス二羽

大阪市 山本 加お里

デイ送りホツと一息お茶にする  
若い時年とらないと思つてた  
写真見て涙がぼろり母の愛  
頑張って一歩手前でひと休み  
半世紀尽した姉の遺産分け

大阪市 吉内 タカ子

脳トレに曲を覚えに通い抜く  
放浪記見逃し嬉し仲間さん  
日中の雪とけ近い仏頂面  
景気わく明るい春に腰伸ばす  
誕生日長生きしてや孫電話

堺市 奥時 雄

不意にしかこない遠くからの計報  
意表衝く意見にざわめきが続く  
各々が内緒話か喫茶店  
秘めごとの相手が暴露してしまい  
寂しいね村の旧家が朽ちている

堺市 栗原道夫

学校にいったいあった小さい秋  
学校のフェンスの錆も秋である  
落ち葉の話を用務員さんとしてる  
下校を告げる音楽も秋となり  
秋の気分が放課後にどっと来る

堺市 齋藤 さくら

ど忘れか惚けてきたのか恐くなる  
来年も生きてるつもり水備蓄  
大好きな友の笑顔が忘れられず  
席ひとつ空いていたから助かった  
孫叱る貫禄付いてきた娘

堺市 澤井敏治

神さまの重み感じる初日の出  
世界の富士山爆発は許されず  
三面鏡正月だけは世辞をいう  
返信にご機嫌ですと書く賀状  
許すこと知って人から愛される

堺市 遠山唯教

旅立ちの子が頼もしく遠くなる  
馴らされた茶漬ですます妻の留守  
アクセルを踏んでもスピードが出ない  
秋ふかく飲めなくなった友が逝く  
ふるさとの匂いあふれる道の駅

堺市 内藤憲彦

お賽銭増税分をプラスする  
ありがとう五回も書いてある手紙  
年賀状初対面から半世紀  
おだてにも靡いてこない猫と妻  
人それぞれ僕には僕の道がある

堺市 西村りつえ

おしゃべりが水に流せず立ちん坊  
通るたび足を止めさす菊の香  
高すぎて下るまで待つ血圧計  
辛い時生きのびたのは空元氣  
笑顔まき裏に廻れば傷だらけ

堺市 宮本かりん

朝のコーヒ頭シャキッとせんかいな  
下心少し眩しいあんなの日  
話し相手物色してる待合所  
無駄足をいったい踏んで老いてきた  
かつかした頭へ冴えた返事くる

堺市 村上玄也

千乾びてきたか体重までも減り  
何をやる気もなく過ぎる不調の日  
全没が続いていても出る句会  
僕のこと切れやすくなつたねと妻  
甲子園あの真っ赤には驚いた

堺市 矢倉五月

里帰り甘えが騒ぐ初春のキッチン  
お銚子も猪口も転んで聴く十八番  
三ヶ日過ぎそれぞれに乗るレール  
コーヒの香と読んでいる今年の運  
冷蔵庫空いて来ました小正月

堺市 山本半錢

先代の好物も入れおせち重  
長男のゆつたりとして兄弟会  
朝夕に金剛山のある暮し  
ゆつくりがお好きでしようかぬるめの湯  
手作りの信玄袋が馴染んでる

池田市 栗田久子

年内にと気負ったままで年を越す  
去年より小振りにしようメカざり  
略式のお節でのんびりと祝う  
老いは慎重そばもとろろもすすらない  
引く紅も少し華やく初詣で

和泉市 横山捷也

医者変えてみても同じ呑み薬  
先送りすることはかり明けた年  
深追いがすぎてつじつま合ぬ夢  
選んだのは私モラルのない議員  
ちよつぴりの儲け話に乗ってみる

茨木市 島田誠一

禁酒して季節感から遠ざかる  
風向きを読んでこっそり帆をたたむ  
裏を読む思考回路はまだ元氣  
年金の愚痴も入ったのし袋  
逃げ道をつくって敵を威嚇する

茨木市 藤井正雄

古い二人ちよつとぜいたくする玉露  
窓からの回覧板と立ち話  
先ず母を味方につけてからの策  
正月帰省祖父の人生聞くいろり  
ここからは風致地区だと鳴く小鳥

大阪狭山市 矢野梓

連休の疲れを医者に持って行き  
クラス会兼ねて心の里帰り  
家の事忘れ楽しいクラス会  
再会を米寿と決めてクラス会  
洗濯機やつと覚えた妻の留守

交野市 森本弘風

この川を越せば何とか食えそうだ  
降り立って異国の空気バスポート  
生活費政治費なら省けるが  
何事もみんな見通す俺の妻  
やきもちを一度ぐらいは歳やなあ

地球揺さぶり人を減らすか自然界  
一日が終る虚しさだけ残る  
河内長野市 植村喜代

この空へ爆弾積んでは通せない  
幸せは遠い歩いてても歩いても  
若いつていいな何でも出来るから

河内長野市 梶原弘光

じいちゃんの内緒ばなしはこそばゆい  
今日も妻内緒ばなしを持ち帰る  
昼飲みはアカンと自戒妻の留守

この辺でかんにんしたると鎌を置く  
コスモスから紅葉へ移る秋が好き

河内長野市 木見谷孝代

あの種がと惚れ惚れ見入る蕪だいいこ  
野焼きする煙今ではうとまれる  
ごめんねが言えず好物膳にのせ

中間で友と落ち合ってお茶まし  
元氣だけ褒められてから病めまへん

河内長野市 黒岩靖博

同窓会過去いま未来語り合い  
花婿と隣同士で溝が消え

稲刈に野点いつ服薦の声

帰省して竹馬の友と縄のれん  
目の前を発車して行く終電車

河内長野市 坂上淳司  
投句用ハガキは縁起よいポスト  
保護シール貼ってハガキのラブレター

満喫の旅絵ハガキでお裾分け  
住所録削除が寂し喪のハガキ  
年賀状食べはしないか未年

河内長野市 谷久美子

病院の暮しに慣れた孤独感  
病人に出来る我慢と我儘と  
張りのあるナースの声に背を伸ばす

平和への光を繋ぐノーベル賞  
返事無い孫のスマホを覗みつけ

河内長野市 辻村ヒロ

血糖値食べほうだいのツケが来る  
ちよっぴりの心配ごとがボケ防止  
安眠法本を積んでる枕元

八十路でもかぼちゃの馬車を待っている  
ついついと美味しい話耳が向く

河内長野市 松岡篤

見舞客増えてくるのが気に掛かり  
網棚に言い訳寿司が忘れられ

私流あだ名で相手忘れない  
内示受け任地の地酒下調べ  
バスツアー風景よりもスマホ見る

河内長野市 村上直樹

忘却癖戒名いらす墓いらす  
目分量ばつばらばつと男めし  
ステーキをがぶり傘寿の常備薬  
白寿なお惜しいと皆に言わせた  
い  
穏やかな風持つてこい羊年

河内長野市 山岡富美子

電飾の街で影絵になつてゆく  
カタカナ語いつか民話を消してゆく  
国境は問わない鍋の即興詩  
B級のグルメで女子会が燥ぐ  
過疎地にもポストがあつて人がいる

河内長野市 山室光弘

厄介な世間を縫つて糸車  
のりしろの薄い事案に手を焼かす  
醉眠に極彩色の武勇伝  
したたかに吟味忘れぬ老いの知恵  
アベノミクス吾に届かぬもどかしさ

岸和田市 堤 檜代

山映えて秋を知らせる風が来た  
秋が来たあみもの感触たのしいな  
紅葉が私の頬を染めてくれ  
湯の花につかつて紅葉見とれてる  
秋冷えがこたえる年になりました

岸和田市 雪本珠子

スランプの時は遣り方変えてみる  
立ち話固有名詞が出て来ない  
守りたい人が居るから頑張れる  
愛猫もわたしも後期高齢者  
癌告知鬼胎を抱く日が続く

四條畷市 吉岡修

魂はぴつかびかですまだ米寿  
リズムよく税金だけは上げてくる  
どっちみち死ぬつてことに変りない  
紅葉マークですよご注意願います  
鉛筆も削れぬナイフだが刺せる

吹田市 太田昭

埋蔵金でも掘り当てたのか妻無口  
闘病を無事乗り切つて酒を酌む  
マネキンの服を脱がせる役がくる  
句読点打つて祈りの千羽鶴  
凡人と言われ続けて八十路越す

吹田市 大谷篤子

白が好き赤も好きだとワイン飲む  
包み込むように昨日を温める  
貴重品つめ込みすぎたクッキー缶  
都合よく忘れたことにして治め  
愛犬に素直な心教えられ

吹田市 木下敏子

高石市 浅野房子

恋しくて銀杏並木を振り返る  
紅葉の風に散歩の足弾む  
お互いに老いを隠して背伸びする  
目に見える所だけでも拭いておく  
葉飲むこと忘れずに歌うたう

吹田市 藏田光子

足して二で割ると丁度の子が二人  
遊び半分始めたことに救われる  
半分は無駄な話で締め括る  
泣かされても半分あげる仲の良さ  
一病がわたしの脳をきしませる

吹田市 須磨活恵

新しい年新しい風を待つ  
逆らわず力まずゆったりそれがいい  
ふところでは希望の種を膨らます  
ここいらで心の捻子をしめ直す  
年あらたじつくりと見る生命線

吹田市 野下之男

伝統の物理学だよどんと来い  
LED生みの親にはただ感謝  
若者の奮起促す十七歳  
大好きな日本目指して風の神  
年よりが元氣見て欲し喉自慢

古代より秋の夕暮れとは寂し  
アルバムに若い私だ捨てられぬ  
日に一度百人一首復習す  
ノラ猫を飼い隣からどなられる  
朝夕餌やっていたのに捨てられぬ

高槻市 井上照子

意気統合傘さしかけてくれた縁  
そのままの姿が好きと切るシャッター  
テープルマナー忘れ笑って済む仲間  
身分相応小さな宝石の指輪買う  
読み終えた小説に似た我が人生

高槻市 指宿千枝子

噴煙の上るもやさし桜島  
同期会みんなじいさまばあさまに  
再会の六十年に名を忘れ  
追憶にひたり楽しむ国なまり  
他人事のように思える傘寿です

高槻市 片山かずお

酒も料理も手渡しでくる隅の席  
遅れ気味で走るのがバスのサーピス  
ラッシュ時の戦士は生氣身に纏う  
粒揃いでもドングリと笑われる  
流行は追わぬと老舗意地を見せ

高槻市 島田千鶴子

干柿のカーテン夕陽より赤い  
堪え性ないから辛いふくらはぎ  
北風に風鈴白け顔で鳴る  
遣り直しまだ出来ますと砂時計  
立ち寄った記念に瓦寄進する

高槻市 初代正彦

笑顔には老化の影も遠慮する  
光と影あつて重みのある行路  
濃い薄いだけの影には嘘がない  
マスク越し手術直後の主治医の目  
僕だつて誇りに思う第9条

高槻市 杉本義昭

消しゴムで消えない過去が喋りだす  
失恋の痛手は苦い酒で消す  
明日のため過去はきれいに消していく  
ゆつたりと飲み食い寝るの三が日  
臥す母へコスモスの咲く窓を開け

高槻市 富田美義

生き延びた細足そつと撫でてみる  
夫婦にも嘘あり子にも有る内緒  
ハッターリもジョーク途絶えた老い二人  
大胆に見せても裏に恐怖心  
そう言えば最近グラス割つてない

高槻市 富田保子

我が家には妻が元氣と言ひ強み  
スイーツが好きです命縮めても  
意地曲げて子供の舟に乗る夫婦  
ストレスを蛙の面で耐えている  
禁煙はまだ三日目と指を折る

高槻市 原洋志

観覧車喜怒哀楽の絵の具箱  
手の届く場所に言い訳置いてやる  
パレットにはやりすたりを溶かして  
脳のネジ巻いて8パー慣れさせる  
マスクして喜怒哀楽の貌かくす

高槻市 安田忠子

一日中沈黙のまま老い二人  
美しい銀杏の季節秋刀魚焼く  
バスツアー松茸二本土産付き  
小分けしたお惣菜買い手間省く  
存分に楽しんでる今が旬

豊中市 池田純子

読書家の頭四角く見えてくる  
祭笛秋空高く押し上げる  
ポケットにしまつておこう今日の幸  
ちち母はここに御座すか波の音  
逝っちゃった頑張り屋さん忘れない

豊中市 江見見清

出欠の返事計報でやってくる  
境内に入れば腰を伸ばします  
アドリブの通じる方という安堵  
一歩ずつ日向に移る立ち話  
いい人にされて寝付きの悪い夜

豊中市 藤井則彦

ツインベットの隙間に落ちていた内緒  
ボールまでしびれさせてるネイマール  
吊り革も弾む女性の専用車  
贅沢な遅読味読の秋夜長  
悔しさのかけら一つもない遺影

豊中市 松尾美智代

雨も風も積んで空気になる夫婦  
釣瓶落しこの寂しさは何だろう  
夕食はおでんを炊いて行く句会  
一泊の旅でも句箋帳は持つ  
食べる量増えてないのに太ってる

豊中市 松村里江

玉音もダンス覚えたのも二十歳  
手放せぬ我が青春のダンス靴  
スマートな会話の弾む喫茶店  
もう出番ないドレスでも吊し置く  
寝つけぬ夜ひとりカラオケやっています

豊中市 水野黒兎

妻の留守居間がこんなに広いとは  
いくつもの出会いと別れ人は駅  
名文を読んでは錆びた脳磨く  
筆箱にいまも現役肥後守  
まさかこの段差で転ぶはずがない

富田林市 片岡智恵子

気どついても背中近頃丸くなり  
あれ大事これも大事と捨てられず  
あらぬ事医者に尋ねて血をとられ  
体力を甘く見ていた日の不覚  
絵筆のつづきを月にすまわせる

富田林市 中井アキ

大き目に堪忍袋縫い直す  
約束の時間が真正面にある  
合縁奇縁リハビリで友を得る  
みぞおちの炎に文句つけられず  
はやいてる間に恋は煮崩れる

富田林市 中村恵

大国となつて品位を失なわず  
降って湧く話に右往左往する  
陽が落ちて輝き増していく都会  
ひっそりと地球の端にぶら下がる  
私だけはどうな時でも味方です

富田林市 肥山一文

古稀すぎて青い昔がなつかしい  
アルプスの屋根を歩いた君と僕  
憧れの人と登った金剛山  
胸の傷いやされもせず手をつみつめ  
好きですと言えず別れた若かった

富田林市 山野寿之

後継ぎがない下町が痩せていく  
思いきり男を語るコップ酒  
やんわりと論じた母の丸い棘  
十二色クレヨンからの小宇宙  
天婦羅の衣脱がせるダイエツト

寝屋川市 富山ルイ子

ハルカスで上阪をした親友に逢う  
天と地に動ける今を感謝する  
神仏に元気を感謝ありがたい  
上げ膳に据え膳和洋中華食べ  
わたくしの今年は干支の未年

寝屋川市 平松かずみ

明けまして八十路の坂をふたり連れ  
孫の日に孫が土産を提げて来た  
家庭医に命預けて五十年  
昨日今日フル回転をさせる脳  
三ヶ所に一人ずつ居る一家族

寝屋川市 森田麗

天秤に酒量と妻の愚痴を乗せ  
楽園だ早く来いとは言わぬ亡夫  
DNAか叱咤されてもケセラセラ  
時効など許さぬ祈り百度石  
染め変えぬ着物がピタリ亡母の色

羽曳野市 安芸田 泰子

木枯しへ無口になってゆく背中  
折角のチャンス逃した選り好み  
桐箱で日の目を見ない記念品  
文明の利器は老いには御し難し  
いい知恵も浮かばぬままに今日を閉ず

羽曳野市 宇都宮 ちづる

何年振り夫の手握る足の怪我  
古稀の顔更新免許で五年持つ  
恙なく終える今年のカレンダー  
生きている事を知らせる年賀状  
家紋入り風呂敷繋ぐ子がいない

羽曳野市 徳山 みつこ

テレビにつっこみ私の夕ごはん  
なつメロがまた涙腺を撫でにくる  
イケメンの刑事とホシを追う夜長  
日替りで会いたい人がいてくれる  
いい星のもとに生まれてお正月

羽曳野市 永田章司

東大阪市 佐々木満作

寡黙の人その一言に重味あり  
お隣の落葉が秋を告げている  
戦中派羽毛布団は軽過ぎる  
癖の無い男個性も萎えている  
待ち合せ改札口がふたつある

羽曳野市 三好專平

包丁は引いて使うと教えられ  
犬談義はずむ団地の朝の道  
天皇の古墳が朝の散歩道  
戦争がつづく地球の温暖化  
名を持たぬ花も女も美しい

羽曳野市 吉村久仁雄

冗談をまとう本音の欲深さ  
ひとかけらの愛に温もる老夫婦  
世話焼きの真骨頂を磨く老い  
罵倒には耐えて情けに涙する  
おやじギャグ言うたび妻の目がとがる

東大阪市 北村賢子

おまけの命言うてまだまだ咲くつもり  
望郷へやっぱり父母のことそして  
沢山の印へ弾むカレンダー  
泣きたい夜いつも寄り添う月が居た  
太陽がさんさんベランダはオアシス

メモ書きを壁にベタベタ貼る夫  
幼少の友の訃報を聞き失意  
真実を述べぬ釈明の会見  
とうさんとあんな言い方分ける妻  
お正月待ち遠しいと唄う孫

枚方市 海老池洋

ブラッシュを古い記憶へかけてやる  
ハンガーにかけるとしゃんとする夫  
無理したら切れる輪ゴムも人間も  
回れ右一足飛びもして生きる  
穩便に生きると決めた妥協癖

枚方市 小林わこ

母の手の止まるところを見ていない  
病室から窓いっぱい星を受け  
窓全開逃げた小鳥を待っている  
動けば負けアンパンマンが転んだよ  
窓少し開けてあなたを待ちわびる

枚方市 伊達郁夫

諦める酒が恋しい酒になる  
米光る母が包んだにぎり飯  
頑張った過去を時時撫でてやる  
優しさが時時鬼になる介護  
私の時価を問うてはいけません

我が家では全員揃う晩御飯

枚方市 寺川弘一

惚れたのは君がノーメイクの時だった  
愛の深さを計るメジャーが見当たらぬ  
魂よりも浅い所にある心

死んだら地獄だから長生きしたいのさ

枚方市 二宮紫鳳

ダイエット今日は禁句のフルコース

ハイキング広くて青い空を抱く

関東弁すっかりなじんだ孫電話

手作りの野菜レシビでおもてなし

マイガーデン心耕す夫の笑み

枚方市 二宮山久

毎朝の体操仲間にはげまされ

菊人形胸もと枯れて差し替えも

妻の愚痴聞いて冷酒グイと飲み

日が落ちて作句に励む書齋部屋

また一つ趣味を増やしてボケ防止

枚方市 藤村亜成

連休の終りの扉は閉めにくい

ユーモアが巧み修羅場を避けている

花束の花それぞれに痛痛し

虚実入り乱れ私はどこに居る

決断が遅いと気楽な立場から

コラーゲンが乾いてこじわ増えました

たのしいな収穫祭でお買物

果実が美味くなる秋ダイエット

縁側に吊るした柿の綱渡り

秋の陽がやさしく射していびき猫

藤井寺市 太田扶美代

大切な一日だったススキの穂

いいないいな即実行という若さ

白い菊ご先祖様は誇りです

秋明菊消えて花壇がたよらない

春なつ秋冬の記憶がおぼろげな

藤井寺市 鴨谷瑠美子

朝やけに小さな願をかけました

正直に咲く五年目のシクラメン

弱音ばかり詰めた袋が重たくて

文の束燃やしわたしの冬支度

具だくさんの一日だったお箸置き

藤井寺市 鈴木いさお

錦秋の古都へ降り立つ木の駅舎

モザイクの中で母さんが笑った

妻に内緒で金子みすゞに逢うて来た

花いちもんめ好きだった子は今いずこ

津和野には忘れられない女がいる

藤井寺市 津田シルク

箕面市 酒井紀華

記憶の器テンコ盛して旅終える

河豚提灯風にゆられて待ち惚け

少しづつ記憶の器透けてくる

秋刀魚やく昭和も今も母の味

いつまでも青いと消しゴムが嘆く

命がけ鮭一心に川のほろ

柿の葉寿司食べにおいでと山は紅

祝膳きょうは嫁とりサクラ鯛

ダイエットのストレスバイキングで発散

箕面市 広島巴子

藤井寺市 増井ヨシ枝

キッチンの椅子は六脚今ひとり

言の葉がぐるぐるまわり五七五

ふり向けばバリアフリーという暮し

貯金増まさか銀行変えただけ  
ゆるキヤラに似てると言われゆらゆらり

クラス会昔の恋が騒ぎ出す

帰省予定もうそろそろと電話待つ

ツーカーと伝わるナースいて楽し

南天の赤くたわわにファイトわく

秋明菊今年も亡母に逢えました

守口市 井上桂作

藤井寺市 吉田喜代子

お不動さん元気に登れありがとう

月食を首長くして見る夕べ

晴天に行く先決めず靴を履く

三人もノーベル賞は嬉しいね

好きな古着友に褒められウツフツ

また肥えた辛抱たらぬこの親爺

八十路坂この十年をどう生きる

迷惑をかけずに老後辛抱を

天変地異願い穏か未年

ひどすぎる女性大臣お二人も

藤井寺市 若松雅枝

八尾市 内海幸生

角曲るまで後ろ姿は崩せない

叙歎なき汗のすべてに感謝状

体力が無いと知力も欠けてくる

矯めて矯め盆栽たちよ倅せか

衰えた五官に気合入れてみる

入口に佇つ仏教の深い奥

九十歳十年日記もう一度

寝れぬなら無理して眠ることはない

日溜りの壁にもたれて立ち話

大人しい羊になぜか硬い角

新年号おめでとう米寿プラス一歳  
八尾市 高杉千歩

右脳の怠け癖に慣らされる  
帳尻を合やすことなし薄年金  
価値観の違い正義が通らない  
目標の人亡し大正寂し

八尾市 寺川はじむ

賑わいが民のカマドに来ぬ景気  
内緒です国にもあるぞ秘密法  
賑わうはずの御嶽山が秋を消し  
リーマンショック世を真っ白にする怖さ  
四連勝喜び過ぎて元のトラ

八尾市 宮崎シマ子

黙ってる人が燃えると火を吐くぞ  
玄孫という怪物が来る間近  
いい嫁でいつもトイレに花がある  
嬉しいな孫が年玉くれました  
初詣で見る日の丸の清しさよ

八尾市 村上ミツ子

ごきげんようと気どつてはみましたが  
書くことは苦手言うこと尚苦手  
十キロは重い五キロの米を買う  
北京マラソンお伴するガスマスク  
しずかな余白侘び寂を生みおとす

新米の炊きあがる香は地の恵み  
夕焼けがまるで絵画の雨あがり  
正倉展遠い昔に夢馳せて

御嶽のコース痛まし春を待つ  
手間省く時短メニューもあるレシピ

大阪府 桑田ゆきの

忘れ癖時々認知症かもと  
肝っ玉太い父の背縫りいる  
外廁使わぬ俣に注連を張り  
長寿願う神に粗食を誓いおり  
菊焚いて心の塵も焚き入れる

大阪府 野田栄呼

音沙汰がなくて案じることもなし  
過去捨てて移転勇気の友凜と  
道端の落葉に自分合わせ見る  
穏かな姑のエプロン姑になる  
自分の名忘れる時が来るのかな

大阪府 初山隆盛

川柳の添え書き光る年賀状  
夢食べてあしたの糧にするころ  
燃えるものあつめて冬の部屋飾る  
枯れるもの枯れきつてこそ水ひかる  
定位置に座る人いて場が和む

八尾市 山根妙子

大阪府 米澤 淑子

満身で咲く石路のしたたかさ

マンネリのつくり笑いが干涸びる

黄昏れる秋体力も能力も

真つ直ぐな胡瓜ストレス溜めている

スッピンの野菜並べる道の駅

神戸市 白川 淑子

ぼつねんと座布団ひとつ仮の宿

散骨の海にゆっくり月の舟

へこたれへん大阪のおばちゃんやもん

米櫃に米が有る何としあわせ

訣れ来てソファに沈む夜の珈琲

神戸市 能勢 利子

すきやきの匂い我が家の嬉しい日

ブランコに乗ってごらんと言われた日

これからが本番ですと三軒目

いわし雲見上げて涙こぼさない

少しでも似て欲しい父の負けん気

神戸市 福原 悦子

和尚さん話上手で心地良い

一色も使い方だと思ふ墨

伸びて縮んで私は微妙に生きている

おまけだと早起きするがボーとする

高騰の野菜尻尾まで食べている

神戸市 松井 文香

我が人生ライバルはないマイペース

言霊が溢れてペンを走らせる

軸ぶれず自分らしさで回る独楽

凜とした自分求めてする化粧

程の良い絆を保つ車間距離

神戸市 山口 美穂

一年の計はたてない傘寿です

ないしょだと言われた内緒すぐ忘れ

ご苦労さんリハビリの脚撫でてやる

傘寿という感慨もなく日が暮れて

リハビリに疲れて脳が白うなる

神戸市 山崎 武彦

たじろいではおれぬ後期はこれからだ

切れそうな糸だが紡いでいる二人

釘を打つときは男手欲しくなる

何もかも省くと自分取り戻す

寝たきりの母へ無骨な三分粥

神戸市 山田 婦美子

老々介護の背に秋雨が降り注ぐ

過去は過去黙って姑の爪を切る

身も心もあなた任せの芒の穂

雷鳴のように抱かれた日もあった

傘寿まで生かされている手が温い

明石市 糀谷和郎

朝からの悩みとうとう夕間暮れ  
木漏れ日を浴びると満ちてくる鬮志  
雲フワリ絡めて脳を掃除する  
お命が大事と尻尾振るトカゲ  
喜怒哀楽どれも私を語る術

芦屋市 黒田能子

ひとすじの煙命が消えていく  
大雨も小分けに降ってくれないか  
フランスパン似合う神戸の坂の道  
それからの長い話が止まらない  
百歳の元気のもととはよく笑う

芦屋市 竹山千賀子

陽だまりは猫とばあばの指定席  
注文をしたあと気付く時価の店  
初耳が今年は幾つ増えるかな  
主婦の目がほってはおかぬ直売所  
正月は飛んで来るくる孫曾孫

尼崎市 市坪武臣

ふる里の香りがズラリ道の駅  
仕事の虫だった昔を懐かしむ  
趣味スポーツ老いてますます観るだけに  
新聞紙折り目正してリサイクル  
人間の終着駅に保険掛け

尼崎市 加川靖鬼

八十歳の扉ズシリと重たい  
釘のあたま叩いたことのない木槌  
ブーメラン風を味方に舞い戻る  
紬織り着て糞虫の冬仕度  
何処へでも潜り込めます水の精

尼崎市 春城年代

チラシ溢れてわたくし宛のないポスト  
だまし絵にうっとり生きている平和  
長旅のどこで果てるか朝戸繰る  
糸巻きにからむ幼ない恋ごろ  
愛想笑いが通り過ぎゆく短日に

尼崎市 藤井宏造

コスモスの揺れにかすかな風を知る  
食欲の秋に敗れたダイエツト  
秋夜長まだまだ続く妻の愚痴  
それらしくかしまつてる七五三  
牛井屋いまだ入ったことがない

尼崎市 藤岡りこ

人生の終着駅へナビ探す  
食欲の秋は大きくなる茶碗  
降ってるかな隣の家の屋根を見る  
誰だっけゆっくり話して思い出す  
退院の明日はなかなかやって来ず

川西市 西内朋月

独り身に慣れてしまった二十年

淡淡と画像見ながら癌告知

悪友の誘いに乗った休肝日

真夜中に肴を探す冷蔵庫

へそくりをすることもない独り者

川西市 米原雪子

ポケットから手品のように出す土産

自動払い預金どんどん減っていく

探し物忘れ見つめる舞扇

ふと気付く何を探していたのかな

スポーツシューズいつのまにやら早足に

篠山市 北澤稠民

合掌する仄かに笑う仏さん

薄れゆくものを見ている車窓から

古い二人田畑を守りまだ元氣

検診の番を待つ人みな無口

秋野菜収穫前に肥える虫

篠山市 酒井健二

生き生きて悩み無くなる時はない

郷愁は濁り沈めて澄んでいる

運だけやパチンコ談義ハイ終わり

呑む食うが頭半分占めている

さわやかな風を命の友とする

三田市 石原歳子

亡き母に聞きたいことが一つある

稲刈りも終り芒で風を知る

初めての土地の方言つい笑う

夏やせをした主婦秋のみのり買う

故郷の山で記憶が甦る

三田市 上垣キヨミ

顔見せるだけでどっさり里みやげ

台風の備えを無駄にした安堵

太陽をたっぷり食べた米を研ぐ

雄鹿の声が紅葉の山駈ける

平凡の文字シアワセとルビを振る

三田市 尾崎一子

年毎に生きる厳しさ冬の陣

だんだに文も少なくEメール

遠出より湯けむり恋し里の秋

マネキンになつたつもりで買う姉妹

歩かねばおはぎみつつも食べたから

三田市 北野哲男

ペット用おせちも買って犬と住む

痛ましい新語を聞いたペットロス

よろしいな汗の匂いのする男

外国で愛想振りまく我が総理

温暖化お正月にも紅葉かも

三田市 久保田 千代

幕前にて父と川柳談義する  
こつこつと余生を託す趣味ひとつ  
無理に無理重ねて女意地通す  
お上品に刺されてからの深い傷  
反省会また反省の種となる

三田市 福田 好文

ちぐはぐな話が弾む老いた耳  
主権まだ米寿の父が譲らない  
埋もれてた友の名を見る地方版  
前職の肩書き借りる事がある  
我慢くらべ介護する人される人

三田市 堀 正和

朝市を賑やかにする旬野菜  
九回の裏も起らぬハブニンゲ  
ときどきは噴火もします後期だが  
よく喋るきつと淋しい人なんだ  
聞かされた愚痴が自慢に変わってた

西宮市 秋 元 てる

病い多々すき間探して生きてやる  
「未だまとも」孫の見舞に泣き笑い  
三步引きよく見えて来た古眼鏡  
残高と余命どっこいどっこいに  
今日の日はこれにて終りごきげんよう

西宮市 足 立 茂

年賀状を止めたたら友が遠くなる  
念のため見直す収支報告書  
呑み助の幹事はすぐに足を出す  
「あれ」「それ」で済ます夫婦の五十年  
今日限り酒は止めたと言う頭痛

西宮市 梅 澤 盛 夫

痴呆にはならぬと言っていた義父が  
若づくり中には湿布ホツカイロ  
そこそこでいいのに欲がまた芽ばえ  
対向車来ないでおくれ祖谷の道  
痴呆症義父と和解が出来ぬまに

西宮市 緒 方 美津子

手抜きした稲穂はおじぎしてくれぬ  
いい噂にはつきまとわれない尾鰭  
赤ちゃんの元気な声はいい電波  
晩飯は要るか夫にまた聞かれ  
そういえば父の小言は岐路で効く

西宮市 片 山 忠

大抵は自分探しに迷い込む  
逆らった私をヨイシヨする上司  
カクテルの飲み方知らぬ世代なり  
孫達にチャンバラごっこやらせたい  
美輪さんに悩みを告げて叱られる

西宮市 西口 いわゑ

風の神もみじを旅の道連れに  
誤解とけ天に向かつて伸びをする  
言いたきこと三分残して水を飲む  
押し花と思い出話しています  
ひつじ雲豊かな気分にしてくれる

西宮市 福島 弘子

心地いい落葉が足に赤や黄や  
松竹梅亡父の丹精今も生き  
藤色のストール街へ行きたがる  
帰り際瘦せると息子小さく言う  
ラケットを張り替え明日を夢見てる

西宮市 牧 潤 富喜子

昨日よりちよつと高めへする標  
犀星がお隣だった母のさと  
自らを売り込んでいるかすみ草  
たかごとされどうまく使つて生きのびる  
先送り日常的に使わせる

西宮市 山本 義子

姫君が興入れされた神無月  
人間の海たまにある風のとぎ  
雪便り西には早うございます  
朝刊がことり時計は四時を指す  
洗顔の水冷たくてびびります

西脇市 七反田 順子

お年玉孫の顔見て弾みます  
散歩するお伴の犬は尾が高い  
山頭火そほ降る雨に立つてはる  
御節にはたんまり愛が詰めてある  
ごきげんよう暮せた午にありがとう

姫路市 古川 奮水

年金は硬貨に変えて重く提げ  
銭湯も偶には浸かり路地覗く  
肥満体栄養指数厳守中  
お留守番引受け犬は昼寝する  
蟹這うて解禁の競り港湧く

奈良市 阿部 紀子

温厚な未 身内におりません  
天体ショー大勢見上げ平和だな  
非通知の電話に何故か叱られる  
鳥獣戯画ユーモラスさに大笑い  
腹立ちも迫力失くしまあいいか

奈良市 岩本 浩二

趣味多忙閻魔の誘い固辞をする  
妻の矢に凶星を突かれ狼狽える  
くたくたになるまで止めぬ意地つ張り  
形にすれば牛蒡のような我が余生  
傷心に追い打ちかける雨しとど

奈良市 加門 萌子

柏手を打って今年の幸祈る  
四連勝あれば四連敗もある  
若者の快拳世界が注視する  
六年後益々見なくてはその氣  
まずまずの国に暮らして先ず感謝

奈良市 辻内 げんえい

月食を孫と携帯しつつ見る  
ド派手でもびっくりしない妻の服  
夫婦喧嘩黙りこむのが通じない  
可も不可もない人生に悔いはない  
早く着きお茶をしてたら待たす羽目

奈良市 天正 千梢

ナースコール鳴らしすぎて叱られる  
三面鏡欲しい季節もあったのに  
2キロ痩せたと足腰撫ぜてみる  
何遍も言うてる事だどつゆ知らず  
時間待ちばかり続いてひと日暮れ

奈良市 米田 恭昌

野菜高もやしばかりのベジタリアン  
男どうし孫とこっそり内緒ごと  
華やかな天平文化の赤い沓(正倉院 3句)  
庸と調いつの時代も税に泣く  
天平の庸調を見る決算書

生駒市 飛永 ふりこ

激カレ・ナンをむしゃむしゃやくぎり  
プライドが一人歩きで枯葉舞う  
結局は妬心なんだね生あくび  
日本晴鬼も私もハイジャンプ  
しんどさも感謝感謝で盛り上げる

橿原市 居谷 真理子

文庫本二冊と夜の船に乗る  
尻尾のない蜥蜴が秋の陽に和む  
別れ話のその優しさは良くないわ  
負け試合ここから先が見せどころ  
あなたにはある寒風に咲く資格

大和郡山市 坊農 柳弘

失敗の無い人生なんて味気ない  
ありがとうが生きてる元日の笑顔  
その先の修羅は語るぬ初日の出  
思惑を見透かされてる初詣で  
言い訳はしないと決めた鏡餅

奈良県 中原 比呂志

百歳の頂上目指す八合目  
静寂に桜もみじは春を恋う  
忘れ物取りに帰ってまた忘れ  
足元がぐらぐらわが家も政権も  
消費税裾野は広い等高線

奈良県 渡辺 富子

どっさりのタブー抱えて老い進む  
ため息のまった中でケセラセラ  
文鳥に悩み打ち明け年を越す  
七曲りの道にまさかが待ち伏せる  
沈む陽へ生きてる意味を聞いてみる

和歌山市 上田 紀子

天上天下何処も私の極楽地  
想像の翼広げてゆく未来  
匂が瘦せて心の隅が埋まらない  
命ほど大事なものにまだ逢えず  
モザイクの街で明日の夢を追う

和歌山市 柏原 夕胡

介護してされて二人の坂続く  
生き様を語る男の熱い舌  
正直で女を褒めたことがない  
ワントーン下げてゆるりと生きてみる  
誰よりも素直な水になりたくて

和歌山市 喜田 准一

分別と名付けて格差広げられ  
伝統を押しつけ若い芽を潰す  
美しく瘦せるチラシでよく売れる  
洗っても政治の垢がこびり付く  
線引きもこころ辺りが限度かも

和歌山市 楠見 章子

全身で受ける清々しい夜明け  
手つかずの景色は想い出の中に  
冗談がとても明るい車椅子  
長生きをして君と同じ夢みたい  
沈む日に金のさざ波いただいた

和歌山市 坂部 紀久子

集金の人だけ賞めてくれる額  
惚けたふりしたら本気にされそうで  
喜びを連れて娘の里帰り  
遊んでる形で孫が寝てしま  
嫁とお茶女同士になっっている

和歌山市 武本 碧

だんらんの中で浮いてる私利私欲  
もう少し欲があればと嘆く影  
難癖をつける目立ちたがりの人  
一病を宥めせめては尊厳死  
誤作動できらめきだしたマイドラマ

和歌山市 玉置 当代

アイデアを拾いポケットに入れる  
一徹に走り続けた父の靴  
着られない服がタンスにしがみつく  
転んだらあかんと杖に言い聞かす  
これ以上深入りしないことにする

和歌山市 土屋 起世子

孫運転いっばい秋に逢つてきた

いつの間にコピーしたのか娘の仕草

パソコンも出来ぬ祖母でも頼られる

一病と仲良くしている台所

明日のこと明日にしましよう夜具誘う

和歌山市 福井 菜摘

双方を立てて私の椅子がない

厨房の音静まりて小正月

一献のお屠蘇絆をあたためる

身の丈で暮らしてゆこう初日記

前向きを座右の銘に汗を積む

和歌山市 福本 英子

外れない指輪に未練たつぷりと

落ち葉掃くまだふんぎりのつかぬまま

八起き目は杖を借りても無理なこと

デイケアー此処も男性二名だけ

退屈な時間勿体ない時間

和歌山市 古久保 和子

ウフフフが洩れる鍵穴の形

身辺整理質状の数が減らせない

桜並木只今準備中らしい

野良猫に餌やる人も秋に溶け

首筋を冬に攻められ小走りに

和歌山市 堀 富美子

日移りがする久びさのシヨッピンケ

生き下手で言葉を躲す術知らぬ

いい人と言われて仮面また被る

ええ加減に覚えた音符笑い出す

前向きにわたくし色を暖める

和歌山市 松尾 和香

美人薄命わたし百まで生きられる

心美人生きた証に今の幸

ちぐはぐな人生だけど添いとげる

さりげないマナー守っている余生

国文祭景色温泉癒やされる

和歌山市 松原 寿子

皿いち枚に質を盛り込むおもてなし

慎重に生きるハンドル握りしめ

癒されて胸のつかえが消えている

刃物手におやおや何をするつもり

歯車が欠けて意見が噛み合わず

岩出市 藤原 ほか

ちぐはぐな二人が鳴らすファンファーレ

ちぐはぐな二人でずっと生きている

美人ではないけど心澄んでいる

レシビには母の愛情詰つてる

足元を見極め歩み寄っている

海南市 小谷 小雪

お願いの八パーセント程叶う  
引つ込みのつかないままに迫るもの  
こんな字であしからずとか言うハガキ  
アリバイも少しかすれて夜になる  
難病の友を乗せたい勲斗雲

海南市 堂上 泰女

本人の耳には届かない世評  
ロスタイム希望のドラマまだ続く  
高原の夜空へ虫のビブラート  
育つ子に学んでアンチエイジング  
アクティブに親呼ぶ三歳児の笑顔

紀の川市 宇野 幹子

蝶蝶の恋の一途よ枯れ野原  
眠れない程に恋する五七五  
ブルドーザー山は仕返しするつもり  
式部ほど重ね着をして冬ごもり  
大根を抜いて師走の貌になる

紀の川市 北山 絹子

才能が光る貴女に嫉妬する  
寡黙ですだけど心が燃えている  
未だ何も言っていないのに返事する  
同居した嫁から温い風が吹く  
美人にも僕の好みの顔がある

紀の川市 辻内 次根

のっけから躓く僕の文化人  
デジタルで聴くレコードの針の音  
胸中は言葉と相似形である  
それはそれ紙のパンツの履き心地  
西高東低そのうち温い日もあろう

田辺市 岡本 昇

むつかしい努力し合って仲がよい  
馬齢重ねほどよく怠け癖がつき  
日日感動して長生きの糧にする  
人間の都合でペット生かされる  
右往左往しても崩れぬ蟻の列

橋本市 石田 隆彦

妻に花もたせて角のない夫婦  
好調時はずみで渡る思案橋  
石橋を叩き踏み出す未踏の地  
リストラで幕は閉じてる夢ドラマ  
保護色をまとい青虫試食中

鳥取市 池澤 大鯨

帰宅した老妻冷えた足寄せる  
学童で半袖になる孫の冬  
孫下校まず冷蔵庫あさりする  
下の孫晩のラーメンあるか問う  
掘り炬燵溜り場にして足の数

鳥取市 加藤 茶人

結局は二位ではダメな賞レース  
リセットは大山で泣く草いきれ  
ええまさかまさかのまさか癌  
人間の都合ムダ毛として剃られ  
意味のない言葉に意味を持ち悩む

鳥取市 岸 本孝子

どうしてもホテルの風呂になじめない  
ゆっくりでいいよと夢で亡母が言う  
気がつけばお互い杖で越えた坂  
残り旅二人の夢を追いながら  
雪月花わたしやっばり雪見酒

鳥取市 岸 本宏章

現実に戻って終るフルムーン  
自惚れも心の杖にして生きる  
タイムイズマネー暇ならたんとある  
通過した駅の名読めたことがない  
かたちより値段で選ぶ松葉蟹

鳥取市 倉 益一瑤

波打際神サマ腕を離さない  
泣きたい日笑いたい日にペンがある  
走りすぎ友との距離を見失う  
一冊の本が背骨になってゆく  
有頂天不協和音に気付かない

鳥取市 鈴木 一弘

のど自慢おほこを披露玉手箱  
長い旅終えて故郷の安堵道  
枯れ尾花老老たがい杖となり  
カラオケに美酒を満たして年忘れ  
露天風呂沐浴ふたり大月夜

鳥取市 永原 昌鼓

人生を豊かに飾る好奇心  
お亡夫さん迎えまだまだ御免です  
甘い顔子にも孫にも見透かされ  
また今度約して消えた虹の橋  
ときめいて女を生きたその昔

鳥取市 夏目 一粹

風の日は厚めなものを干している  
竹皮で包んだ握りメシ貴重  
断ち切った夢だが傍を離れない  
和尚さんの道説くのはコピー  
にんげんに化ける付け焼き刃であれど

鳥取市 西川 和子

絆余曲折やっばり馬が合う仲間  
畑を打つ美味しい匂が食べたくて  
まだ生きる積りの種を播いている  
私を残す一句を捻ってる  
プレゼントの杖を頼りに初詣で

鳥取市 春木圭一郎

鳥取市 横田春名

己未みづみきつといいい事やってくる

見え透いた羊頭狗肉にはのらぬ

空を飛ぶ夢を羊も持っていた

全身を人に捧げる羊です

平凡な日々へとにかくありがとう

鳥取市 平尾菜美

思い切りこの地に稼した鋏である

処方箋ない鋏立ったままで暮れ

やる気だす鋏に芽が出る花も咲く

鋏一途今日も手綱にしがみつ

鋏だつて宇宙の大地踏みたいよ

鳥取市 前田楓花

苦しんだ壁の方から光差す

白壁の町並みぬけてあう夕日

友達も金が絡むと面倒だ

投げられた言葉の余韻こだまする

秋色のハートに紅をさしてみる

鳥取市 森山盛桜

中流に浸るドリツブ音の中

カッコよく見せたい梯子駆け上がる

たじろいでいたら行き止まりになった

本心はどれか幾何学的模様

真つ先に満座で滑る癖がある

調理器具新式買つて飾り棚

値札見ず品選びする夢の中

頬よせる写真互いに若かった

念仏を唱えてみたい僧に会う

一言が纏めた話ゼロにする

鳥取市 吉田孔美子

一茶ならこの痒い蚊を見逃すか

びったりはどっちだ夫がいるいな

接着剤見事床柱収める

ドッキング宇宙の芥すり抜けて

悪い風邪秋の蒔物大狂い

鳥取市 両川無限

天国の父へ詫び状書いている

真実の愛だからこそよく揺れる

メビウスの輪がほどけない愛と憎

シーソーの反対側に乗る夕陽

絵手紙のコスモス揺れる風の私語

倉吉市 猪川由美子

作り笑顔の蔭の嫉妬を見逃さぬ

心のチャンネル足りずストレス溜まっちゃい

単細胞笑顔の奥を見抜けない

迫り来る10パーセント迎え撃つ

人の目を気にし過ぎると生きてけぬ

倉吉市 山中康子

堅物を溶かす飴ならほおぼろう  
手付かずの整理まだかといらだたせ  
杖柱すがる嫁にも明日がある  
いとおいしい老母おばあが重たい存在に  
ローン済みやつと抜けてた青い空

米子市 後藤 宏之

連休に台風の目とにらめっこ  
マイカーに四国遍路の完歩証  
ふところが趣味の多さで火の車  
ご機嫌でめつたに聞けぬおはこ出ず  
ご近所で杖になったりなられたり

米子市 後藤 美恵子

自家製の沢庵うまい尻尾まで  
棘のないバラに優しく包まれる  
倒れたまま菊は気高く咲いている  
亡夫との思い出乗せて廃車にす  
夫逝きて線香が体臭となる

米子市 竹村 紀の治

番号で呼ばれ一日検査漬け  
大役を終えてひとりの慰安会  
叱つたり褒めたり今日を生きて行く  
ほんやりと私の港見えてきた  
最期までお供しますと酒のバカ

米子市 中原 章子

生きがいを持って輝く星になる  
文芸の域に達するまで励む  
お互いに気配察すること出来る  
ゆつくりとお茶飲む至福ありがたい  
挨拶のできる人脈温かい

米子市 成田 雨奇

降りそうで降らない傘をまた忘れ  
ゆつくりと大人になってまだ未熟  
歯医者を見た剃り残る髭二三本  
もうすこし黙っていればいい杖だ  
ほくの字が読めた選者はただ一人

鳥取県 石谷 美恵子

期限切れないか冷蔵庫のチェック  
リハビリのゴム毬部屋の隅で泣く  
リハビリへ汗する姉が愛しくて  
やさしいと弱い男を買い被り  
口よりも上手が言えるペンの先

鳥取県 岩崎 和子

マイカーを雨がゆるりと洗つてる  
連休中もう出掛けない家が好き  
秋の雨そつと寒さを連れて来る  
九十歳もう其処ですよ振り返る  
若い風欲しくて街に顔を出す

鳥取県 齊尾 くにこ

ひと粒のことは私の杖になる  
紅いバラ野望リストへ追加する  
気付かれぬまま無灯火の恋は去る  
くりかえし言われたかったことを言う  
きみは葦わたしトンボで来て休む

鳥取県 竹信 照彦

老人力一票あるぞと凄んでみる  
原発は止めて自然の電気力  
地方創生地方が案を出せという  
東京を地方分散出来ますか  
年の瀬を渡る船賃あるかいな

鳥取県 西谷 悦子

旅する落葉人間社会どう思う  
追憶の彼方アルバム呼び覚ます  
アルバムを開くと揺れる青春譜  
心の中で独り言いつも言う  
五歳児とたしざんごっこ遊びする

鳥取県 細田 裕花

取り敢えず世間話は簡条書き  
スタンスに合わぬ事には近づかぬ  
太陽の色ゲットした柿光る  
日溜まりの畑で至福ティータイム  
大丈夫夕焼け空が笑ってる

鳥取県 松川 行男

本代が嵩むが散歩書店迄  
大学も慌てだしてて応募者に  
銀行が貸してくれるに訳があり  
芋食わぬ家族に一人戦中派  
明日からと寝込んでいたら除夜の鐘

鳥取県 山下 節子

戦争を知らぬ子供のオモチャ箱  
じゃんけんで白黒つけてくやし泣き  
遠巻きに見ているだけの事件起き  
暗算で銭勘定はまだ出来る  
御嶽も激しさ内に秘めていた

鳥取県 山本 正光

杖もてばアクセサリーと他人が言う  
老人が増えて豊かさ崩れぬか  
赤珊瑚取られ放題いい日本  
歳だなあ賀状の数が減ってきた  
割れものとは不発弾提げ老いの坂

松江市 錦織 禮子

紅葉に咲いた桜も同居する  
田舎都市学生街も慎ましい  
風邪予感くるくる寿司も進まない  
園児らの散歩可愛い宝もの  
しまねっ子上位をゲット弾ませる

松江市 松本 知恵子

天翔るひらめきがふとベンに降る

秋晴れに作り顔して抹茶席

九回裏塩飴なめて押し切ろう

現し身に月光が降る秋の夜

落ち込んだ胸にやさしい母の声

松江市 松本文子

今夜も独りお酒飲もうかお月さま

火のような人だそうつと遠ざかる

待つ時が楽しかったね祭笛

ゆっくりせよと言われ長生きしてしまふ

静かな影だ昨日出逢った風だろ

松江市 三島 崧 丘

無為無策金時飴の日が続く

はらわたを晒す男になるために

リベンジへ日に百回の四股を踏む

冬將軍へ真つ赤な鎧身に纏う

故里の虹の裾野にひとり佇む

出雲市 石倉 美佐子

一ヶ月かけて私を編み上げる

昔々は綺麗に揃っていた編目

遠くの町に移った友も若くない

幾度呼べばそこまで通じるのでしょうか

人生五十年それから先は神の手に

出雲市 岸 桂子

風呂敷をキュッと結んで義理果たす

水溜まり何度も越えて今がある

今日もまたわたしを溶かす辞書を繰る

言い分はあるが妥協をしてかえる

老眼鏡かけて恋の句作ってる

出雲市 多久和 敬子

青い空争いごとは似合わない

揺れ動く心沈める仏間の灯

まだ欲が消えず長蛇の列に居る

ここだけの話川まで飛び越える

物忘れ互いに笑い今日も暮れ

島根県 伊藤 寿美

中島みゆきの唄朝ドラも始動する

わたしを試す雨降り続く降り止まぬ

可も不可もない一日ひよいと裏返す

徘徊の老母を見つけてワツとなる

少女Aもひめゆり隊も同い年

広島市 岸本 清

神風よ密漁船に吹いてくれ

道徳の教科化は先ず永田町

優しさは言葉の壁を取り払う

人情も肴屋台のコップ酒

没句でも自分の好きな句は幾つ

府中市 藤岡ヒデコ

過去になる月日に悔いが少しある  
ナツメロを聞いてひと時想い出と  
人生いろいろ静かに語る秋の月  
八十は越えてみないと解らない  
一年の早さを止める堰が無い

宇部市 平田実男

洋食も和食もみんな箸がいい  
二桁を割って淋しいクラス会  
握力は減ったが盃は握れ  
来春の選挙へ事務所もう動く  
植山へ送り届けた子の自慢

東かがわ市 川崎ひかり

倅せの中でうたた寝くり返す  
孫のためせつせと溜めるベルマーク  
天辺を取れぬ私の妥協ぐせ  
未来への夢語り合う手話の指  
御嶽の御霊に雪が降り積る

大洲市 中居善信

少女ハイジが傘寿の脳で生きてる  
割り箸の意地真つ二つには割れぬ  
病院の梯子のあとのラーメン屋  
古希という節目にガンが着いていた  
少しずつ光が見えた転移なし

西予市 黒田茂代

風鈴を仕舞って秋の窓にする  
いい季節花瓶の花が元氣いい  
寒空に意地でひまわり咲いている  
切手張るいまだ兎と切れぬ縁  
空想の翼広げて自由旅

松山市 古手川光

一年がこんなに加速する老化  
バトンタッチしようきれいにして地球  
想い出を手繰ると故郷の山河  
冬眠する蛙うらやましい齡  
少欲知足健康願う初詣で

高知県 小澤幸泉

ひもじさと戦が残る「昭和の日」  
乱高下そんな日もある血糖値  
バイブルを座右に独り老いの部屋  
腰痛がまた暴れ出す秋深し  
秋雨が友また一人連れて逝く

唐津市 坂本蜂朗

夜の部の主役社長に認められ  
妻や子の笑みが見たくて忙しい  
傘寿前老人会はまだ早い  
やつれてる友に気付かぬ顔で去る  
妻の優しさは分かるが出る吐息

唐津市 山口 高明

英霊がいくさ鼓舞する理由も無い

大胆に柃目食み出す男文字

同郷の誼みと便宜図られる

欲しいのは安全よりも交付金

何時からか同床異夢の夫成りし

熊本市 永田 俊子

昔は太陽だった女性よ叩け太鼓を

青春謳歌すぐ年とるよアーメン

言うたらあかんよ気ままな風が聞いている

なるようになった私のリハビリぐらし

悪い三面記事におどろかなくなつた鬼

熊本県 高野 宵草

自家用車散歩も辛い脚になる

補聴器を外して会議拒否をする

善意とは思えど強制されて嫌

老人ホームお世辞重ねて引き廻す

内緒だがどこまで阿呆な私かな

札幌市 小沢 淳

歳月で角は取れたが短気にも

期待はしない失望しないため

交渉に玉虫色の落しどこ

鳥盗られ子を拉致されて頭下げ

時は立ち止まったりふり返る

弘前市 浅田 隆樹

来春の作付け想い豆を選ぶ

正直に生きた証しか根の白さ

みちのくに生きる楽しみ菊を摘む

初雪にもうひと仕事干しダイコン

霰でも霰でもない初雪の凜

弘前市 稲見 則彦

数よりも中味で挑む年賀状

偏差値にゆらぐ少女の志望校

待ち合せ無人駅ではどうかしら

真実の中に紛れる嘘ひとつ

鈍色の海だ折りが聞こえない

弘前市 岡本 花匠

光明へ感謝の祈り十三夜

台風の避けてリングの夢叶い

温泉で前向きになる胸の内

瞑想の侘寂守り生き延びる

新米の味にはほえみ菊薫る

弘前市 今愁 女

一日を家事と趣味とを半半に

虎落笛電気毛布の寝につく

夏の暑さ冬の寒さも電気器具

日に五千歩はスパー買いでマスターす

食事以外二階落ちつく老いぐらし

弘前市 須郷井蛙

公民館ガラガラ村のお荷物に  
朝の鐘打てば聞こえる亡母の声  
毎日の変化嬉しい母子手帳  
プランターの青がわが家の保健葉  
里帰り心安まる森がある

弘前市 高橋洋子

落葉はらはら老いて日暮れは淋しいね  
不意の客茶菓子を持って来る和み  
ためらいの背中押された大丈夫  
土壇場で妻に閃く神通力  
八十路越え病とだけは縁が無い

弘前市 福士慕情

コスモスの大合唱を聴く川辺  
寂しくてコスモス群れの中で咲く  
七転び八起きコスモスから習う  
命ある限りコスモス立ち上がる  
コスモスの海で告白待っている

青森県 松山芳生

神々信じます自然分婉です  
お嬢さんと言われ脱皮できません  
笑顔満開万歳のかたちして  
人を恋う花びらひとひらいいかおり  
小細工が過ぎて真っ赤になっちゃまう

(前月分) 藤井寺市 増井ヨシ枝

ドングリを一ツ拾って小さな秋  
落ち穂拾いに亡母の姿を重ねみる  
避けて通れぬ川一本が流れてる  
機嫌よく転んでいます手の上で  
入院し脱皮しました痩せました

水煙草

(つづき)

長岡京市 日置みどり

思い出と腕組み廻る我が廃家  
人間の進化過程を孫で知る  
仲良しに見えて寂しい濡落葉  
ワンコインためて実現空の旅

(前月分) 三次市 伊藤寿子

コーヒーの一服自分取り戻す  
手鏡へ微笑み良しと店に立つ  
お菓子屋へ生まれた定め見るのれん  
DNA孫へ商人血筋見る

エッセー募集

一行 18字 65行

原稿の採否は編集部に一任願います。

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

⑫

木津川 計

### 丸腰と袴がるスマホ使えぬ士

村上 玄也

困む小田原城が落ちない。和戦するか否か、城内での評定はゆきつ戻りつする。謂う所な小田原評定である。そのとき軍師官兵衛は丸腰で出向き、大手門で名乗った。入った城内で北条氏政に告げた。和睦すれば子孫は再興の道を与えられようと。氏政は切腹。秀吉は悠々入城してなった天下統一である。

丸腰の官兵衛は無手勝流。同様に今号村上玄也さんも言う。「スマホなんかゆめゆめ持つなアホになる」と徒手空拳の心意気。

### 敗北感だけを残したアドバイス

片山 忠

IT革命が宣伝された二十年も昔、適応できない人間に見舞う経済的損失なるアドバイスを僕も受けた。そんな馬鹿などバカにしていたら先日も新聞で知った。株の売買を一日中繰り返すデイトレーダーの男(31)は今年

も11月末時点で6600万円の利益!

丸腰のアナログ人間の僕だが、英文学者の中野好夫の言「語学ができるほど馬鹿になる人間が多い」の「語学」を「スマホ」に代え、忠さん、敗北感を一蹴しましょう。

### どう知恵を出しても貯金できぬ老い

夏目 一粋

おうい雲よ/ゆうゆうと馬鹿にのんきそやぢやないか/どこまでゆくんだ/ずっと磐城平の方までゆくんか

多く雲をうたった詩人・山村暮鳥は肺病で咯血、キリスト教の伝道師を失職して貧窮の中で作詞した。「妻よ、貧乏だから、こんな良い月が見られる」と。知恵を出しても貯金できない老人はいっぱいいる。だから一粋さんも「妻よ、貧乏だから、こんな良い句をつくれる」と、実際、貧乏は傑作の温床です。

### 秋夜長ヴェルレーヌの詩中也の詩

鈴木 いさお

堀口大学の訳詞「秋風の/ヴィオロンの/節なき啜泣/もの憂き哀しみに/わが魂を/痛ましむ」より上田敏がどれほどよいか。「秋の日の/キオロンの/ためいきの/ひたぶるに/身にしみて/うら悲し」。が、中也は難しい。「トタンがセンベイ食べて/春の日の夕暮は穏やかです/アンダースローさ

た灰が蒼ざめて/春の夕暮れは静かです」

秋の夜長にいさおさんはこんな詩を読まれる。川柳が詩から学ぶべきものは多い筈だ。

### めでたいと言っておくしかない長寿

高瀬 霜石

「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」。長寿もまためでたくもありません。めでたくもなしに当節はなってきた。迷惑がられ、疎んじられる老人の話を聞くとその人の人生とは何だったのかを考えてしまう。他人事ではない、僕も社会保険庁には歓迎されざる老人になっているのだ。

安心して年をとれる、そんな世の中でなければ、霜石さんをますます苦しめるだけです。

### 何をしに行くのか階段の途中

俣野 登志子

物忘れが進行、階段を降りながら「ケータイ、ケータイ」「○○の本、○○の本」と唱えながらでなければ登志子さんのように僕も「何をしに行くのか」わからなくなる。

麻生路郎は「二階を降りてどこへいく身ぞ」と、同じ降り方でもスケールが違い、中身の異なる句を読んだ。二階から下へ、で物忘れから生き方の明日までを問うことができる。登志子さんは老化の日々を、路郎は人生をどう生きているのかと。(「上方芸能」誌発行人)

# 白選集

小島蘭幸

我が一句高野の杜と響き合う  
師の声がある川柳塔碑の高さ  
会うたびに威厳を増してくる塔碑  
塔の絵を飾って書斎初春にする  
側にいるだけでやさしくなる羊

林瑞枝

見つめると一寸はにかむ飛天の絵  
水甕を満たしつづけている生命  
夢を未だ耕す種を播いておく  
アンネの詩平和を守るバラが咲く  
精いっぱい今を生き抜く蟻の列

前 たもつ

恵まれて初冠雪の富士に酔い(26・10・16)

初めて聞くそんな話と身内旅

忍野八海伏流水に人の列

伊豆朝市ここはやっぱり金目鯛

下田来て日本の夜明け了仙寺

政岡 日枝子

注連縄をつけ初詣でへと走る  
マイカーも私もとろとろと老いる  
不調和音車も休みたいらしい  
私も車も無理に動かされ  
何処へ行ったか 車黙っていてくれる

三宅 保州

今年から今年こそはと言いませぬ  
探さないで下さいますか三が日  
あと幾つ寝るとおさらばかと思う  
手が届きそうとどこかぬ蜃気楼  
予定という鬼に追つかけられている

宮西 弥生

ゆき届く両手がいつも光ってる  
高齢者そうだわたしのことなんだ  
楽になる なると季節を走ってる  
人肌が恋し雅な秋の章  
外向きと内向きにある笑顔です

八木 千代

身の上ばなし

浮雲がぼつりと話しかけてきた  
話しましよるか親も通った地獄みち  
太陽と時々逢っていたものの  
でもね でも視線はいつも空に向けた  
今ここに身を置くことがすべてです

両川 洋々

国境の鳥が敵意を漲らせ  
病床の僕の背中を春が押す  
泣いてなどおれぬ今日炊く米が無い  
マジかいな生前葬をやると言う  
命の一句吐いたら逝くと決め

板尾 岳人

初日の出波が転がる夫婦岩  
生かされて六白金星五十鈴川  
存命の喜び日日に楽しまん  
宇治橋の温みを渡る伊勢詣  
鯨音がひびきメダカと三ヶ日

奥田 みつ子

年明ける明るい顔で福を呼ぶ  
慌てずにゆったり過ごす老いの日々  
思い出は金木犀の香る道  
日曜大工釘打つ音を楽しんで  
国なまり母の笑顔が目には浮かぶ

河井 庸佑

摩擦避けここは一先ず退くとする  
ほろ酔いが互いに誘い梯子酒  
程程に問い詰め母に諭される  
追いつ越せる力を溜めて時を待つ  
便り来ぬ孫は達者と読んでおく

川上 大輪

助手席に乗ると筋肉痛になる  
元気でしたよあの角を曲がるまで  
退屈な一日なんと贅沢な  
財産はいっぱいあるぞ五七五  
遺産分け句集は誰も欲しがらぬ

小西 雄々

年あらた私リフォームするつもり  
歯並びを褒め温度差の返事くる  
寂しさを午後の紅茶でまぎらわす  
体重は減りたよりない力瘤  
雪おこし聞いて除雪の苦を思う

斉藤 劼

ストレスがすかっと抜ける冬火花  
子と夢を語り合つてる冬苺  
席譲る少年の瞳が美しい  
のびのびと演技を決める一輪車  
澄んでいる瞳大物かもしれぬ

新家 完司

野球帽斜めちよいワルおじいさん  
台風に耐えた林檎がびっかびか  
墓掃除なまけたせいか没続き  
僕だってしんみりとする秋の暮れ  
なぜ転けた振り向かないでまた転ぶ

津 守 柳 伸

大掃除する気になれば雨が降る  
ティータム雑用ばかり駆け巡る  
ワープロが使えずうなされる賀状  
松茸も栗も二三度食べて冬  
従兄弟から届く新米天日干し

遠 山 可 住

成人式父似母似の顔になり  
先輩のおかげは酒が強うなり  
パツパツと叩いてばあちゃん出来上り  
七生報国酔えば軍歌が口に出る  
周りから卒寿卒寿とささやかれ

都 倉 求 芽

狙つてる鴉へお供えむなしくて  
亡くなれば怖いお人も懐かしい  
リタイアでもらったありがたいゆとり  
ここまで来たら守りきりたいマイベース  
元気ならどなたからでも貰います

土 橋 螢

衆議院解散も正義なり  
にんげんらしく笑ってさようならという  
割り切れぬ数字が並ぶ十二月  
友情を真ふたつにして雪こんこ  
あお向けに寝て死ぬこととみつけたり

西 出 楓 楽

雨の日は雨 風の日は風になる  
外国語喋る松茸食べている  
和ませるジョークは軽い方がよい  
覚えてるから忘れたと言っておく  
字余りと字足らずで日々暮れてゆく

仁 部 四 郎

そこまでとそこから今朝は見えていた  
そこからが苦勞の汗が光るはず  
先達はそこから独りで行きました  
そこからは予算のレベルでない話  
そこからと世論は見きわめたいのです

波 多 野 五 楽 庵

合掌の指からもれる涙かな  
病み抜けの足をいたわる山茶花よ  
心にも雪降りつもる不倖せ  
雪しんしん恨みが少しずつ消える  
雪女おぼろおぼろの月夜にて

第146回  
大阪川柳の会

日時 2月17日(火)午後1時開場・午後2時締切  
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室  
宿題と選者(各題2句・席題なし)  
△「駅」前「赤井」花城 △「危うい」久保田半蔵門  
△「しかり」片山かずお △「騒ぐ」住田英比古  
会費 1000円 欠席投句 2月26日まで 会員に限る  
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706  
本田智彦宛

## 第64回 西大寺会陽川柳大会

と き 平成27年2月11日(水)

午前10時開場

投句締切 午前11時30分

ところ 西大寺ふれあいセンター

(JR赤穂線西大寺駅徒歩7分)

会 費 1500円(発表誌・記念品呈)

各題2句(欠席投句拝辞)

### 兼題と選者

「重たい」 新 家 完 司 選

「これから」 みぎわ は な 選

「傘」 山之内 さち枝 選

「抜く」 鴨 田 昭 紀 選

「茶」 恒 弘 衛 山 選

「栓」 三 宅 能 婦 子 選

「糊」 牧 野 ねえね 選

席 題 (当日発表) 野 鳥 全 選

主 催 西大寺川柳社

## 第35回 ときせん賞作品募集

作 品 雑詠 2句 (未発表作品)

選 者 大野 風柳 森中恵美子

河内 天笑 赤井 花城

平山 繁夫

締 切 1月20日(火) 当日消印有効

選句方法 無記名清記の上、選句1句ごと  
にその合計点で順位を決定

発 表 時の川柳誌 4月号誌上

賞 ときせん賞 1名

準ときせん賞 2名 佳作 7名

5月10日(日)

時の川柳交歓川柳大会で表彰

応募方法 便箋大(B5)用紙に作品2句

郵便番号・住所・氏名・電話番号

・所属柳社を明記同人・誌友

外の区別を明記のこと

応募料 1000円

応募先 〒675-0019 加古川市野口町水足1160

岡田 篤 宛 時の川柳社

## 温故知新

『谷垣史好句集』より

恥ずかしいほどちっぽけなゴミを出し

くちばしの黄色い女古い師

ナマケモノという動物がおり安心す

十代の眩しき肌や原爆忌

墮落して犬のにおいのしない犬

センサーが働きコノヒトイヒトダ

ニコニコと総理の職が楽しそう

尿は冷たしおしっこはあたたかし

パリュームを飲みなれるのも淋しけれ

幻覚か柱時計が鳴っている

なつかしき見舞い明石の焼あなご

烏かあーお前は無責任野党

蕎麦食へばそこに池波正太郎

地球揺ると難民がこぼれ落ち

蟬三日蛩二十日の尊厳死

あの世から密書が届く出かけねば



西出楓楽選

鳥取県 下田 茂登子

保証ない命に今日も欲の皮  
不要品処理にも金がからみつく

減額の年金通知ちゃんと来る

一人寝の寂しさ誰に告げようか

表札も変り息子の名が光る

副作用解つていても飲む薬

和歌山県 森 下 よりこ

どん底まで落ちねば湧いて来ぬファイト

泣き落としという手今でもあるんだね

密漁にしては堂々船団で

世界のニュース見るのがいっち面白

草食系で長生き出来ているらしい

私色で生きております一人住み

大阪市 柴 本 ばっは

女系ですみんないらちでよく転ぶ

転ぶなよいつも亡夫が言ってくれ

ほしいもんいっぱいあって母元氣

おいしくてついつい油断してしま

急がば回れ乗りおくれもいいのだよ

残り少ない人生急行は止める

八尾市 中 岡 妙

古稀すぎて心から笑みこぼれ出す

良く笑い遊びなさいと老いの知恵

老眼になってところが読めてくる

ひとつずつ重り外してゆく渡世

ネジ少しゆるめて笑うネタ探す

ふり向けば向かい風です前を向く

北九州市 小 松 紀 子

亡母さんの後姿は愛である

婿からの手紙うれしい誕生日

つらかった心の痛み後の糧

ままならぬ事も受けとめ生きて行く

すべてに感謝七〇にして言える

鳴かずとばずでも好きです五七五

名物を頂き旅の聞き役に

外税の店で脳トレしています

霧囲気に押されて返事してしまい

一番に軽さで選ぶ老いの靴

腰掛けのつもりが根付く破目になり

日溜りに枯葉寄り添う冬に入る

松江市 山根邦代

おしゃべりが元気の元になっている

体力は落ちても気持ちおとさずに

この痛み知ってる人と話したい

立冬の声に炬燵がほしくなる

長生きは元気に笑うことだとは

窓ガラスうたがう程の霧の海

豊中市 源田啓生

チョイ呆けが脳の隙間に突き刺さる

一切無そこに心があるかぎり

ナツメロが記憶の糸を紡ぎ出す

文楽のあの芸術はどこへ行く

大木になれない樹でも葉はもみじ

誰のより旨いな妻のにぎり飯

豊橋市 藤田千休

適齢期過ぎて間口を拡げだし

インテリと言われてからの肩の凝り

古文書を斜め読みして秋深む

与党席口にチャックをするハト派

誘われぬ花が萎れる戎橋

細波が皺を隠した水鏡

唐津市 北村松風

箱物と赤字ふやして御勇退

日本国出たことなく母は逝く

薄墨の毛筆使う悲しい日

携帯の見えぬ首輪につながれる

夕刻の半額の品酒の友

懐が寒いと余計背が曲がる

小野市 田中辰夫

子の背中時々親が顔を見せ

どや顔の創作料理味見する

按摩機が小さな部屋の王子様

苔むした人も疎らな山の寺

晩秋に鈴なりの柿過疎の村

夕焼けの色も匂もない都会

豊中市 貝塚正子

除夜の鐘反省せいと聞こえます

初夢は七福神と飲むお屠蘇

庄助さん真似てすごした三が日

雪だるま一人の夜は淋しかる

羽織裏男の粋をしょっている

預金より先に増えてる体脂肪

大阪市 宇都 満知子

命から命涙で赤子抱く  
物持ちがいいのか風邪が治らない  
落葉にも堆肥になるという役目  
六十路でもまだ伸び代を信じたい  
新幹線に負けぬ早さで一年が

大阪市 太田 としお

一日がとて短くなりました  
八ッ勝ち七ッ負ければ最高だ  
ひと言が一日付いて離れない  
友よりも親子関係むつかしい  
たかが野球されど野球の甲子園

大阪市 高杉 力

思い切り性格出てる車間距離  
妻と娘で旅も車も家も決め  
取説は同じ所で眠くなり  
少しならいいよと医者が言ってくれ  
治療力は天下一品次の恋

大阪市 田中 ゆみ子

鉛筆を尖らせて吐く小さな火  
こんな時斯うしただろ母ならば  
ペットには優しい声で呼びかける  
凭れないで支え合って生きたいな  
紅葉前線冬を迎えるおもてなし

大阪市 寺本 実

二人なら時を気にせぬ雨やどり  
出しかねてポストの前を通り過ぎ  
竜巻に飛ばして欲しい過去がある  
いちびつて無くした友が一人いる  
憎しみも親しみも今セピア色

大阪市 松田 聰

認知症いい呼び方はないですか  
ありがとう笑顔で言えば広がる輪  
人生は正解なくておもしろい  
好景氣中流以下に届かない  
一万歩これがなかなか難しい

大阪市 宮村 満壽恵

母の愚痴耳をかさぬも若さゆえ  
幸せと思えるほどの青い空  
墓まいり菊一色の秋日和  
三教授LEDでかがやいた  
万歩計数字が示す健康度

池田市 上山 堅坊

一行詩に描き出したいわが宇宙  
飾り無いメール意外な本音吐く  
見え透いたとほけを許し座が和む  
慌てるとバックギアにと入る脳  
跡継ぎがないまま里の床柱

泉大津市 助川和美

あの頃はすべてを親のせいにした  
ごめんなさい老母を施設に送り出す  
ひよっこりと来た息子まず腹へった  
どんぐりをふんで街道秋日和  
生きる目標東京五輪観てからと

貝塚市 石田ひろ子

透き通る風の街角秋になる  
散歩道仲よしになる辻地蔵  
銘銘のテレビ家族を速くする  
挨拶は持病の話から始め  
買わないと損したような特売日

貝塚市 吉道あかね

痩せなさい歩きなさいというカルテ  
執行猶予三ヶ月後の再検査  
安くても中国産は買わぬ主義  
包丁を研いでトマトの試し切り  
少し派手な服で一日落ち着かぬ

河内長野市 大島友子

山を前に頂上目指す力こぶ  
坂を前に無理だへなへな座り込む  
死を前にまだまだ生きる明日を見る  
歳重ね大事な物が見えてくる  
歳重ね一人も良いな思う日日

河内長野市 藤塚克三

妻通帳俺は株価を睨んでる  
怒る妻に心宥める隙がない  
判りましたと返事は良いがそのまんま  
縫い代がとれず暮しが綻びる  
へそくりの論吉の基地は三つある

堺市 近藤治子

グリコ背にゴール輝くLED  
ゴールには絶景待つと坂登る  
休耕田コスモス咲かせおもてなし  
耕して土の臭いの中に立つ  
耕した畑でみみず深呼吸

堺市 山崎早苗

つつ走る人生にこそ句読点  
心齋橋わたしの方が異人客  
今日はイヤ！デイサーピスの不登校  
ティファニーでこのペンダント目が合った  
湯豆腐とあじの開きでクリスマス

堺市 大和峯二

戦力外自覚しながらなお努力  
逝く日まで川柳友にボケられぬ  
戦せぬ国を願えばしゃんとなる  
胸中は生きてる限りチャレンジャー  
あきらめず置かれた場所で咲いている

四条暖市 西川 ひろし

フクシマでみのりの秋はいつ来るか  
霜月に若者派遣道暗く

秋の月ひときわ冴えて老いひとり

残飯を捨てる日本をガザの子は

マララさん無人機でなく教育を

高槻市 松岡 重子

北国の母へせめての灯油代

新しい家族がお腹けつっている

コンビニへ夫託してさあハワイ

ああこれが母の香りだへちま水

社交化の裏でぞうきん乾いてる

豊中市 荒巻 夢

味よりも思い出強くむかご飯

加齢臭残る夫の部屋愛し

どろどろのドラマ時には懐かし

数独で脳のもつれがひどくなる

棲みよさはいたち時時駆ける街

豊中市 上出 修

凶星でしよ妻の言葉に目が泳ぐ

表より裏地に凝った粋な人

軽い椅子だね不祥事でまた替わり

ラブレター昔短歌で今メール

インフレへ黒田バズーカ第二弾

羽曳野市 磯本 洋一

秋暑し Deng 怖いと重装備

公園に赤いリボンの百日紅

医者でなく財布がカルテ酒煙草

秋日和落葉のマットで猫昼寝

備長炭燻でなくて秋刀魚焼く

羽曳野市 藤原 大子

ひたひたと迫り来る影物忘れ

落とし物足もとにあり気付かない

超されても嬉しい孫の背の高さ

誉められて返す言葉も誉めている

まあまあと言ってる顔は満足気

羽曳野市 安本 美喜

鍋シーズン活気の街の蟹グリコ

片づけてなお片づかぬ師走なり

元旦や夫の手を借り教会へ

娘と孫に年玉袋数う幸

叱咤激励されてみたいよ秋深む

寝屋川市 岡本 勲

軽い口たたいて空気重くする

ごめんねのねが軽いから許せない

雨降らせゴメンと空は虹をみせ

婿養子家訓の高い壁に泣く

うちの会社社長以外はみんな平

枚方市 松原 保

矢が3本毒矢無いこと祈る今  
亡国のギャンブルですよ日銀さん  
訪問国バラマク金は税金だ  
密漁はこそそそつとやるもんだ  
国策が長か半かが目立ちます

八尾市 田邊 浩三

広告がニュースに迫る新聞紙  
眠るのが楽しい歳になりました  
遠近になったと息子メガネ見せ  
腰痛の私に壁は命です  
神無月神社参りは止めとこう

大阪府 畑中 節子

錦絵のような城山昼の月  
銀杏の葉秋告げる如一葉舞う  
独り居に煮物自賛の大根煮  
瀬戸の海小島紅葉のあざやかさ  
白壁に影くつきりと柿すだれ

神戸市 木村 忠義

生活のリズム乱れる休刊日  
都会でのほくのオアシス大書店  
元気になる欲張りがやって来る  
妻の居ることを友から羨まれ  
こたわれば夫婦の相違豆腐にも

神戸市 山根 弘子

地図にない人生の迷い道  
里帰り母の涙の残る駅  
人生の終着駅を途中下車  
世界地図書いた息子が二児のパパ  
夢ばかり追った昔をなつかしむ

加西市 中川 修

低金利タンス預金が増えてゆき  
老人会米寿の人は若い方  
新生児起きて煩い寝て寂し  
泣く議員逃げる議員は選ぶまい  
さき酒を飲み過ぎ銘酒当てられず

川西市 大坪 一徳

売り買いをされる会社に身を預け  
欲の皮突つ張り過ぎて騙される  
家内安全鎮座まします山の神  
ピフォーアフター個人差有の但し書  
平日は年金族が闊歩する

川西市 日野岡 和之

言いたくはないが安倍さん手前味噌  
原発がゼロでも平和八月忌  
温泉が火山の余禄と再認知  
泣き言は書けない本音実録記  
石よりも痛い噂のお節介

篠山市 藤井 美智子

南あわじ市 萩原 狸月

真の友心手ぶらでつき合える

ちよつと無理すると年齢顔を出す

この手から亡母天国へ永遠の旅

食べ物も言葉も口の匙加減

一人居の一番風呂としまい風呂

三田市 足立 つな子

向かい風追い風にのり今日がある

おめでたい染めて染められ五十年

握手して心の闇がすつきりと

日課ですバランスポール腰をかけ

ケーキよりおはぎが似合う歳になり

三田市 今西 廣子

歯ブラシが二ツ並ぶも今の内

酔ってきた妻が美人に見えて来た

家族には世話にならぬと車椅子

やっかいな身体の中の水溜まり

紅葉に私も負けぬ胸の内

三田市 上田 ひとみ

何もかも笑ってすますはずでした

桐タンス母のあの日が蘇る

マドンナはやはりきれいなままでした

さあさあと高みで勝負見えています

認めればなんて楽しいこの世界

北風が笛を吹く夜は子に電話

情報の海に溺れるデジタル派

子の厚意無理して食べたフルコース

鷹揚に育った人か句がまるい

バッグだけフランス人は笑わせる

奈良市 尾畑 なを江

あかさたな夢が一度にこぼれ出る

猫二匹おめざちようだい午前四時

コロコロはちよい掃除にはもってこい

おおそうかそうかの義父の声がする

一度きりこの人生の尊さよ

奈良県 谷川 憲

ハックシオン鼻がムズムズ何かある

予定表犬の検診入れてある

閑そうな顔妻の前ではしない

怒るならニュース見るなど釘さされ

夢で見る古里いつも晴れわたり

和歌山市 北原 昭枝

華やかな過去を秘めてる万華鏡

愛嬌のひとつと思う顔の皺

ほどほどの重石で漬かる夫婦仲

一幅の静けさの中柿熟れる

金婚をふたりで祝う菊日和

田辺市 大崎 可動

障害の足でたたらを踏んでいる  
風は狂いて絶叫ばかり吐き捨てる  
生ぬるい風は迷い子かも知れず  
自画像の首から下はカルテの譜  
夢枕背筋を走るものの影

田辺市 小川 イセ

線香花火生きろ生きろと丸く落ち  
スランプだゆっくり休む事にする  
皆既月食幻想の世にさそわれる  
運勢を素直に受けて登る坂  
八十年受けたご恩に報わねば

鳥取市 大前 安子

つづら折りゆっくり歩く陽を受けて  
シグナルの黄とにらめっこ無理するな  
ご破算で願いましてはまだ出来る  
夫婦です違ふ歴史に歩を乗せる  
釣り針の疑似餌に罪はないだろう

鳥取市 坂本 とも湖

川柳は死ぬまで続く戦争だ  
負けはせん尖閣諸島手離さぬ  
テロと内戦神も最近気が重い  
狙いつけ他社の人材引っこ抜く  
秋深し党の進路が決まらない

鳥取市 津村 律子

里ごころ松竹梅を抱いて行く  
真つ青に広がる空へ弾む胸  
捨てた恋軽い会釈で擦れ違ふ  
年金で充分ですと言いいにくい  
ダイヤモンドも軽く見られる太い指

倉吉市 岡崎 美知江

あふれてる弁当箱に妻の愛  
野仏にお飲みなさいとコップ酒  
かめる歯と歩ける足が自慢です  
火の種になりそうなので消しました  
もめ事の火種は消せぬ消防車

米子市 生田 和之

十%になれば一円玉も泣く  
松茸を横目にエノキ買つて来る  
句読点打つ数増やし老いて行く  
ワ行までたどり名前が出て来ない  
大宇宙ヒト科が支配して良いか

米子市 永井 三津子

箱入りの嫁が来てから胃が痛む  
数十年松茸様に縁がない  
議員数減らさずに税絞る取る  
出雲大社参拝するがまだ独り  
阿弥陀堂亡き母恋うる風が住む

米子市 見山 温子

へそくりの在りか見つけて謎かける

一病に歩幅が狭くなっている

一病に痩せて美人になったとき

赤い羽根年金ポトリおすそ分け

人人の波の中にもある孤独

鳥取県 田口 清帆

川柳で心が広く丸くなる

久し振り笑顔作るが名が出ない

溜息をつけば幸せ逃げてゆく

いい夢のつづき見るため眼をつぶる

隠しても心の闇を照らす月

松江市 中筋 弘充

部外秘のひとつが妻の胴回り

女医さんが当番だから行く内科

立冬を過ぎておでんが旨くなる

水虫が既得権言う足の爪

とりあえずといつも言われているビール

岡山市 丹下 凱夫

百均のメガネで足りる斜め読み

言うことを聞かない僕の影法師

カミソリのように秋冷やってくる

狐が出たらしい蕎麦の花月夜

十三夜男女のことは不透明

岡山市 藤成 操江

夢が好き懲りずに買った宝くじ

反省を積んでむかえる年の暮れ

ウォーキングいつもの人と会う小道

禁酒禁煙いっぱい書いて貼つてある

苦勞したあたりがたまに浮かぶ夜

瀬戸内市 東横 ますみ

素顔では平気になれぬまだ女

階段を上りきったら風になる

呑みこめぬ言葉わたしを眠らせぬ

道草の靴は日暮れを忘れてる

人が好き人が嫌いで不眠症

岡山市 池田 たか子

耳底の蟬に消される虫の声

バトンタッチ出来ぬ主婦業どっこいしょ

古日記めくれば恋のかげら鳴る

群れて咲く彼岸花にもある主張

煽やかにゆれてコスモス意地っ張り

岡山市 田中 恵

朝露を蹴って愉快なふくらはぎ

プライドが左と言えば右と言う

ペラペラと無口の策に引つ掛かる

軍配は無口な夫にひいきする

自画像にひとつ描き足す笑い皺

尾道市 日谷 寛

執念で張れよ張れよと心の帆  
あと一歩滾れたぎれと心の血  
妥協して下ろせ降ろせと心の荷  
いち早く捨てろ捨てよと心の負  
柳友がわんざわんざと心の輪

竹原市 若年 幸子

山頂から気まぐれの秋降りて来る  
独り居へ物が時どき行方不明  
指図することされる事無いひとり  
中国船ハイエナのごと珊瑚とり  
国会へ民意なかなか響かない

竹原市 六田 半徳

八朔の実り具合をヒョチエック  
お見舞に孫から届く縫いぐるみ  
病院で三食全て食べました  
一年振り入院終えて無事帰還  
人形がお帰りなさいと言うたよう

三原市 鴨田 昭紀

いつの日かさつと分かってくれるはず  
穏やかに暮らす余生の草書体  
言い訳に添える巧みな主語述語  
身籠って女の海が満ちてくる  
モノクロをカラーコピーにする美談

山口市 中前 幸子

静止画のよう真夜中の遊園地  
積み木の家に棲む人形は眠らない  
リリヤンの纏れを解く初冬の図  
ひとりの祭りへ華やかにワイン抜く  
幸運を一つ掴んだ流れ星

宇部市 高山 清子

建前に疲れた頃に出る本音  
親切もルールが無いと無駄になり  
ライバルは笑う目だけが笑わない  
夕焼けにカラスと帰る子はいない  
自分史にまだ書き足りぬ老いの夢

松山市 栗田 忠士

一刀が丸太に命宿らせる  
ぐつぐつと煮込む釘煮も幸せも  
舞い終えた木の葉が集う吹きだまり  
コスモスの揺れて詩情をつのらせる  
情念の糸が呻くか津軽三味

松山市 神野 きつこ

搭乗口に逢いたい人をすぐ見つけ  
デュエットで青春歌謡よみがえる  
自転車で観光したら会釈され  
三叉路で草花見つめ出会い待つ  
新米を囲み農家のおもてなし

今治市 渡邊 伊津志

山茶花の咲き零れつつ咲き通す

恋をする時の理性は別に置く

愚痴一つ零さぬ妻の地味好み

若さとはイミテーションもよく似合い

元氣な子対角線に靴を脱ぐ

唐津市 岩崎 實

若田さん大役果たしおめでとう

新米よ新茶ですよと先ず供え

再稼働紆余曲折のやむを得ず

しくじりの夢ばかり見る何でだろう

やめとけと言っていたのに損してる

佐賀県 門井 孝

日めくりの紙の薄さに急がされ

墓石を磨いて想う親の愛

薬では治らぬ過去を持つている

孫説教じいちゃん飲み過ぎ酒くさい

同窓会髪のうちさを競い合い

佐賀県 真島 久美子

嘘じゃないホントじゃないと散る紅葉

コスモスになって揺れたい人に揺れ

自爆するまでゆっくりと毒を吐く

バカみたい一人で蝶になるなんて

その嘘に気付く悲しい耳である

シドニー 坂口のり子

サラダ菜が花を付け出す熱い風

パラソルの影で句集の拾い読み

ジャズ流れるけだるい昼の昆布茶漬け

のし付けてくれても欲しくない男

ロックンロール聞かせながらの歯の治療

弘前市 吉川 ひとし

床の間の剥製夜に飛びたがる

線香の香り津軽の奥座敷

白鳥もスタッドドレスも雪を待つ

神様の通る道です開けておく

流れ星冬の宇宙へ吸い込まれ

東京都 高岡 弥生

近頃の肌の乾燥秋感じ

改めて人生プラマイゼロになる

忘れ物いよいよ子供心配し

プラス思考太陽いつもついてくる

旅立つ子昔の日記宝物

横浜市 川島 良子

脳年齢錆びてたまるか五七五

経験をしてみなければ判るまい

励ましは嬉しく時に疎ましく

先進医療に臨む米寿の選択扱

高齢化掃除おせちはプロ任せ

大阪市 浅井公平

焦るほど句作り頭空廻り

大阪市 橋本典子

秋の花なぜか憂いを漂わせ

一言で強気弱気が浮きしらず

秋雨は冷たく道に突きささる

妻強気兵糧攻めで夫負け

診察日花屋に寄つて癒される

同い年ノーベル賞で自信持つ

悲恋越え気づいて見ればメタボなり

大阪市 磯島福貴子

大阪市 藤田武人

妻の勘裏をかいてもお見通し

振る舞いのひとつに見える躰糸

浴びる程飲んでみたいが私下戸

上司から何度も聞いたそのくんだり

子や孫へ思いをつなく母の味

サイの目が僕の歩みを決めている

ケチツた分見晴し悪い旅の宿

スキヤンダル クールな顔で微塵切り

大阪市 内田志津子

大阪市 前川善之

それぞれが耐えたつもりの老夫婦

世間ずれ若者意味の勘違い

秋の風旅に出ようと追ってくる

駄洒落でも言つてはならぬ釘を刺す

カーナビが運んでくれる未知の空

大気汚染地球どっこい生きている

幸不幸それもいいさと高笑い

日本にもジャンヌダルクが出てほしい

大阪市 大治重信

大阪市 吉田知之

ゴキブリも住みやすいのかうちの家

杖つくと優しくされて笑顔出る

大阪の客で混んでる蜜柑狩り

あちこちを見回し乍ら句を作る

LED祝して仰ぐニューグリーコ

食欲は卒寿過ぎてもおとろえず

このコース引き返すには歳をとる

久し振り文楽をみてつい涙

大阪市 梅里南天

大阪市 若本安代

気がつくとテレビは今日もひとり言

声揃え昭和を歌う菊日和

とび散つた涙みたいなシミの跡

柿たわわ帰省を誘う祭り笛

男3人ノンアルコール酌み交わし

暮参りみ仏の声風の音

閉じ籠もり国憂う本読み耽る

ふる里で出合う優しい讃岐弁

河内長野市 穂口 正子

どっと疲れ皆に良い顔ばかりして  
来客中きびきび動く夫が嫌  
冗談で包んだ悪意顔を出す  
どこ見ても老人ばかり私もね

河内長野市 渡邊 修

おれおれが新手使って再稼働  
テレシヨップ高給ギヤラが熱演す  
医者にとり良い子になれば葉づけ  
実物よりうまそに見せるまわりずし

岸和田市 中岡 香代

無洗米やっぱり洗う清潔症  
北風に耐えあざやかな実千両  
気が付けば五感もにぶる更年期  
不眠症羊の数が増え続け

堺市 羽田野 洋介

まあまだまだ空気は読める年の功  
ほどほどなら酒はやっぱり良い葉  
降って湧いた噂話が本物に  
もみじの手いずれ万金掴むかも

堺市 増田 わこう

高齢者廃墟の日本復興し  
年寄りはお金持ちだとデマに泣く  
議員さん収支計算小学生  
議員さんヤジと拍手に政活費

高槻市 三谷 白黒

主夫するとボケませんよと妻が言う  
道徳は学校外で学ぶもの  
どうしてか爪髭だけは伸びてくる  
失敗をしてない人は未熟です

豊中市 荒木 郁子

それぞれに生きる道あり振りむかず  
お疲れ様夜間中学明かり消え  
華やかな話題振り撒き逝った人  
東京の友にハルカス自慢する

豊中市 石橋 優明

風呂の湯を沸騰させたことがある  
四つ足でふんばる机いとおしき  
ごみ箱が人待ち顔に口を開け  
永遠に地面に着かぬストライド

豊中市 南 正代

万歩計つけたその日はよく歩き  
バーゲンで予算の倍も買う羽目に  
柱時計夜中の夢の邪魔をする  
このクシヤミ小姑たちの嫌味だな

東大阪市 織田 登子

冷奴秋の気配で湯豆腐に  
つかいすぎの膝を愛しくなでさする  
電気消し月のあかりを一人じめ  
さあ今日もドリンク飲んで元氣だそ

枚方市 河田 洋子

雪便りそろそろ整理年賀状

お年頃そろそろ親を煙たがり

慌てるなそろそろ行こうマイペース

お迎えがそろそろなんてお断り

枚方市 坂本 ミヨノ

紅葉と派手な服装競い合う

吹く風に枯葉ひらひら酔い散って

雰囲気に溶け上品振る女

卒寿でも友との酒宴元気です

藤井寺市 田付 絹枝

鯖よんだ歳ばればれの敬老日

オープンのに列に情報乱れ飛び

炎天の行列可笑し欲と得

握手して話したくなる案山子展

箕面市 大浦 初音

人すべてこの世に使命もっている

煽てられガラスの靴が脱げません

のほほんと生きて鬱なし金もなし

外面が良くて家族を振りまわす

箕面市 寺井 柳童

ポケットにそつとアメ玉忍ばせて

地下道を往き来するたびティッシュ呉れ

物忘れメモしたメモが見当らぬ

苦しんで掴んだ夢は放さない

八尾市 前田 紀雄

友見舞ストレスダメと励まされ

作句中セールの電話無視をする

川柳で生きがい見付けポジティブに

タイガース夢は儚く散りました

大阪府 小栢 こずえ

生きて来て自慢するもの何もなく

無理押しして出来た喜び倍になり

断れば誘い来ぬかと義理を立て

ひらめいて今日の舞台を輝かす

大阪府 高木 道子

売れぬ家で主を待つて袖かおる

錦秋の里で控える冬将軍

長い脚畳みあぐねてつんのめる

教会のチャイム聞いている寺の庭

神戸市 井上 忠貞

ゆっくりの客にイライラ列換える

「一部」より「二部」がお目当て後援会

雲間から照らす光にありがとう

天高く秋を呼び込む鱈雲

神戸市 玄 番 美恵子

一部始終話して心楽にする

言い訳が澄んだ瞳を曇らせる

わだかまり解けた二人に茜雲

これからはゆっくりせよと母の星

神戸市 興水 弘

お転婆もみんな黄昏れ姫女苑  
大往生出来たらいいなメシ旨い  
自分史のどこを切っても母がいる  
カラオケに元氣もらって傘寿超え

神戸市 富永 恭子

南天の赤に寒さを救われる  
おとつとあらぬ角度で吹矢飛ぶ  
膝痛む明日はたぶん雨でしょう  
まちがえた道にも咲いていたサクラ

小野市 藤原 泰宏

世の中は矛盾を突けば切りがない  
失敗を勉強したと切り替える  
氣の利いた言葉を言えず汗をかき  
日が昇る昨日のことは忘れよう

加東市 黒崎 美紗子

雨もらい白菜のびる元氣よく  
デイサーピス時を忘れる笑い声  
送り迎え皆と出会えて有難い  
氣づかいを受け我が歳を考える

篠山市 佐々木 勇

高齢も忘れ無心の草むしり  
相撲にも苦手意識の見え隠れ  
定食のレジの音にも秋の色  
雑草に学ぶ私の人生訓

三田市 木村 マユミ

料理好きスパーめぐりままならぬ  
布団干し夜の寝床はポツカポカ  
快便は考える人スタイルで  
鍛えてる足がけいれん何してる

三田市 九村 義徳

満月が見つめないでと赤くなり  
月満ちて命のリレー母となる  
父さんの歳を越したよ墓参り  
うちのナビ地図を片手によく喋る

三田市 多田 雅尚

年金をゲームのように弄び  
好きだとは素直に言えず悪足掻き  
お土産や決ってトイレ奥にある  
年賀状刷った途端に身内の計

三田市 辻 開子

ダイエツト明日明日といつの明日  
ルージユかえ古希を機会に燃えよかな  
するされる介護に感謝教えられ  
たまに肉老いの体に活を入れ

三田市 野口 晶子

食べるため夢を引きずりする仕事  
チャレンジは夢への一步あるき出す  
夢を追うポエムじゃ国を換えられず  
無口だけれど暖かい夫良い笑顔

宝塚市 丸山 孔一

物忘れ思い出せればまだセーフ

この地球火責め水責め風汚染  
人類の後は地球に何が居る

祝日が雨で日の丸仕舞い込む

西宮市 株元 玲子

ありがとうごめんねどれもいいひびき

転んだらだるま笑顔で起き上り

腹立ちが笑顔と勝負叶わない

毎日毎日の泣き笑いドラマ

三木市 山口 久子

満月に家内安全お願いす

空高く静かな夜の十三夜

心地良い秋の夜長に五七五

空高く秋風のりて馬肥ゆる

奈良県 安福 和夫

愚痴らずにただただ平和祈るのみ

ワントッチ瞬時に動く世が怖い

海ゆかば歌う先輩ついに逝く

不老薬代わりにチョットと横恋慕

和歌山市 磯部 義雄

行列が女心に火を付ける

ごめんねと割り込んで来るおばあさん

家事育児多忙なママは無給料

老人と幼児仲良く縄電車

和歌山市 平田 元三

その気あるから合コンを駆け巡る

ちゃん付けて今も呼び合うクラス会

飲んだ量覚えてるならまだ飲める

海山の近くを避けて家探す

岩出市 村中 悦男

福袋客呼ぶ声も新しい

父母の遺影に先に初詣

娘には米寿の声で初電話

薬分け正月とても平常心

紀の川市 楠原 富香

脇役がいて輝いている主役

ごめんなさい神に任せた寿命です

嫁が来て料理の手順狂い出す

歩道橋ひと息ついてから渡る

鳥取市 高原 かおる

雨あがりラッキーだなと畑へいく

類似品よく見きわめて手に入れる

ストレスが私一人の乱おこす

あこがれの服へびつたりやせました

鳥取市 田中 天翔

めぐみさんもきつと見ているお月さま

取り柄ないせめて耳貸す人になる

お賽銭軽い音してバツ悪い

私のチャームポイント顎ライン

鳥取市 谷口 回春子

来迎は何時でも来いと覚悟決め  
爺婆の生活リズム孫が決め  
のろまでも確かに歳は一つずつ  
雨降れば地固まらず山崩れ

鳥取市 山下 凱柳

入選を信じ投句も没の山  
屈辱に耐えた我慢の糸が切れ  
人当りソフトな裏に潜む罠  
人生の謎解けぬまま黄泉の国

倉吉市 田中 紀美恵

さっぱりと句が浮かばない惚けたかな  
五十年前狙いうちされ今夫婦  
ひそひそと喋る言葉は悪口だ  
電話口オクターブあげ喋る妻

倉吉市 中村 毅

招待状出しても来ない福の神  
ときめきを今でも待っているハート  
外来語辞典を脇にニユース読む  
ほんとうに十七歳かマララさん

倉吉市 堀 かずこ

秋晴れにそろそろ散歩出ましようよ  
晴れた日は心うきうき歌も出る  
物忘れさては認知のはじまりか  
論吉さんせめて年金までいてね

境港市 中井 虎尾

小雨降る宍道湖薄く嫁ヶ島  
年金は削るしまたも増税か  
唄いたいだけどガマンのかくし芸  
名月もコインに見える空ザイフ

米子市 池岡 たけし

長生きをする葉には気負い立つ  
結ぶ手に少し汗ばむいい感じ  
親の恩八十路の今も自分の歯  
幕おろす無事な一年有り難う

米子市 小野 鶴子

悩む時形見のサンゴ気をくれる  
止めようか免許更新迷う日日  
コンサートごちゃ混ぜ臭うナフタリン  
睡眠にあの地この地の酒集め

米子市 加藤 正二

日向ぼっこ老い方談義花が咲く  
若返る葉探して散歩する  
子供等に愚痴れるうちはまだ確か  
徘徊と間違えられるウォーキング

米子市 田村 周子

嫁もらう孫に発破をかけてくる  
人情がつながり呼んで人助け  
人の情け落ち目の時に身にしみる  
老い身でやったらやれる障子張り

振り向いて欲しくて皿を割っている  
二枚舌うそ発見器まで騙す

米子市 野川 宣子

目標を指すと明日も生きられる  
動いても怠けていても腹は減る

鳥取県 飯野 菖子

名水も山を下れば海水に  
ゆつくりと休みなさいと雨が降る

大海も地球の汚物浄化槽  
人生路想像つかぬ迷い道

鳥取県 岡村 孝明

どん底で浮上する策語り合う  
わだかまりさっぱり解けて縄のれん  
手の平に我が運命はかくれてる  
他の人に侵されぬ様欄作る

鳥取県 橋谷 静江

ふれあいを楽しみ友を増やしてる  
介護して介護をされて夫婦住む  
前向きになって近所とお付き合い  
取れたての野菜へ少し肉を買う

松江市 相見 柳歩

作られた収支報告書がズラリ  
本命は別の宇宙にいるのです  
十冊の本を同時に読み進め  
つるつるの心でいたい死ぬ時は

山もあり谷もあつての人生だ  
まわり道後押しを得て峠越え

出雲市 黒目 英男

老いてなおこの世の理想追っている  
御嶽の神を欺き噴火する

雲南市 菅田 かつ子

俄雨早く急げと言うたとて  
葉にもなる雑草をふと思う

呆けた振りそつと向うを立てておく  
種を蒔く来る年咲く花見たいから

雲南市 松本 昌

陽だまりに笑顔が集う里の春  
孫去つて静かさ淋しさひとり酌む  
根回しが不足正論報われず  
満月が笑う人の世嘘ばかり

安来市 原 煩惱児

ベレー帽文化文化という闊歩  
刈田に残され朽ちて行く案山子  
卓球の泣き虫愛ちゃんい笑顔  
友の訃や我が身を思うことしきり

岡山市 永見 心咲

月も邪魔露天風呂にはふたりだけ  
差し水を所望している赤い月  
臆病を覆い隠して冬に入る  
面映ゆい賛辞を浴びている夕陽

岡山市 前田 恵美子

じゃあまたね言ううと明日が見えてくる

えんま様まだ呼ばないでいま青春

昼寝して夜は眠れぬ自由人

自慢などするなするとカラス鳴く

笠岡市 藤井 智史

自信ない頭ポリポリかいておく

ルックスの弱みトークでカバーする

N極を出してS極出した恋

恋よりも酒が私へ寄ってくる

玉野市 片岡 富子

足の傷何処で打ったかわからない

旅行かず「おせち」だけでも豪華なり

ポジティブな話に皆飢えている

同級生寄れば介護と墓ばなし

備前市 森 ふみか

後悔をのこして妻の乱終る

末席で不義理の褻させられる

雨のたび激しく痛む治療痕

全部切る決意固める寄生根

尾道市 小畑 宣之

泣き顔を子らには見せず笑う母

有識者いつも政府の言いなりに

泣き言は言わず笑顔で切り抜ける

専門家想定外と言うなかれ

竹原市 土井 輝恵

土産より旅楽しんだ顔見たい

側にいて欲しい留守にもして欲しい

何時だって家族に合わす母が居る

安売りの卵小ぶりになつてきた

防府市 坂本 加代

悩みなど小さくなった秋の空

久しぶり聴けばあなたも悩みあり

胸いっぱい想う言葉がこぼれ落ち

五輪までステツプアップわたくしも

大洲市 花岡 順子

張り切った語気まなざしはまだ若い

駅伝の熱気若さのエネルギー

エンゼルを見た逆転のホームラン

五線譜の文字は跳ねたり踊ったり

高知市 三谷 待太郎

アレヤソレ人差しユビの簡潔さ

世の中は少し左か少し右

ジンサーは不可解なのがまともです

コンマ以下割り切れぬのがまともです

福岡県 本田 さくら

冷やかな目線背後に冷雨降る

戦時中母はか細く逞しく

不意な客あらどうしようスツピンで

ダンディと言われ夫の照れ笑い

病院の待合室で眠る客

七五三孫の祝いも金一封

老いてなお脇役人生まっしぐら

自治会の河川清掃草を取る

佐賀市 清水園實

傾いた空家に柿が見事です

目が悪く月が二重で美しい

川柳を餌に詐欺師にねらわれた

病状を聞いてお互い安堵する

唐津市 吉富節子

P Mのないハワイ海と空きれい

私の生きがい一輪差しの花

年取って趣味が多くて困ってる

散歩道マムシイノシシスズメバチ

熊本市 杉野羅天

晩秋の夕焼空は物悲し

眠られぬ夜は鈴虫も声高し

天も地も人も何も何故荒れる

スタイルは考えません食べる秋

山鹿市 前田幸子

予知出来ずあとで能がき専門家

世の中の裏側ばかり見てるくせ

地図見てもカーナビ見ても行き着けぬ

いつだって鳩と一緒に来るスズメ

山鹿市 三谷直男

メモっても必ずひとつ忘れもの

もう發揮真骨頂の一歳児

寒いけど夜明け楽しむ冬が好き

お世辞でも女っぽいね言われたい

山鹿市 柳田白沙

無垢なまま打ち捨てられた縫いぐるみ

飲み込んだ咎癒着して痣になる

逃げ足の跡は一条の乱れなし

直ぐそこの角で待ち構える挫折

沖繩市 森山文切

さらさらと耳を流れるぐちの数

木枯に負けてたまるか芒の穂

芒の穂プラチナ色に墓飾る

収穫へ感謝の空は澄み渡り

札幌市 斉藤宏子

新米をほっこり炊いて朝の数珠

骨密度ゆだんたいてき芒の穂

何げない会話に残る知恵袋

文鎮を置けば背筋がピンと伸び

札幌市 富永恵子

まだまだと元気装うポチ袋

検査値が老いの動揺あざわらう

おしゃべりが口を喋んだ雪模様

厨房で節電囁う電子機器

塩竈市 木田比呂朗

仏壇を彩る小菊亡母自作

つくば市 嶋 本 喬

ボックリと母の最後の子孝行

オレオレにだけはだまされなかつもり

佐渡市 高 野 不 二

納骨に袈裟とバイクの若い僧

戦争を話し昨日の事忘れ

曾孫玄孫も皆のぞきこむ納骨を

孫の礼聞きたいだけに米送る

静岡市 渡 辺 芳 子

寝転んで見ればどの木も空の底

東京部 川 本 真理子

気がつけば踊りの輪から抜けられず

いい人をやめて本音の同期会

寝姿に犬の人生垣間見る

来年を会う確約出来ぬ年生きる

幸福感犬の寝息と満ちてくる

何も彼も愛しつづけて終りたい

季節なし心に花を咲かせよう

江南市 脇 田 雅 美

あったかいココアに母を思い出す

横浜市 巖 田 かず枝

オレオレに狐狸もお手上げだ

歳食えば何度も同じ話する

白髪染め止めて一層おしゃれする

持て余す土地もいずれば駐車場

老犬も私もおむつ当てぬよう

午後七時値下げの寿司に艶がない

賞味期限気にして奥に手を伸ばす

黒髪が夫と分からぬ写真集

横浜市 長 島 亜希子

リフォームの亡母の着物が語りだす

大学のブランド上げたノーベル賞

ホテルのようなシニアハウスは見るだけ

受賞者の若き謙虚さ好意呼ぶ

患者より画面見つめるお医者様

叙勲されとつとつ語る顔の皺

叙勲されとつとつ語る顔の皺

出棺の時刻に嵐身をひそめ(愛弟子三十三歳で急逝)

神奈川県 小 田 幸 子

幼き弟子別れの言葉凜と述べ

団体に後れて鹿に取り巻かれ

棺に眠る愛弟子の夢抱きしめる

夕陽さんさんおおきに明日も生きまっせ

改札で外のしぐれを教えられ

夕ぐれの冷えは涙までさそう

(日置みどりさん、伊藤寿子さんの句は42頁にあります)

# 新川柳鑑賞 (35)

麻生 路郎

## 予備校の広告落第待つ如し

(草 右)

白線浪人の眼を射るものは予備校の広告であるが、その広告を読むと予備校は入試地獄ですべるのを待っているようであるというのである。

皮肉でもあり、滑稽である。この句の面白さは「落第待つ如し」という表現の巧みさに外ならない。

## 入学へここは便所と教えとき

(摩天郎)

小学校の入学であろう。うちの子は今までの外の風にはあてていないし、いたって内気な子だとその親々は思っているのである。入学式がすみと学校の中を連れて歩いて、「ソラ、ここが便所だよ」と便所まで教えてやるの母親の親心である。

## 中学生大人を真似て子が生まれ

(喜 由)

道徳教育がやかましく言われている時に、中学生の桃色遊戯から子供が出来たのである。それを作者は「大人を真似て子が生れ

と皮肉ったのである。これは中学生の風紀よりも大人の風紀の悪いのを皮肉ったのである。何んでもなく詠んではいるが、何んでもなく詠んでいるところに却って鋭さが感じられる。

## ブラカード下手糞な字が練り歩き

(茶 仏)

穿ちズバリの句である。よりによってあんな拙ずい字しか書けない連中が、ベースアツプとはチャンチャラおかしく感じたのである。この句を一読すると思わず苦笑を禁ずることが出来ないではないか。

## 悪筆の方が目にたつブラカード

(省 三)

ブラカードの下手クソなギコチない文字を見ると、私たちはゾツとした寒気を感じずにはいられない。こんな下手クソな字を書くような能力しか持合わさない連中が賃上げなどはチャンチャラおかしい気がするのである。それを作者は「悪筆の方が目に立つ」と皮肉ったのである。彼等の尖った気持がそのまま文字にあらわれたのだとすれば、悪筆の方がむしろ親切な表現になっていると言える。

## 運転手と云う見知らぬ男へ

### 生命をあすけ

(妄 夢)

お互いは何等の考慮も払わずに、自動車に

乗っているが考えて見れば随分危険な話である。何処の誰だか見知らぬ運転手、運転が上手か下手かそれすら知らずに平気でいのちをあずけていることをふっと思ったのである。神経衰弱でなくてもそんなことをふっと思うものである。そうした心理をうまくつかまえたのがこの句だ。自由律の句としての妙味もある。

## お泣きなさいとまつてくれる葬式屋

(古 方)

まだ棺側に泣きぐずれているのに、いかに職業だとは言え、そももぎどくに、もうそれぐらいお泣きになったらいいでしょうと言うわけにもいかないのです、しばらく待っているのを、第三者がこの句のように詠んだのである。

第三者の眼は斯うした悲劇に対しても常に冷静である。それは川柳が常に真を求めてやまぬからである。

## 貧乏の幸福ばかり説く牧師

(明 林)

「貧しきものは幸なり富むことを得べければなり」と牧師は常に言う。それには違いないが、貧しい者の多くは、それだけではなっとくがいかない。彼等は貧乏でない幸福がどうして得られるかにあるのである。この句は牧師に対するレジスタンスとしての穿ちだと言えよう。

## 西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

血圧にさわる放談して帰り

針の数よんで布団は出来上り

記憶がありませんと男の返事なり

五十音で先に呼ばれた男なり

一瞬にきまる勝負が男好き

船渡御にせんばは鱧を焼く匂い

書斎とも座敷牢とも梅雨の部屋

姉弟も二人となりし墓参り

脇役の名技をほめる記事小さし

支那服の似合う才女で羽田発ち

シャンデリアここはお寺の応接間

イヤリング自分ではずす独り言

ライバルの風邪天罰のように言い

引越しの応援花瓶を一つ割り

御題 海

おおらかな海元旦の酔い心地

花の命そんな言葉で逢うている

又来ます握手の妻は他人めき

見せてから包丁入れる明石鯛

駅を出る五百羅漢は定期持つ

霧の道軍歌は腹がへっている

青麦に雲雀が生まれ雲生まれ

桜吹雪一人歩けば主義もなし

## 永田俊子著「野菊」

水野黒兎

永田俊子は川柳塔社の誇る川柳作家である。昭和61年に

鶴の瞑想或は人より深からん

他で川柳塔賞受賞は74歳の時、平成5年

ああ余生つるべ落しに日が暮れる

他で路郎賞受賞は81歳の時であった。他に各地柳壇賞、檸檬賞も受賞されている。

この永田俊子が平成26年10月に作品集

「野菊」を上梓された。実に満百二歳での快挙、このことを心から寿ぎ、拙いながら紹介の一文を捧げます。

「作品集」としたのは、川柳のほかに若い頃から詠まれた俳句百五十余句が、そしてなんと短歌界の巨匠土岐善麿などの選を受けた短歌が四百余首含まれているからである。

伝言板その一行にある秘密

譲られた席へかなしい齢になり

などは川上三太郎選である。つまり昭和三十年代の作と考えられ、その作句歴の長さに感嘆する。

「地球は青かった」が過去になる予報  
黄砂やPM2.5の昨今その予報が当たり

つであるのではないかと危惧される。

地雷百、花野の下にあると言う

核の出番恐れる地球のひとり言

いまもお地球のひとり言は続いている。

地球廻るたびどこかでもめている

戦争の痛み原爆ドーム泣く

政治家へハートのつぶやき聞こえない

などがある一方

見栄張って女切ない芝居する

他人ごとなのに病状聞きたがる

などと身辺の辛辣な観察もある。

おしゃべりが何より好きな桜餅

あととりが居ます農家の干大根

ファッションに負けてる方がふり返る

といった明るくほっとする句も随所に散

りばめてあるのが楽しい。

落椿女の嘘はすぐばれる

嘘ひとつかくしきれない花明り

白蓮の寂にもひびくミサの鐘

といったしみじみと美しい句もある。

太陽にも火消壺にも母はなり

母に書く便り一病伏せておく  
同居して三猿になる姑の知恵  
などの家族関係の句が後半には増えている。さらに

墨絵めく記憶になつてゆく余生

孤独と気楽は背中合わせよ爪を切る

孤独ある時西瓜の種数え

など老いと孤独の述懐もある。百歳を過ぎてなお川柳塔誌への投句を続けこの作品集には平成26年3月までの川柳塔掲載

句が収載されている。

三桁の寿齢ただただ拜む御来光

髪切つて欲捨ててゆくひとり旅

それぞれ一月号、三月号の句である。

さて俳句と短歌も紹介したいが字数が

尽きた。一句、一首のみの紹介とする。

地下街を出て秋天の色を吸ふ

見納めにならむ思ひの春ゆきて記憶を

紡ぐ花の曼荼羅

永田俊子大正元年（一九一二年）生まれ、

川柳塔社の至宝である。

俵万智の短歌はとか、坪内稔典の俳句

はなど一般的な記す如く、本稿では深

甚なる敬意を込めながら敬称略の永田俊

子で通したことにつきご本人、関係者の

方々のご寛恕を願います。

# 誹風柳多留一二篇研究 19

山田昭夫・石川道子

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男

清博美

れなかつたので、ここへ運んで行った」(「日国」)。

「湯灌場の際」にある竹藪の筈は、誰も気味悪がつて掘って食べないから、成長して「みんな竹になり」。

ゆくわんはのきハならいやと開云ひ

清賛。

拾三 10

142 あすの日も無イヤうにひくさる廻し

山田 猿回しは、元々猿を連れて厩の祈禱に廻ったものが、後ちに猿の芸を見せる大道芸になったものである。その猿回しが伴奏の三味線を「明日の日も無いように」滅多やたらに弾いている。

さみせんを引かきむしる猿廻し 三五7

さる廻ハしゑたいのしれぬ三味を引

宝13松1

清賛。

143 大つめにやうかいの出るくわいらいし

山田 傀儡師は「①江戸時代、胸に箱をかけてその中から木偶人形を取り出し舞わせ

た大道芸人。正月の祝儀として門付けることが多かった」(「広辞苑」)。「是切といふ所

に至りて、山猫といふ馳の如き物を出して、チ、クワイ／＼とわめきて仕廻也」(「塵塚談」上の巻)。その「馳の如き物」が、句のいう「妖怪」なのであろう。

くわいらい師馳のやふなものを出し

箴三21

くわいらいし大つめをしてなき出され

明二礼4

清賛。

144 湯くわん場のきわなハみんな竹に成

山田 湯灌場は「①江戸時代、湯灌のため寺院内に設けられた小屋。地主や家持ちでない者は、自家で湯灌をすることが許さ

145 目のこへた四ツ手のよばるもめんもの

山田 木綿物を着ているのはお店者。見世を抜けだし、吉原行きを企んでいる番頭や手代と見抜いた「目の肥えた四ツ手が呼ばれる木綿物」。

四ツ過の四ツ手ぬけ荷を待て居る

一 二 42

小栗 賛。目の肥えていない奴は、絹物のキンキンだけを目当てにする。

清賛。

146 いびきをハかきましたかとよめはぎ

山田 結婚の翌朝、新妻が夫に聞いている。何と答えたかは分からないが、親しさが増さなければこのような言葉は出まいから、

新枕は無事済んだようだ。でも何と初々しいことか。

かた衣で見なさつたのと新枕 一〇八

はつに旦那と呼て吹出す 武二15

石川 結婚の翌朝というより、もう少し慣れて来た頃の言葉ではないでしょうか。それと、この句があるのだから、軒もあるのでしょうか、若い女で軒をかく人はごく少ないのでは……。

小栗 石川説贊。初夜にいびきをかいたかどうか心配するほど熟睡するとは思われぬ。

とろく〜とねると花嫁おこされる

安五天2

清 賛。

147 しかられるそばてたゝみをたいこのみ

山田 禿あたりが粗相して畳に酒をこぼしてしまい、「叱られている側で畳」に浸みた酒「を太鼓呑み」。咄嗟の転機で一件落着となったが、しかし太鼓も大変な仕事だねえ。

女房子があるとハ見へぬたいこもち

明六核2

石川 賛。職業に撤しなければやれない。清 自らの人格を否定しなければならぬ、哀しい商売でもある。

148 暑い事嫁あご斗あぶぐなり

山田 如何に暑くても、人前で嫁は、

能く〜暑さ花嫁腕まくり 安六56会

暑い事嫁も女護をそつと真似

梅柳吾妻初13

というわけには行くまい。そこで胸元でそこはかと団扇を使うので、「顎ばかり煽ぐなり」となる。でも嫁といえども、クーラーの無い時代、

あつ事嫁襟元をくつろかせ 一〇22  
ぐらいは許されても良いだろう。

清 賛。

149 うろたへてかけ込ム女はき出され

山田 鎌倉の縁切寺・東慶寺と間違えて建長寺に「狼狽えて駆け込む女」は「掃き出され」。鎌倉五山で知られる建長寺は臨済宗の禅寺だが、

竹ほふきやたら買込む建長寺 六二26

ひつそりして御寺内のごみを掃 二三36

という句もあるように、境内がいつも奇麗に掃き清められている事で有名だった。そこで「駆け込む女掃き出され」となる次第。

うろたへたかけ込ミもあるけん長寺

明三義6

清 賛。

150 出合茶や庭に池水イをたゝへつ、

山田 不忍池畔に軒を連ねる出合茶屋は、まさに庭に池水を湛えている構図である。この句、謡曲「東北」の「庭には、池水をた、へつ、」の文句取。

出合するぐるり池水た、へつ、 安二松4  
出合イする所コを白鳥ウのろり見る

末一30

清 賛。

151 ぬけ参りさくま町から跡につき

山田 神田佐久間町には、伊勢・津藩、藤堂和泉守の上屋敷があった。参勤交代で伊勢へ帰国する藤堂家の行列に付いて、小僧たちが抜け参りに行く。三十二万石の大名の護衛付きなのだから、これ程安心して行ける者も居るまい。

旅は道つれ大名とたるひろひ 一六16

大名の尾にくくらかる抜ケ参り 五七12

清 賛。

## 英語 de Senryu ③7

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

葉牡丹のつかみどころなし哲人の如く

*ornamental cabbage---  
vegetable or flower  
just like a philosopher*

初日の出 自由はここにあるものを

*the first sunrise of the year---  
our freedom and liberty  
I believe in*

### ～リバーウィローのため息～ (R.H.ブライスによる古川柳の英訳①)

『川柳塔』8月号(2013)で、R.H.ブライスの川柳英訳書、SENRYU (北星堂書店1949)について概略を述べました。今回はその中味を味わいたいと思います。ブライスはSENRYUで、作句用語のパロディを紹介しています。パロディは本歌取りとも言われる技法で、諧謔の一要素です。読者のみなさんにはおなじみの用語ですね。川柳のパロディは、言葉の持つ背景の深いところから生まれると彼は述べています。SENRYUの著書の中で紹介したパロディの例をあげてみましょう。

芭蕉の俳句、①「道のべの木権は馬にくはれけり」(甲子吟行)は、②「煮うり屋の柱は馬に喰われけり」(柳多留初篇)と、芭蕉の③「いざさらば雪見にころぶところまで」は、④古川柳「いざさらば居酒屋のあるところまで」のように、パロディの一種である姿を借りて意を換えた(換意)になっています。ブライスの英訳をじっくり眺めていると、語彙の選びや音に相関関係があって面白いですね。

① *The Rose of Sharon/By the road-side./Was eaten by my horse.*

② *The post/Of the cheap eating-house/Was eaten by the horse.*

③ *Now then./Let's go snow-viewing/Till we tumble over!*

④ *Now then!/Right up to/The wine shop!*

①の木権は韓国の国花ですが、英訳の *Rose of Sharon* (シャロンの薔薇) になるとイスラエル平原や聖書に由来する花の意味になりますね。英訳によって加わる文化の背景とイメージで、読みはさらに広がります。わたしは学生時代に源氏物語を読んでいて、登場人物の主従関係が理解しがたく、アーサー・ウェイリー (Arthur Waley 1889-1966) の英訳 *The Tale of Genji* を読みながら、古文の源氏物語を楽しみました。ブライスの英訳を読んでいて、若い頃の読書を思い出したことでした。

# 民族の詩歌 (31)

## 金子みすゞと立原道造

### 三好 專平

二人の間には、その優しく若いまなざしと透明な感性の詩以外に共通点はない。ゆえにこそ、比較してみたいと思う。

みすゞは明治36年(1903)山口県仙崎村に生まれた。大正6年結婚。一子を儲ける。女性問題の多かった夫から詩作を禁じられ、離婚が決まり、娘を手放さなくなった彼女は、昭和5年(1930)服毒自殺をする。26歳。

道造は大正3年(1914)東京日本橋に生まれた。東京帝国大学工学部建築学科を卒業。昭和12年(1937)建築事務で働きながら、『暁と夕の詩』などの詩集を

出す。が、翌々年結核のため没した。24歳。

雲

みすゞ

私は雲になりたいな

ふわりふわりと

青空の果てから果てを

みんなみて

夜はお月さんと鬼ごっこ

のちのおもひに

道造

夢はいつもかへっていった

山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへった午さがりの林道を

西条八十にあこがれて作ったみすゞの詩

は、半世紀たつて矢崎節夫らによって見出

され、人々に愛されるようになった。生き

ている時間の短かった道造は存命中に認め

られ、「中原中也賞」などを取っている。

みすゞの詩は、今、小学校の教科書に採用されている。いじめの時代だからかもしれない。みすゞ最後の詩の一連。

きりぎりすの山登り

みすゞ

お日さま遠いぞ さアむいぞ

あの山 あの山 まだとおい

ヤ ピントコ ドッコイ ピントコ

ナ

忘れてゐた

道造

忘れてゐた

いろいろな単語

ホウレン草だのボンボンだの

思ひ出すと楽しい

一軒家の時計

みすゞ

お日さま、お空のまんなかだ

のろまの時計がおくれたよ

ちよつくらお日さんにあはせましょ

田舎の一軒家のお時計は

いちんち欠伸とおねむりだ

# 愛染帖

## 新家 完可選

(投句 273名)

やれやれと座れば急に眠くなる

岡山県 田中 恵

(評) 頑張つてあれこれ動き回っているときはシヤンとしているが、ホッと一息つけばグツタリ。そのような歳になったのだろう。

米子市 成田 雨奇

どっこいしょ会が終わるとあちこちで

(評) 立ったり座ったりする度に「どっこいしょ」と言っている。特に畳の部屋では笑つてしまうほど多い。鋭い「耳が掴んだ」句。

京都市 高島 啓子

ゆつくりと乗りこむ空いている電車

(評) 席を確保するときには見栄など捨ててバタバタだが空いているときは淑女。誰だって余裕さえあれば上品にふるまえるのだ。

河内長野市 村上 直樹

今にして惜しまれて去る難しさ

(評) 大臣から我が身まで。退任式では「名残り惜しくも…」等と言われるが、さて、実際には何人が惜しんでくれているのか…。

寝転んで歌聴く楽な過ごし方

紀の川市 辻内 次根

(評) 人それぞれ楽な姿勢は多少違うだろう。中でもいちばんラクチンなのは寝転んで好きな音楽を聴くこと。貴重な充電時間だ。

鳥取市 倉益 一瑠

キッチンで生きる力を生んでいる

(評) 調理によって自分自身が活力を得ている。そしてまた、バランスの良い食事によって家族のパワーを生み出しているのだ。

奈良市 岩本 浩二

稼いでも寿命が延びるわけじゃなし

(評) 例えば、一千万円で一年の命を得られるなら必死に稼ぐだろう。だが、一兆円を積んでもムダであれば「足るを知る」べし。

橿原市 居谷真理子

何よりも面白いのは勝つ途中

(評) 何事でも負ければ悔しい。しかし、勝つても嬉しいのはひとときだけ。結果ではなくプロセスが大切なのは「人生」も同じ。

枚方市 寺川 弘一

文化遺産でないが見せたい手術痕

(評) 手術痕など見たくもないが、当人には頑張った証拠であり栄えある勲章。見せて頂き「ほく」と感嘆するのも浮世の義理。

長岡京市 山田 葉子

いらっしやいませ言つてほしくてデパートへ

(評) 商店街の「ラッシュヤイ！」も元気を

くれるが、デパートの「いらっしやいませ」には優越感をくすぐられ、クセになりそう。

河内長野市 梶原 弘光

ハロウインの意味も解らずカボチャ買う

我が家では年中鍋の季節です

和歌山県 森下よりこ

コーヒーが美味しい前向きの朝

孫自慢するほどでない孫二人

岡山市 丹下 凱夫

一人旅です一輛電車です

百までは生きると酒を飲むために

堺市 村上 玄也

音痴でもええ声してるなあと褒め

小さい方が勝つてうれしい格闘技

三田市 上田ひとみ

おばあちゃんだけどもまだ落ち着かず

年末に開き直つてしまふ癖

羽曳野市 宇都宮ちづる

近すぎる五十センチに夫の顔

介護保険払い損です幸せです

弘前市 高瀬 霜石

ペロペロの一步手前で鳴るセンサ

楽しそうフランスパンを抱えている

奈良県 渡辺 富子

どの国の言葉も分かる虚舎那仏

恋と愛の違いを酒が語り出す

海南市 堂上 泰女

仏壇へ林檎ゴキブリ達へ畏

喜屋川市 平松かすみ  
力んでもヘルスメーター変わらない  
また同じ服で出席する句会

三田市 福田 好文  
敬老会ちよつと遅れて席がない  
付けっ放し開けっ放しで叱られる

鳥取県 齊尾くにこ  
書く番になってじっくり読む批評  
儂いは人の夢って書くみたい

羽曳野市 徳山みつこ  
GPSタンク貯金は感知せず  
落ち葉も財布もまきあげるからっ風

大阪府 奥村 五月  
帰りにはお酒もますます趣味の会  
吹田市 太田 昭

鳥取市 岸本 孝子  
旧友と昔にひたる縄のれん  
馬が合う人との酒はすぐに酔う

枚方市 松原 保  
飲み放題カネの心配せずに飲む  
堺市 奥 時雄

藤井寺市 鈴木いさお  
酒が出て宴会めいてきた法事  
一汁と二菜と芋焼酎二杯

岡山市 永見 心咲  
42度の米焼酎を舐めました  
大坂府 井丸 昌紀

もう一杯過ぎて終電乗り遅れ

倉吉市 牧野 芳光  
ネクタイを外せば野良犬と同じ  
ヘアブラシにくつついてきた枯野

熊本市 杉野 羅天  
メスシリンター花瓶代わりに使ってる  
八尾市 宮崎シマ子

札幌市 三浦 強一  
百歳の姉がすっかりせいと宣わく  
お互いに観察してる呆け具合

大阪府 谷口 義  
なるようになっておばあさんになって  
青畳さらば私は座れない

神戸市 松井 文香  
晩学で埋めます失恋の余白  
三田市 多田 雅尚

河内長野市 山岡富美子  
美食家に育ててくれた離乳食  
水たまり超える楽しみバスポート

弘前市 福士 慕情  
テレビから僕だけを見る美女がいる  
米子市 見山 温子

笠岡市 藤井 智史  
オベ二度目今年の厄は終わりそう  
比べない自分の好きな道に行く

八尾市 村上ミツ子  
どないしよう大阪弁で思案する

岡山県 池田たか子  
自慢にはならぬが鬱の字が書ける  
善人を演じ素直な棒になる

松江市 石橋 芳山  
善人を演じ素直な棒になる  
姿煮のオコゼ誹謗に耐えている

奈良県 安福 和夫  
桃太郎腰に鯖寿司村おこし  
もうあかんあかんは長生きの呪文

大阪府 米澤 俣子  
さじ加減どうも女性に甘くなる  
高槻市 片山かずお

米子市 後藤美恵子  
押し売りに孤独な犬が尻尾ふる  
半世紀経たのに今も新幹線

豊中市 藤井 則彦  
存在感いつでも主役やれる人  
西予市 黒田 茂代

富田林市 山野 寿之  
ショートケーキ二つで古稀の誕生日  
肉じゃがを炊いて一人前試食

大阪市 古今堂蕉子  
人間を笑っていますナマケモノ  
旧姓を忘れるほどに歳を取り

三田市 今西 廣子  
紙籬の顔画く母の老いはれる  
神戸市 大島まさる

全没も彼女に会えていい句会

小野市 藤原 泰宏

川柳にも神さんがいて放さない

河内長野市 穂口 正子

絵手紙に川柳を添え喜ばれ

尼崎市 市坪 武臣

6Bで書けば迷いが吹っ切れる

鳥取市 大前 安子

初恋の彼に酌する同窓会

岡山市 藤成 操江

同窓会初恋の彼逝っていた

米子市 森脇 麗

いいところだけ褒めるのが難しい

大阪市 坂 裕之

喫煙所狭くていつも混んでいる

堺市 矢倉 五月

吊り革を眺め老いさらばえて行く

沖繩県 森山 文切

塩分も脂も抜いて萎んでる

貝塚市 吉道あかね

年金がまだ生きてるか聞きにくる

三田市 堀 正和

菜園で青虫レース編みをする

鳥取県 平木 公子

穏やかに暮らせるように鏡見る

田辺市 岡本 昇

七十の私を作る美容院

豊中市 松尾美智代

日だまりで半眼猫は哲学者

松山市 栗田 忠士

陽だまりへベンチ動かす冬テニス

大阪市 高杉 力

ここからは鈴を鳴らせと山の道

大阪市 藤原千恵子

老いひとり錦秋の候通過中

大阪府 初山 隆盛

暑うても寒うても年末は来る

三田市 久保田千代

まだ甘い直ぐにこだわる勝ちと負け

大阪市 太田としお

脱皮した頃に試練がやってくる

鳥取市 前田 楓花

仏壇へ今日のチョンボの鉦叩く

三田市 北野 哲男

真夜中にスイッチ入る癖がつき

和歌山市 古久保和子

21世紀LEDに照らされる

唐津市 岩崎 實

若づくりシルバースhirt掛けにくい

香芝市 大内 朝子

太鼓持ち演じ続けた宮仕え

鳥取市 山下 凱柳

リサイクルショップに廻すものがない

寝屋川市 籠島 恵子

平成に昭和部品が噛み合わぬ

三原市 鴨田 昭紀

病人にならぬ覚悟で病院へ

川西市 山口 不動

病院へ通える内は大丈夫

芦屋市 黒田 能子

パレードが過ぎて銀杏の深呼吸

高槻市 原 洋志

飼い犬のせりふも語る散歩道

東京都 川本真理子

スマホ撫ぜその手でそつと頭撫ぜ

堺市 大和 峯二

黙禱に薄目でナオレ待っている

奈良市 大久保真澄

螢火で見る妻の顔ちと怖い

広島市 岸本 清

花を植える心が春になるように

和歌山市 柏原 夕胡

天然と言われ思わず類ゆるむ

鳥取市 田中 天翔

阪神のゲームに妻の評論家

和歌山市 喜田 准一

ばあさんと言わればあさん自覚する

三田市 上垣キヨミ

書き物にして置く程に無い遺産

加西市 中川 修

回覧板隣も次もみんな留守

倉吉市 岡崎美知江

捨てられた気分の時は艶歌です

堺市 内藤 憲彦

豊橋市 藤田 千休

右翼手がだぶついているチーム安倍

河内長野市

坂上 淳司

何度でも挑戦月が満ちるまで

藤井寺市

田付 絹枝

野山より庭木好みもいる野鳥

高槻市

初代 正彦

赤サングの密漁縄を追う如し

河内長野市

野口 晶子

名瀑のイオンパワーに若返り

藤井寺市

藤塚 克三

誉められてヤル気スイッチ動き出す

西宮市

福島 弘子

口先のポエムじゃ国は守れない

三田市

前田 紀雄

人生のごった煮乗せて終電車

河内長野市

藤塚 克三

まあいいかゴメンとわたしから言おう

宝塚市

田中 章子

税金を内緒で使う政活費

八尾市

前田 紀雄

眠ったら腹の立つ虫消えていた

尼崎市

春城 年代

愛犬と共に患う糖尿病

河内長野市

渡邊 修

転ぶ前鳴ってほしいなマイブザー

長岡京市

日置みどり

四季巡る五感いつでもリフレッシュ

大阪府

小柏こずえ

ご馳走の食べ過ぎですと言う主治医

松江市

中筋 弘充

開運へ長い石段足が急ぐ

和歌山市

平田 元三

せつかくの料理にいきなりの醤油

東大阪市

佐々木満作

ドクターの優しさ生きる欲が出た

和歌山市

土屋起世子

名前から忘れてやがて青い空

八王子市

川名 洋子

待ってるよ母の言葉にふんばれた

富田林市

中村 恵

童謡の鼻歌が出る孫来る日

河内長野市

松岡 篤

高齢化神社に手摺つけさせる

倉吉市

中村 毅

町おこし大河ドラマをあてにする

西宮市

緒方美津子

乗せられてホイホイ今日も生きていく

横浜市

川島 良子

椅子席にほっとしている膝頭

紀の川市

楠原 富香

たつぷりと聞いて下さる仏さま

三田市

九村 義徳

曲がり角上手に曲がり老い知らず

神戸市

富永 恭子

仏壇を継ぐのは誰か揉めている

奈良市

辻内げんえい

単線の窓に芒の手が伸びる

大阪府

榎本日の出

オペ前の度胸を笑う心電図

高槻市

富田 美義

下手ながら口笛ひとつまだ吹ける

海南市

小谷 小雪

俺無職孫の園児の迎え役

具塚市

石田ひろ子

十五夜に衿立て帰る午前様

鳥取市

春木圭一郎

三十分健康散歩風邪土産

大阪府

笠嶋 恵美

お魚は何でも鯛と呼ぶ二歳

鳥取市

池澤 大鯨

比べるとみじめな自分浮いてくる

奈良市

尾畑なを江

西暦が賞味期限のためにある

鳥取市

岸本 宏章

凧の中の一日湯のけむり

豊中市

池田 純子

傘寿でも影は女の列にいる

神戸市

奥澤洋次郎

通天閣高さで負けて顔で勝つ

大阪府

柴本ばっは

凧の中の一日湯のけむり

神戸市

奥澤洋次郎

傘寿でも影は女の列にいる

富田林市

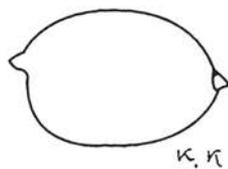
中井 アキ

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 369名)



「太い」 牧野芳光選

太っ腹なんておだててむしろられる	大阪市	古今堂蕉子
豊さが上手に笑顔太らせる	富田林市	中村 恵
病あけ大根足がなつかしい	大阪市	津守なぎさ
太ければ良いこともなく恵方巻	松江市	石橋 芳山
風除けに太い男をキープする	松江市	藤井 寿代
臍の緒の太さ信じて母独居	神戸市	松井 文香
ピンヒールが悲鳴上げてる太い足	奈良県	渡辺 富子
口惜しいが太目の服を買わされる	大阪市	板東 倫子
生涯現役極太で書く終の章	和歌山市	福井 菜摘
ふくよかな女性が好きなルノール	大阪市	川端 一步
太い首男が匂う背中見る	防府市	坂本 加代
太い字で書きたい今日の旅日記	岩出市	藤原ほのか
大事な日太めの眉と濃いい紅	さいたま市	星野 育子
苦勞した話はしない太い指	松江市	三島 浜丘
車椅子腕の太さは負けてない	尼崎市	藤井 宏造

「太い」 古久保和子選

遺産分け太い絆に入る牌	三田市	福田 好文
ダイエットただいまお昼ぬいている	大阪市	江島谷勝弘
太さでは負けぬ田舎の餅作り	熊本市	杉野 羅天
太目だと良い人らしく見えるらし	岡山市	永見 心咲
一家支えた油の染みた太い指	河内長野市	坂上 淳司
図太さが見せ掛けだった震度三	和歌山市	平田 元三
マイペース今日も図太く生き残る	和歌山市	喜田 准一
眼に見えぬ太い鎖になるスマホ	枚方市	寺川 弘一
太い指スマホはオレの指示を無視	加西市	中川 修
絵手紙の太い大根よく笑う	枚方市	伊達 郁夫
仕方なくお散歩 ポチのダイエット	寝屋川市	平松かずみ
タバコ税払う程度の太っ腹	堺市	柿花 和夫
喧嘩しているかと思う浜の声	大洲市	中居 善信
返し針太めの糸でしっかりと	田辺市	小川 イセ
園児らの歓声が掘る太い芋	南あわじ市	萩原 狸月

血管の太い処が泣きどころ	鳥取市	前田	楓花
勝訴だけ信じて待った太い眉	高槻市	富田	美義
神様との太いパイプは非売品	倉吉市	中村	毅
ケータイの小窓ストレス太らせる	和歌山市	楠見	章子
働いて働いて得た太い指	八尾市	中岡	妙
玉の汗かいて背骨を太くする	和歌山市	土屋起世子	
太目がいいな友情も羊羹も	札幌市	小沢	淳
サンゴ密漁図太く迫る近い国	大阪市	榎本	舞夢
政務費が後盾です太っ腹	茨木市	島田	誠一
食欲の秋は緩めるグイエット	三田市	多田	雅尚
ウエストのくびれ欲しいが秋旨い	八王子市	川名	洋子
筆太に年賀状には謝の一字	河内長野市	村上	直樹
泣きごと愚痴も着膨れして淑女	大和郡山市	坊農	柳弘
指切りに恥かしそうな太い指	大阪市	井丸	昌紀
太い指火の粉いっばい浴びたろう	大阪市	内田志津子	
太い指スマホはオレの指示を無視	加西市	中川	修
親介護夢中で太る暇もなく	大阪市	若本	安代
子宝に恵まれ嫁が太くなる	奈良市	岩本	浩二
回り道して根幹を太くする	三原市	鴨田	昭紀
図太さの目覚め豹柄が似合う	大阪市	栃尾	奏子
喧嘩しているかと思う浜の声	大洲市	中居	善信
ミリが分かる職人の節太い指	大阪市	原田すみ子	
定年へ太い鎖を解いてあげ	藤井寺市	太田扶美代	

太字だけ斜め読みして年の暮	高槻市	原	洋志
弱虫の私図太く生き残る	吹田市	須磨	活恵
父母が育てた太い太い幹	富田林市	中井	アキ
仏壇から繋がっている太い糸	鳥取市	倉益	一瑤
言い訳を最後まで聞く太っ腹	横浜市	菊地	政勝
天下り黒いパイプを太くする	宇部市	平田	実男
政務費が後盾です太っ腹	茨木市	島田	誠一
子は巢立ち妻が領土を拡張す	唐津市	坂本	蜂朗
血管も絆も太い方がいい	羽曳野市	徳山みつこ	
嘘つきの尻尾だんだん太くなる	川西市	西内	朋月
千年も生きて大樹が拜まれる	鳥取市	岸本	宏章
指切りに恥ずかしそうな太い指	大阪市	井丸	昌紀
玉の汗かいて背骨を太くする	和歌山市	土屋起世子	
この指はやがて介護の太い指	八尾市	宮西	弥生
極楽との太いパイプに要るお布施	堺市	澤井	敏治
風除けに太い男をキープする	松江市	藤井	寿代
太いめに誂えておく食べ盛り	和歌山市	磯部	義雄
太い指かつこ悪いがよく動く	倉吉市	岡崎美知江	
ふくよかな女性が好きなルノアール	大阪市	川端	一步
頼りがいある母さんの腰まわり	大山市	金子美千代	
焼け太りさせぬ保険の細かい字	香南市	桑名	孝雄
活断層真上で太る毒キノコ	弘前市	吉川ひとし	
マネキンが小太りならば買った服	大阪市	升成	好

大根の太さを笑うものはない  
 支える者できて頑張る太い腕  
 太い指かつこ悪いがよく動く  
 天平の美女を抱いたか太柱  
 眼に見えぬ太い鎖になるスマホ  
 血管も絆も太い方がいい  
 喝采もなかつた母の太い指  
 お酒とは太い絆で共に生き  
 タバコ税払う程度の太つ腹  
 一枚の諭吉確かめ太つ腹  
 プライバシー太い白線引き守る  
 一病に夫婦の絆太くなる  
 焼け太りさせぬ保険の細かい字  
 悪党の腹太らせる赤サンゴ  
 天高くベルトの孔とせめぎ合い  
 汗積んで太りなさいと外れクジ  
 また少し竹輪の穴が太くなる  
 桐の木は太った娘まだ嫁かず  
 丁寧にかく程太くなる眉毛

秀句

寝屋川市 籠島 恵子  
 羽曳野市 藤原 大子  
 倉吉市 岡崎美知江  
 豊中市 源田 啓生  
 枚方市 寺川 弘一  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 瀬戸内市 東横ますみ  
 大阪市 長井 善純  
 堺市 柿花 和夫  
 河内長野市 梶原 弘光  
 京都市 高島 啓子  
 富田林市 中井 アキ  
 香南市 桑名 孝雄  
 河内長野市 黒岩 靖博  
 米子市 竹村紀の治  
 海南市 堂上 泰女  
 三田市 堀 正和  
 八尾市 宮崎シマ子  
 紀の川市 楠原 富香  
 川西市 西内 朋月  
 橿原市 居谷真理子  
 吹田市 太田 昭

豊かさが上手に笑顔太らせる  
 根っこが太いきっと苦労をしたのです  
 掴み取りさあ囃太さを發揮する  
 履歴書に大きく大きく記す売り値  
 太つ腹お金有つても無くつても  
 神様との太いパイプは非売品  
 太い字で書いて相手を黙らせる  
 ごっほんと太めの咳で座をにらむ  
 天高くベルトの孔とせめぎ合い  
 太い指火の粉いっばい浴びたろう  
 座右には静かで太い一行詩  
 太めがいいな友情も羊羹も  
 日が高い影も太目になっている  
 勿体無い勿体無いで太くなる  
 時々丸太のような句を作る  
 太棹に津軽の四季が唸りだす  
 太いのが混じる上司の手打ちそば  
 太るってこんなに楽なことなのか  
 大阪の喜劇を食べて太くなる

秀句

富田林市 中村 恵  
 貝塚市 吉道あかね  
 大阪市 柴本ばつは  
 三原市 鴨田 昭紀  
 大阪府 初山 隆盛  
 倉吉市 中村 毅  
 松江市 中筋 弘充  
 米子市 生田 和之  
 米子市 竹村紀の治  
 大阪市 内田志津子  
 橿原市 居谷真理子  
 札幌市 小沢 淳  
 三田市 北野 哲男  
 沖繩市 森山 文切  
 笠岡市 藤井 智史  
 弘前市 福士 慕情  
 大阪市 高杉 力  
 吹田市 太田 昭  
 長野県 丸山 健三  
 三田市 堀 正和  
 岡山市 丹下 凱夫  
 尼崎市 春城 年代

「前向き」

平田実男選  
(投句 193名)



前向きに生きる　と誓う年初め  
前向きに生きる　あなたが美しい  
前向きに生きる　襷を締め直す  
失敗を生きる　肥やしと考える  
前向きに生きる　覚悟の紅を引く  
前向きに生きる　生きろと陽が昇る  
前向きに生きる　証の家族の輪  
前向きに生きる　女の赤い靴  
前向けば何時か　タルマの目も開く  
前向きに生きる　と背中押す遺影  
ポジティブに　生きる　と決めて寝正月  
前向きに　生きる　姿を子に見せる  
前向きな笑顔に　苦勞いやされる  
古稀過ぎて　なお前向き　の入門書  
前向きな雑魚で　群れから抜き出る  
前向きに　ベダルを踏むと唄が出る  
前向きに　エンジン音を高くする  
前向きの人だから　皆ついて来る  
前向きな五七五で　若返る

弘前市 稲見 則彦  
池田市 上山 堅坊  
吹田市 須磨 活恵  
和泉市 横山 捷也  
大阪府 高木 道子  
豊中市 松尾美智代  
和歌山市 福井 菜摘  
藤井寺市 若松 雅枝  
香芝市 大内 朝子  
河内長野市 谷 久美子  
和歌山市 土屋起世子  
八尾市 村上ミツ子  
鳥取市 岸本 宏章  
和歌山市 北原 昭枝  
豊中市 水野 黒兎  
紀の川市 宇野 幹子  
河内長野市 梶原 弘光  
松江市 錦織 禮子  
江南市 脇田 雅美  
西脇市 七反田順子

前向きの二人に　エールキュービッド  
前向きという　答弁が食う予算  
打たれても　プラス志向を崩さない  
前向きが遠くに　いつてしまう古い  
前向きになると　遠くが見えてくる  
前ばかり向くから　視野が狭くなる  
再挑戦する　わたくしを好きになる  
失敗は次に　生かせと背中押す  
前向きな姿に　運も加勢する  
前向きを誓い　明日へ捻子を巻く  
前向きなあなたに　お茶を入りたいの  
何事も前向きな妻　いつも留守  
佳句

前向きな妻です　ちよつとうるさ型  
僕の尻叩くのは　妻疲れます  
前向きになれと　妻から主治医から  
前向きの言葉が　耳に心地よい  
新しい校歌は　ヒップ・ホップだぜい  
人  
前向きになるには　少し酒が要る  
地  
五輪まで生きて　やるぞと四股を踏む  
天  
一つでも好い事　あれば今日も丸  
軸  
前向きな候補へ　集まる浮動票

藤井寺市 田付 絹枝  
唐津市 仁部 四郎  
青森県 松山 芳生  
鳥取市 夏目 一粹  
明石市 梶谷 和郎  
和歌山市 喜田 准一  
橿原市 居谷真理子  
橋本市 石田 隆彦  
松江市 三島 裕丘  
堺市 澤井 敬治  
神戸市 富永 恭子  
奈良市 渡辺 富子  
大阪市 柴本ばつは  
四條畷市 吉岡 修  
南あわじ市 萩原 狸月  
鳥取市 石谷美恵子  
弘前市 高瀬 霜石  
堺市 奥 時雄  
三田市 堀 正和  
大阪市 畑中 節子

「忙しい」

平松 かすみ 選

(投句 195名)



冬將軍一氣に峠道越える  
 咲きだせば忙しくなるシクラメン  
 今が旬AKBもゆるキャラも  
 忙しい時ほど意欲湧いてくる  
 忙しい死んでる暇は有りません  
 忙しく生きた男の棺のふた  
 金魚鉢の中もくるくる忙しい  
 お人好し背負った役に追われてる  
 エスカレーター乗ってからでも走ってる  
 行列で舌打ちをして嫌がられ  
 朝昼夕三度着替えて出るパート  
 忙しい中でも母のにぎり飯  
 稲刈りに寸暇惜しんでにぎり飯  
 畑の虫も退治の箸も忙しい  
 父ちゃんが一夜で帰る転勤地  
 急がねば軽四で来るヤキイモ屋  
 サービスタイム賞味期限が忙しい  
 縄のれん忙しかった日の流れ  
 大晦日有名蕎麦屋目が回る  
 忙しいときは使わぬ標準語

弘前市 吉川ひとし  
 弘前市 福士 慕情  
 弘前市 高瀬 霜石  
 堺市 村上 玄也  
 神戸市 白川 淑子  
 交野市 森本 弘風  
 八尾市 宮崎シマ子  
 札幌市 三浦 強一  
 河内長野市 松岡 篤  
 堺市 奥 時雄  
 堺市 矢倉 五月  
 東大阪市 佐々木満作  
 河内長野市 黒岩 靖博  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 河内長野市 渡邊 修  
 三田市 堀 正和  
 大和郡山市 坊農 柳弘  
 四條畷市 吉岡 修  
 伊丹市 平井 富夫  
 鳥取市 岸本 宏章

母さんは寒い眠いと言っとれん  
 忙しい人だ見ていて目が回る  
 忙しき加速させてる好奇心  
 てんでこ舞いばやいているが好きな道  
 嘘に嘘重ねて脳が忙しい  
 忙しいオールナイトの販売機  
 走るほど広い家でもあるまいに  
 忙しい時に限って泣く赤子  
 冬休み靴の数だけ忙しい  
 脳内が空回りして気ぜわしい  
 忙しいこの世ほつほつついて行く  
 飯の世の約束事で忙しい

佳句

倉吉市 山中 康子  
 寝屋川市 富山ルイ子  
 松江市 錦織 禮子  
 堺市 内藤 憲彦  
 橿原市 居谷真理子  
 三田市 今西 廣子  
 堺市 澤井 敏治  
 和歌山市 武本 碧  
 犬山市 関本かつ子  
 海南市 小谷 小雪  
 香芝市 大内 朝子  
 和歌山市 上田 紀子  
 大阪市 高杉 力  
 和歌山市 福井 菜摘  
 貝塚市 石田ひろ子  
 西予市 黒田 茂代  
 弘前市 稲見 則彦  
 大阪市 古今堂蕉子  
 大阪府 野田 栄呼  
 東京都 川本真理子

軸

二度寝した付けが私を走らせる

「パチパチ」

関本 かつ子 選

(投句 189名)



パチパチと賛成されて忙しい  
瞬きに音立てそうな付け睫毛  
回りからパチパチ歌が弾み出す  
パチパチの元はジェラシーかも知れぬ  
パチパチと弾けるごまへ蓋をする  
路地裏に算盤弾く音がある  
後から大きな拍手サクラかも  
静電気ふたりの仲がヒートする  
パチパチと拍手となりもそうして  
勇気ある一人に続きだす拍手  
欲と欲遺影を泣かす遺産分け  
アンコール予定してない大拍手  
ヒーローをシャッター音が取り囲む  
参加して義理の拍手をして帰る  
盛り上げた歌は下手でも拍手きた  
目をパチパチさせてはならぬラフシーン  
パチパチと火花散らせる友が欲し  
喝采が虚しくひびく辞任劇  
伝い歩き手の鳴る方へ導かれ  
母だけが父の音痴へ手を叩く

鳥取市 大前 安子  
河内長野市 坂上 淳司  
鳥取市 春木圭一郎  
和歌山市 武本 碧  
米子市 中原 章子  
弘前市 稲見 則彦  
可児市 板山まみ子  
和歌山市 北原 昭枝  
唐津市 仁部 四郎  
大山市 金子美千代  
横浜市 川島 良子  
三田市 堀 正和  
和歌山市 平田 元三  
八王子市 川名 洋子  
大阪市 坂 裕之  
松江市 中筋 弘充  
高橋市 初代 正彦  
豊橋市 藤田 千休  
東京都 川本真理子  
横浜市 菊地 政勝

フェアプレー敵も味方も拍手する  
鳴り止まぬ拍手緞帳また揚がる  
お役所が先にソロバン弾いてる  
やる気ない拍手はきつと反対派  
その先のパチパチ修羅を語らない  
クラシック少し遅れて拍手する  
義理でする拍手乾いた音がある  
頑張った自分へ拍手惜しまない  
大往生思わず拍手したくなる  
派手だった拍手に負けた少数派  
パチパチと拍手の方に会釈する  
ライバルの勝利に音のない拍手

防府市 坂本 加代  
鳥取市 永原 昌鼓  
堺市 内藤 憲彦  
笠岡市 藤井 智史  
大和郡山市 坊農 柳弘  
大阪市 高杉 力  
和歌山市 福井 菜摘  
大阪市 原田すみ子  
奈良市 大久保眞澄  
大阪市 柴本ばつは  
堺市 奥 時雄  
橿原市 居谷真理子

エンディングまばらな拍手だとしても  
パチパチと爪切る音はまだ元氣  
ノブの手をからかっている静電気  
すばらしい弔辞へ拍手したくなる  
パチパチと手の鳴る方にいた論吉

佳句

温暖化地球の爆ぜる音がする  
モチたことないけど結婚はできた  
ガンパレの思いを込めてする拍手

東大阪市 北村 賢子  
弘前市 高瀬 霜石  
松山市 栗田 忠士  
香芝市 大内 朝子  
佐賀市 真島久美子  
長野県 丸山 健三  
西予市 黒田 茂代  
鳥取市 岸本 宏章  
真島久美子  
丸山 健三  
黒田 茂代  
岸本 宏章  
大内 朝子

# 初しぎ教室

題一 わくわく

山口 光久

春になると雛の誕生です。鶯は生まれて間もない頃「キヨキヨキヨ」と鳴いています。やがてホーホケキヨと成鳥の鳴き声になります。動物の鳴き声にはワンワン、カアカア、ジージー、チンチロリンなどがあります。物の響く音にはザアザア、ひゅうひゅう、パカパカ、ピーヒャララなどがあります。

このような動物の声、人間の声、物の響く音が擬音＝擬声といわれ、そのまま言葉にして表現するのをオノパトベと称しています。これらの言葉を入れて句を作ると鮮明なイメージを与え、リアリティーのある句にする効果があります。

幸せを運んできそうホーホケキヨ

ホーホケキヨうまくなつたら居なくなる

三代の心は一つピーヒャララ

ピーヒャララ聞くと案山子も血が騒ぐ

擬音というものは誰にでも同じに聞こえる

ものではないのでその点ご注意を。

## 【添削】

原 月食を見ながら土壇場プロポーズ 洋一  
一月の題は「わくわく」です。題を間違えましたね。気をつけましょう。

原 初孫を指折り数え待つジイジ (中) 修  
「孫」と「爺」はペアみたいなもので、「ジイジ」は不要です。

添 初孫を指折り数え待つ至福  
原 お年玉わくわく顔が目浮かぶ マユミ  
「わくわく」を無理に詠み込んだ感があります。句全体から「わくわく」が感じられ  
たらよいのです。

添 お年玉待ってる顔が目浮かぶ  
原 ゴルフなし明日はパパと遊園地 武人  
上五は冗句です。

添 土曜日の明日はパパと遊園地  
原 全快の友のワクワクの電話口 満壽恵  
添 全快の友はわくわく電話口  
原 わくわくしプレゼント持つイブの夜 モモ  
「イブ」は聖夜のこと。「夜」は不要。

添 わくわくとイブに待ってるプレゼント  
次の三句は下六です。ご注意を。  
原 わくわくと胸おどらせる発表会 (冊) 節子  
添 わくわくと胸おどらせる初舞台

原 わくわくとずしりと重い宅急便 (富) 恵子  
添 宅急便わくわくしつつか封を切る

原 顔合わすだけでワクワクした初恋 (山) 純子  
添 顔合わすだけでワクワクした至福  
原 句の発表配達待って落着かぬ 孝明

添 わくわくと胸おどらせて待つ塔誌  
原 笑顔みるわくわく気分孫掃省 開子  
添 孫の笑顔わくわくしつつか待っている

原 ひ孫出来わくわく待つ男の子 (山) 久子  
添 わくわくと待つたひ孫男の子  
原 孫のくる報らせ部屋中片付ける 美紗子  
添 わくわくと部屋を片付け孫を待つ

原 わくわくとしながら孫と彼氏待つ こそえ  
添 わくわくとしながら孫を待っている  
原 孫出番わくわくしてる頑張って 登子  
添 孫出番わくわくしてる初舞台

原 孫立つち一歩出るのが待ち遠し 福貴子  
添 孫立つち一歩歩けと胸おどる  
原 クラス会初恋の人来るかしら 紀美恵  
添 初恋の人来るかなクラス会

原 風紋やわくわくしたと躁く砂 心咲  
添 風紋にわくわくしてる躁いでる  
原 逆境の友にわくわく孫の笑み 絹枝  
添 逆境の友にわくわくさせる孫

原 わくわくと目線集める逸の城 律子

添わくわくと興奮させる逸の城 添わくわくとお会いした方どこの誰 筆筒預金わくわく溜める古希半ば 紀雄

原わくわくと泉のごとし好奇心 原わくわくも動悸疑うお年頃 友子 君に似た子が生まれると信じた日 恭子

添わくわくと湧いてきました好奇心 添わくわくも動悸疑う歳になる 満知子 老いらくの恋かわくわく気もそぞろ 凱柳

原わくわくの期待最後はダメ虎に 原わくわくが子供の視野を広くする ひとし わくわくを血圧計が睨みつけ 孔一

添わくわくの期待はどこへダメ虎に 添わくわくが子供の視野を広くする ひとし 着くまではわくわくします観光地 回春子

原拍手受けわくわく感に芽が起る 原紅葉晴れわくわくしてる母の靴 ひとし 黄昏でわくわくしてる好奇心 昭枝

添拍手浴びわくわく感に芽が伸びる 添紅葉狩りわくわくしてる母の靴 ひとし 期待込め宅急便の紐を解く 角宏子

原わくわくも少し抱いて職を去る 和之 片思い彼女と同じ席に着く 泰宏 わくわくを秘めて女の渡る橋 前洋子

添わくわくも少し抱いて退職日 原一人旅見知らぬ土地で深呼吸 ひろこ 英男 胎動に娘の顔が母になる 志津子

添一人旅見知らぬ土地で深呼吸 原一人旅見知らぬ土地で深呼吸 ひろこ 国和 行くまでが頂点だった旅の空 富香

原わくわくがドキドキになる披露前 添わくわくと赤いバイクを待つ きのこ 風花 新婚のわくわく感ほ消える泡 風花

添わくわくと胸躍らせる披露前 原もう来ると郵便受けを覗きこむ 亜希子 忠士 娘の帰省わくわく造る母の味 見山 温子

添もう来ると郵便受けを覗きこむ 原もう来ると郵便受けを覗きこむ 忠士 一人旅夢も袍に詰めている 川洋子 娘の帰省を待ちわびる母は手作り料理で出 迎える。これが母の優しさでしょう。

【少しの修正でよくなる句】 原発表の日高鳴る胸の音を聞く (株)玲子 川洋子 娘の帰省を待ちわびる母は手作り料理で出 迎える。これが母の優しさでしょう。

添発表日高鳴る胸の音を聞く (株)玲子 川洋子 娘の帰省を待ちわびる母は手作り料理で出 迎える。これが母の優しさでしょう。

原合格を期待して見る発表日 忠貞 毎日のワクワク感で長生きを 天翔 わくわくが疲れて帰るバスポート 萩原 狸月

添合格を期待して待つ発表日 忠貞 毎日のワクワク感で長生きを 天翔 わくわくしながら海外へ、遊び疲れて成田 着。それで充実感が得られたら結構。

原クリスマスわくわく開く玉手箱 ミヨノ 今年から大きくなったポチ袋 とも湖 わくわくと境界線を越えてみる 川本真理子

添クリスマスわくわく開くプレゼント ミヨノ 今年から大きくなったポチ袋 とも湖 わくわくと境界線を越えてみる 川本真理子

原ベツピンが隣に座りわくわくと 辰夫 もう一度肩書き変えて天降り 晶子 期待と喜び、そして興奮が境界線を越えさ せるのです。境界線の向うには。

添ベツピンが隣に座り胸おどる 辰夫 もう一度肩書き変えて天降り 晶子 期待と喜び、そして興奮が境界線を越えさ せるのです。境界線の向うには。

原わくわくとお会いした目はどこの誰 勝治 娘の相手インテリ風と気が逸る つな子 【私の句】 わくわくがめつきり減った痩せ蛙

添わくわくとお会いした目はどこの誰 勝治 娘の相手インテリ風と気が逸る つな子 【私の句】 わくわくがめつきり減った痩せ蛙

原わくわくとお会いした目はどこの誰 勝治 娘の相手インテリ風と気が逸る つな子 【私の句】 わくわくがめつきり減った痩せ蛙

添わくわくとお会いした目はどこの誰 勝治 娘の相手インテリ風と気が逸る つな子 【私の句】 わくわくがめつきり減った痩せ蛙

原わくわくとお会いした目はどこの誰 勝治 娘の相手インテリ風と気が逸る つな子 【私の句】 わくわくがめつきり減った痩せ蛙

# 川柳塔鑑賞

同人吟 早川 遡行

—12月号から

山の神動かずに居る神無月

浅田 隆樹

遭難のそのちははに山は晴れ

麻生 路郎

時を待つマグマが地下で渦を巻く

藤村 亜成

昭和三十七年「川柳雑誌」二月号の巻頭吟にある路郎の句。

去る九月二十七日午前十一時二十五分、岐阜県と長野県に跨る御嶽山（三〇六三米）が噴火。戦後の火山災害では最大となる五十七人の死者を記録。述べ一万五千人の捜索隊を投入するも、なお六名の行方不明者を山頂に残したまま捜索は打ち切られた。遭難と言う悲しい現実を残したまま山は晴れ渡っていた。

予告なし御嶽さんは怖い山

井上 桂作

岩陰に頭を隠し難を逃れた人や、テลมスのお陰で命を救われた人の話などを聞くと、生と死はまさに紙一重であったことが窺える。火山大国の日本列島、何時どこで噴火が起こっても不自然ではない事を改めて知っておくべきであろう。

地球の表面は十数枚のプレートで覆われていて、一年間に数センチずつ動いていると言われ、このプレートの運動が地震発生の原因で火山噴火のマグマを発生させていると言われている。陸のプレートの下に水分を含んだ海のプレートが沈み込むと、地下深部でマントルの一部が溶けて上昇しマグマが発生する。高温で液体のマグマは周囲の地質よりも比重が小さいため、地表高くに溜まりマグマ溜まりが形成され、さまざまな要因の影響で地表に噴出するというのである。

信仰の山に灰が積る無念

柿花 和夫

まさか御嶽山が、という予期せぬ噴火である。信仰の山は一瞬にして火山灰と噴石の修羅場と化し、多くの犠牲者は火山灰に埋もれ帰らぬ人となってしまった。

御嶽山が噴火した時、神様は出雲へお出掛けになって留守だった。「肝心な時に」と言うのはどこかの政治家やお役所の言い分けのようで面白い。

富士噴火じわり身近になつてくる

伊勢田 毅

御嶽山の噴火で、世界遺産の富士山にも噴火の危機が近づいているのではないかと懸念される。世界遺産に登録されてからというもの、世界各国から押し寄せてくる登山者で山頂まで数珠つなぎであり、一日の登山者は御嶽山の比ではない。もしここで噴火が起こったらと思うと、ぞつとする。

火の国に安心出来る山は無い

島 ひかる

世界の活火山の一割近くを占める日本の、どこに安心して暮らせる場所があると言うのだろうか。山と海に囲まれた日本列島、地震と津波、台風と火山噴火、はては原発災害まで。考えて見れば日本は世界にも稀な災害大国であるということが言えよう。

怒つてる御嶽富士も何時の日か

板山 まみ子

噴火当時、山頂には二百五十人を超える登山者がいたものと思われる。紅葉の真つ盛り、しかも絶好の登山日和とあつて山頂は人で溢れ返っていたに違いない。

雄大な山の景色を眺めながらお握りを口に啜えようとしたそのとき、噴火は起つたのである。不意を衝かれた登山者は為す術もなく御嶽山の怒りにふれその犠牲になつてしまった。

御嶽の救助に折る明日は晴れ

米澤 俣子

誰しも、一日も一時間でも早い救助をと、テレビの画面にくぎ付けになりながら打ち切られる度に、明日は晴れて欲しいと祈らずには居られなかつた筈だ。

山ガール山がピンクに若返る

山野 寿之

その日の御嶽山はまさにその通りの光景であつたに違いない。子ども連れから若いカップル、お年寄りまで、日帰りでこんな三千メートル級の山まで登れる山は乗鞍岳と御嶽山において他にない。

御嶽山歌つておれぬ暴れよう

池上 清治

しみじみと聞く木曾節は日本人の心を歌っているようで実に懐かしい。御嶽山の悲惨な状況を目の当たりにして、暫くこの民謡は歌わないことにしよう。

運不運火山列島ど真ん中

津守 なぎさ

日本には一一〇の活火山が存在するが、常時観測されている山は四十七火山だけである。二十四時間体制で遠隔監視され、地震や地殻変動の動きを検出して気象庁に刻々とデータが送られ、職員が地震や地盤の隆起など噴火の兆候が無いか常に警戒しているのである。

御嶽山なめたらあかん怖い山

浅野 房子

御嶽山に限らずどんな低い山でも、決して気を緩めてはならないという自然からのメッセージとも考えられる。

おそろしい噴石無差別攻撃

村上 ミツ子

死者五十七人の大半が噴石によるもので、火口から一キロ離れた地点にまで吹き飛んでいたという。時速三百キロで落

下してくる直径五十センチもある噴石は防ぎようがない。そんな石が四メートル四方の間に十個以上も集中していたというから驚きだ。

地球儀も宇宙も泣いている御嶽山

西村 りつえ

これは御嶽山に限つたことではない。一日八千人を超す登山者で溢れ返る富士山。年間二千万人が訪れる箱根山の大湧谷など、いつ噴火してもおかしくない恐ろしい山なのである。

鎮魂へ御嶽山の月も欠け

渡辺 富子

何事もなかつたように御嶽山の月が出る。遭難者を弔つてか、少し欠けている。

オスブレイ御嶽山は避けて飛ぶ

近藤 正

最新鋭のオスブレイも自然の脅威には逆らえぬ。日本の空は守れるが自然災害は守れない。

向かい合う夫婦もマグマ溜めている

喜田 准一

活火山静かな妻の低姿勢

山田 婦美子

噴火は、何も山に限つたことではない。

# 水煙抄鑑賞

—12月号から

片山 忠

どうですか聞いてパソコン見てる医師

藤塚 克三

九月頃より脊椎管狭窄症にとりつかれ、病院を五ヶ所ほどハシゴした。その内のペインクリニックの医者に、せめて僕の目を見て話して下さい。と言ったことがある。

支えてくれた人を忘れる自惚れる

助川 和美

サラリーマン時代に、仕事も遊びも絶好調で妻の反対を聞かず保証人になり、大失敗。

好きになる武士の情けが分かる人

太田 としお

私を含め、器の大きい老人が減りましたね。好かれない一心よりも、嫌われる勇気のある老人のほうが情があり魅力的かも…。

もう少しが我慢できずに口はさむ

藤原 大子

私は誰にでもすけすけ物を言う質で、多分煙たがられていると思う。要はすけすけ内容に悪意があるかどうかである。心したい。

人並に生きることってむずかしい

尾畑 なを江

何を基準にして人並と判断するのだろうか。けど何となく分かるような気がする。難しい。

ライバル紙傷にこそぞと塩を塗る

成田 せいじ

朝日新聞の体たらくに内閣までが大騒ぎ。他紙も読売を筆頭に攻め立てたが、結果は、業界紙全体の部数減となった。私は悪女の深けのように、未だに朝日と縁が切れない。

よく眠る夫の顔が子に戻る

北原 昭枝

苦勞をさせられた夫の寝顔を見る連れ合いの愛情が目につかぶ。私は退職後、せめてつぐないにと、三度の食器洗いや掃除等日課のようにしているが、感謝されない。それだけでは許されない前科が私にあるらしい。

氣付かれずたばこを吸いに部屋を出る

大治 重信

今もしつこく吸う人の最低のマナーだろう。

賞味期限なんてわたしにありません

柴本 ばっは

これを言い出してからも、相変わらず食中毒は出ているし、あげくの果てには、大量の未だ食べられる食品の廃棄へと繋がっ

ている。なぬ！賞味期限で、ばっはさん自身のこと？

当たっては砕けています趣味の壁

上山 堅坊

ある結社の関係で存じ上げているが、兎に角熱心、どこでも顔を出す。見習いたい先輩。

検査が続ぎ病人らしい顔になる

吉道 あかね

なるなる。十年ほど前、妻が肺ガンだと、それも面倒見の悪い主治医より告げられた。その時妻が倒れそうになった。家に帰り「そんな重大なことを軽々に主治医づらしてあなたに言われたくない」と、無性に腹が立った。

夫婦って他人どうしでできたもの

三谷 白黒

当然であるが、忘れているから喧嘩になる。古希に興味麻雀加えはまっている

荒本 郁子

当地の老人クラブの同好会に活性化の一環として、麻雀やフラダンスを加えるつもりです。

親の手を離れ戻らぬブーメラン

磯部 義雄

手をこまねいていると将来、約半数の市区町村が消滅するらしい。地方創生に少し期待。



## ちよつと怖い話

こころ温まる「ちよつといい話」だったら良いのですが、今回は「ちよつと怖い話」です。怖いのは聞くのも読むのも絶対にイヤ！という人は、これから先は読まないで下さい。悪い夢を見て驚かれたとか、夜中にトイレに行けなくなったという事になっても責任は負いません。次の話は私の体験ではなくK女史からお聞きしたことです。

日課の散歩でいつもの道を通っていつもの公園に行きました。早朝のことですので人影はありません。不気味なほど静かでした。歩きながら何気なく木立の方を見ると、人の足が見えます。「あんなところに誰か…」と思って立ち止まったとき、その足が宙に浮いているのに気がつきました。地面に着いていないのです。「首吊り！」と気がついたとたん、身体がガタガタ震えてきました。頭が真っ白になって「どうしよう！どうしよう！見なかったことにして逃げようか…」と周囲を見回しますと、向こうから男の人が歩いて来るのが見えました。「助かった！」と駆け寄って早口で事情を説明しました。その初老の男性は落ち着いて「ケータイを持っていたら警察へ連絡しなさい」と言ってくれました。男性がしっかりしていたのでようやく110番出来ました。それから警察官がやって来るまでも長く感じましたが、その男性は傍で待っていてくれました。そのあと警察官からこまごまと事情聴取を受けたあと、ようやく帰宅することが出来ました。

Kさんはその後、宙吊りの足のことが頭から離れず、また余りにも異常な体験のために友達にも話すことが出来なかつたそうです。私が聞いたのは数カ月経ってからでした。

この話を聞いた翌日のことです。書架が溢れていましたので「不要な本は捨てよう」と片付けにかかりました。1年も2年も手にしていない本など生涯読むこともないでしょう。「これは捨てる」「これは残す」と仕分けていたとき、「川柳の仲間・句」が10冊余り出てきました。B6判50頁ほどの冊子で、それぞれ個人特集が組まれています。中に私の特集もありました。「これは捨てられんな」と思いながら記事を見ましたら、冒頭に大きな活字で作品が10句紹介されていました。その中の1句に「ギョッ！」としました。

## 公園で首を吊つてはいけません

びっくりすると同時に笑ってしまいました。何という偶然！この句を作ったことなどすっかり忘れていましたし、作句動機などもまったく覚えがありません。冊子の発行年月日を確認しましたら、2004年6月となっていました。もう10年以上も前のことですから当然でしょう。

同じ冊子が4冊ありましたので1冊をKさんにお送りしたところ、折り返し返事が来ました。それには、「あまりの偶然にビックリして、笑ってしまいました」と書かれています。それを見て少し安心しました。

皆さん、どれほど辛いことがあっても自死はいけません。「いや、誰が何と言おうと決行する」という事態に陥ったとしても、公園で首を吊つてはいけません。



(投句一〇〇名)

今回から「インスピレーション・ナビ」と名付けた印象吟の選をさせて頂くことになりました。よろしくお願ひ申し上げます。

印象吟はご存じのように、視覚や聴覚などから得たイメージを作者がそれぞれ一句に置き換えてゆくものです。ここでは絵や写真など、視覚に限られたものになります。それらから生み出される一句が読者にとって「なるほど」と、すぐ納得出来るような句ではない方がいい、それが私の考える印象吟なのです。

この絵からどうしてこんな句が出てくるの、そんな「エツ」という驚きが欲しいですね。

そして、絵と句を何度も見返すうちに断絶されていた両者を繋ぐ点線が立ち現れてくる、驚きの数だけ絵に隠されてい

た豊かな表情が溢れだすに違いないのですから。そんな点線を手繰りながら、さまざまな角度から覗いてみたいものです。さて、第一回目は誰でも一度は見たことがある有名な図柄です。それではイメージの世界へ一緒にしましょう。



虹の出る噴水らしい手をたたく  
大坂市 笠嶋 惠美

(評) 手をたたく音に触発されて出てくるであろう虹の七色、視覚から聴覚へ、二次元から三次元へと膨らんでゆく。

宇宙葬恨みつらみは忘れよう  
和歌山市 楠見 章子

(評) 宇宙から見れば人間なんて塵よりも小さい。恨みつらみも宇宙葬の前では跡形もなく霧散してしまっだらう。

王様になった時から裸です  
明石市 糀谷 和郎

(評) 権力を持った者の哀しみの一つは誰も過ちを正してくれないこと。王様に本当のことを言ってくれるのは誰。

見つめあうふたり 傷つけあうふたり  
弘前市 高瀬 霜石

(評) 愛するふたりは時に激しく傷つけあったりするもの、傷の深さはまた愛の深さでもあつて切ない。

鞍馬天狗の予備の頭巾を虫が食う  
西宮市 足立 茂

(評) 鞍馬天狗が予備の頭巾を持っていたなんて、そう思うと彼の存在が急にリアルに感じられてくる。

も一人のわたしを斬った息づかい  
青森県 松山 芳生

(評) 良いわたしが悪いわたしを斬ったのだろうか、出来ることならそうあつてほしいと願うのも人間の欲か。

反抗期今日から女対おんな  
大坂市 栃尾 奏子

(評) 親子であつても女と女はキビシイものがある。まして反抗期ともなればなおさらだ。劣勢のお母さんにエール。

壺を覗いて以来無口な二人なり  
堺市 栗原 道夫

(評) 何をこの二人は見てもしまったのだらう。見てはならないものを見たあとはただただ黙るしかないようだ。

大阪市 平井美智子

威圧する西太後の髪飾り

(評) 西太後の絶対的な権力は、髪飾り一つからも感じられる。ゆらゆらする飾りに触れようものなら、ああコワイ。

堺市 澤井 敏治

見つめ合うマツサンエリーがんばりや

(評) 朝の連続ドラマのふたり、その即興性が楽しくまた面白い。今一番新鮮なカップルが目の前にやって来た。

鳥取市 倉益 一瑤

満月よウサギの行方知らないか

(評) やっぱり月にはウサギがいてほしいもの、それも満月となれば一層のことだ。伝説もいい、昔話もまたいい。

大阪市 立蔵 信子

目を見ると全部わかるのなんて嘘

(評) 夫にしても恋人であっても、いや、自分の生んだ子供でさえわからないことだらけ。句の最後に置かれた嘘の説得力。

河内長野市 山岡富美子

父さんの喇叭に誰も踊らない

(評) 父さんが家長の威厳を失ってから久しい。今日も日本のどこかで虚しく喇叭を吹いている父さんがいるのかも。

大阪市 津守 柳伸

舞い降りる天女をしばしお待ちする

(評) 美しい羽衣をまとって降りてくる天女をお待ちしている晴れがましき、そのあとに続くドラマの幸を祈るばかり。

枚方市 小林 わこ

聞こえないもつと近くで話してよ

(評) けっこう近くにいるのに話し声は意外と聞こえないようだ。ごくありふれたようすが却って可笑しい。

篠山市 酒井 真由

ちよつと一杯という雰囲気でなし

弘前市 吉川ひとし  
放射能汚染に蓋をする日本

芦屋市 竹山千賀子

マジシャンの花が壺から出てこない

富田林市 山野 寿之  
ダブルベッド背中合わせの君と僕

東大阪市 佐々木満作

まだ若い鏡の中の独り言

橿原市 居谷真理子  
なりゆきのキスではのかに葱匂う

鳥取県 斉尾くにこ

出陣へクレオパトラがでかあがる

東京都 川本真理子  
落ち込まぬように立ち位置変えてみる

奈良市 阿部 紀子

真剣に別れ話を詰めている

香芝市 大内 朝子  
にらめっこ笑うと負けよあつぷつぷ

豊中市 松尾美智代

夢の種蒔いたもうすぐ芽が出ます

箕面市 広島 巴子

海南市 三宅 保州

バラの花束を際立たせる黒子

宝塚市 田中 章子  
ライバルの眼鏡を借りて見る景色

神戸市 山崎 武彦

出合い系その空間に潜む闇

河内長野市 坂上 淳司  
待った無し白人力士睨み合う

弘前市 福士 慕情

天と地の恵みを受けて生きている

高槻市 片山かずお  
正直な鏡に爺さんが映る

大阪市 井丸 昌紀

見つめるとうつつすら虹が見えてきた

米子市 吉田 陽子  
アラジンがお出ましになるお静かに

奈良市 岩本 浩二

尖閣を巡り日中ならみ合い

3月号発表  
(1月15日締切)

予告 4月号お知らせ



# 『麻生路郎読本』余滴 (25)

## 「矢車」と路郎作品 ⑦

葉原道夫

「矢車」二八号（明治44年8月）の巻頭作品は、「三太はこんな時に泣く」である。作者は、さんた。目次では、「三太はこんなことに泣く」川上幾二となっており、川上三太郎である。七五調の詩と句を組み合わせた珍しい作品なので紹介しておく。ただし、わからないところが数多くある。御教示頂ければ幸いである。（ルビは筆者）

### 三太はこんな時に泣く

さんた

さてもしづかな\*濱町の河岸の\*鉛に  
灯がはいりや/あの\*銀笛の薄れゆく浮  
いた調子のらつばぶし……/夜の\*白熱  
の銀紙に帯の金茶が怯びえ泣き/酒つ  
ぐ口を見詰むればややに瞬毛が\*ちろ  
ろめく/長唄好きなの顔とくつきり

白いその指に/小學校を持ち馴れし草  
のかばんに\*泣いしやくり

夕されば三味線といふ語ありと歌ふ

すみだ川涙ながれぬ水喚げば

\*しみじみと死を思はするらつばぶし

死ぬことを涙して夜を舞ひさしめ

\*ちろりんとしてと聲きりが眼に泌みる

「人は辛抱が肝心ぢや」とや\*乃公は泣く

「新内を覗そく其の子はただひとり

夕ぐれの水はいたけれ妓と立てば

\*薄きナイフのさしびざと盆のゆふべの

かなしさは/\*カステラの粉ほろほると

こぼれて指は黄に蒞し/幼なき畫をい

たいけに頬杖ついて見るとなく/見れ

ば涙がひとすちに頬に流るる繪ばなし

は/\*小銀がお銀のあと追ふてひとりば

つちの足をとが/平がなばかりで読み

をはるあはれつくしの挿繪かな

盆が来りや\*てりてり坊を思ひ出す

\*駒鳥は雨がいやちやと泣いたげな

兒守唄\*金網蜘蛛が眼に遊ぶや

泣きしとよ「善玉ひとりで瘠せて居る」

鈴虫よ銀の青味がかなしかり

魂棚に外國船の色が浮く

オフィリヤの歌が悲しや死ぬは嫌や

\*泣かま欲し入日の坂の角兵衛獅子

(千九百十一年七月作)

\*印をつけたものについて、順にコメン  
トしておく。

「濱町」は、隅田川遊覧の拠点で色街で  
あった地。現・東京都中央区東日本橋一丁  
目辺り。

「鉛」は、浜町河岸の色。「矢車」三〇号(明  
治44年10月)、三太郎の「印象の断片」に、東  
京で思ひ出すのは濱町河岸の鉛色と人形町  
の夜の金茶とある。

「銀笛」は、銀色の六穴の笛。銀笛で当時  
大流行したラッパ節を吹くのが流行ってい  
た。また、銀笛の音色にはかなしげなイメー  
ジがあったようだ。北原白秋の「思ひ出」(明  
治44年6月)の「銀笛」に、(思ひ出の夜  
の空の/ほの青き瓦斯の火に、/しみじみ  
と/銀笛の音ぞうれふ)とある。

「白熱の銀紙」は、より明るくするために、  
白熱球のカバーに銀紙を巻いた物か。

「ちろろめく」は、「ちろちろ」「ちろつ  
く」などと関係のある言葉か。見詰められ  
て恥ずかしく視点がはつきりしない様子を  
言ったものか。「思ひ出」の「水銀の玉」に、

（鏡をそつと反して、緑ふくその上に水銀の玉を載すればちらちらとその玉のちろろめく、指さきに觸るればちらちらとちぎれてせんしや、ちろろめく、捉へがたきその玉よ、小さき水銀の玉。）とある。

「泣いしやくり」は、濁音の「泣いじやくり」ではなく清音。「思ひ出」の「みなし兒」に、（なにかわかかねど、ひとすちに見れば輪廻が泣いしやくる。）とある。

「しみじみと」の句。ラッパ節は、日露戦争が終つた明治38年以後、大流行した。添田唾蟬坊作詩の末節に、（倒れし战友抱き起こし／耳に口あて名を呼べば／につこり笑つて目に涙／萬歳となふも口のうち／トコトツトツ）とある。

「ちろりん」は、虫の鳴き声。「思ひ出」の「夕日」に、（何かの虫がちろりんとして泣いたと思つたら死んでゐた。）とある。

「薄きナイフのさびしさ」は、「思ひ出」の「骨牌の女王の手に持てる花」に、（されど晝餐のあかるさに／老嬢の身の薄くナイフ執るこそさみしけれ。）とあり、瘦身の老嬢がナイフを執るさみしさを、「薄きナイフのさびしさ」に転じた。

「カステラの黄に澁し」は、「思ひ出」の「カステラ」に、（カステラの緑の澁さ

よな、褐色のこぼれが眼について、ほろほろと泣かるる。）また、「かりそめのなやみ」に、（カステラをふくみつつ、その黄いろなる、われはかの君をぞ思ふ、／柔かき手のひらのなつかし。／小さきその肩のなつかし。）とある。

「乃公」は、目下に向かつていうときの男子の自称。我が輩。おれさま。音数に合せて「おれ」とルビをふつておいた。

「お銀小銀」は、明治33年「幼年世界」臨時増刊号に発表された継子いじめの童話。泉鏡花作で公表されたが、弟の斜疝作であるとす説がある。「小銀がお銀のあと追ふて」とは、継母に山中に捨てられた姉のお銀を、実の娘の小銀が一人で行方を探し求めたことを指す。「思ひ出」の「どんぐり」に、（どんぐりの實はかずしらず／水の面に唇つけぬ。／お銀小銀のはなしより／どんぐりの實はわがゆめに）とあり、「お銀小銀」の話が知られていたことが窺える。

「てりてり坊」は、てるてる坊主。「盆が来りや」との取り合わせが不明。

「駒鳥」は、なぜ雨がいやなのかが不明。「金縷蜘蛛」は、女郎蜘蛛のことか。「思ひ出」の「金縷の蜘蛛」に、（雨ふれば濡

れそほち、／日のでれば光りかがやく金縷の蜘蛛。）とある。「兒守唄」と「金縷蜘蛛」の取り合わせが不明。

以後の句では、「善玉ひとりで瘠せて居る」が不明。「鈴虫」と「銀の青味」「魂棚」と「外國船」との取り合わせも不明。

「泣かま欲し」の「まほし」は、希望の助動詞。「思ひ出」の「断章二十四」に、（泣かまほしさにわれひとり、／冷やき玻璃戸に手もあてつ、／窓の彼方はあかあかと入日の野ぞ見ゆる／泣かまほしさにわれひとり。）とある。

「三太はこんな時に泣く」は、浜町に売られてきたであろう薄幸の少女を客の「三太」の視点で描き、「三太」が感じる様々々なさしさを七五調の詩と句で表現しようとした作品である。注目すべきは、北原白秋の「思ひ出」の言葉を多用している点である。明治44年6月に「思ひ出」が刊行されるや、三太郎は「思ひ出」を耽読したにちがいない。そして、琴線に触れた言葉を用いて、一月後にこの作品を完成させたのである。

（次回に続く）

# 同人特集 私の一句

(順不同)

父として誓いのキスは見ていたよ

さわやかな仲間の心地よい隙間

未完成だから楽しいことばかり

グーグルを開くと広い海に出る

哀しみの深さへそそぐ月明かり

たればの意味は未練と希望です

眠くても蚕きらめく糸を吐く

人間だけ神に逆らい生きています

手持ち無沙汰何かいたずらしたくなる

ともかくも今日切り抜けた手を洗う

母になりました未来を生みました

今更とといった手つきで酌される

憎しみを許せるほどの年になる

この寒さ酒を飲むより他になし

ラブサイン少し甘めの玉子焼

B型の男何かと大雑把

慰めは言わずにそっと肩を抱く

竹原市 小島 蘭 幸

鳥取県 新家 完司

和歌山市 川上 大輪

大阪市 西出 楓 楽

弘前市 波多野 五楽庵

唐津市 仁部 四郎

米子市 八木 千代

大阪市 前木 たもつ

高石市 浅野 房子

橿原市 安土 理恵

橿原市 安居 真理子

弘前市 稲見 則彦

高槻市 井上 照子

大阪市 井丸 昌紀

八幡市 今井 万紗子

大阪市 岩崎 公誠

奈良市 岩本 浩二



失敗が財産ならばたんとある	老いて未だ画布描き足りぬ事ばかり	独りだと言ひ聞かせつつ子と暮らす	一行詩一途精進夢未来	貴方には借りがあるから死ねません	キリストの小さき背中にしがみつ	母の手がきれいになつて老いてゆく	夕陽まつ赤今日のかなしみ焼きつくす	芸なんか出来ぬ素顔を見て欲しい	さわるでないさわるでないというに桃	おまじないぎゅつと夫の手を握る	あほやなああの声で心も目もゆるむ	口ポットがドヤ顔する日近いかも	なるようになると思えば気が軽い	暇やからどうやと別の暇が来る	どの風も信じられない風見鶏	ばらばらにしたら答が見えて来た	火の川を越えても水は掬えない	どうしてもどうにもならぬこともある	手と手と手ほうら小さな輪になつた
犬山市	富田林市	堺市	大阪市	横浜市	高知県	三田市	西宮市	高知県	西宮市	藤井寺市	奈良市	大阪市	香芝市	豊中市	枚方市	大阪市	大阪市	河内長野市	竹原市
金子	片岡	加島	笠嶋	小野	小澤	尾崎	奥田	小川	緒方	太田	大久保	大川	大内	江見	海老池	榎本	榎本	植村	岩本
美千代	智恵子	由一	恵美	句多留	幸泉	一子	みつ子	てるみ	美津子	扶美代	眞澄	桃花	朝子	見清	洋	舞夢	日の出	喜代	笑子



あの日から駄目をだめとは言えぬ国  
 軒のない家に風鈴やつと吊り  
 お向かいに座っていても充たされぬ  
 偏差値が上がり希望を膨らます  
 目標は今この時を輝かす  
 破いても裂いても平和鐘は鳴る  
 栄光の過去なつかしむ再生紙  
 いい舵が切れたと思う子に翼  
 記憶にはないが日記にある事実  
 三歳で馬はしつかり金稼ぐ  
 健康であれば何とかなるこの世  
 近道をするから夢が消えて行く  
 他人には無駄に見えても意味がある  
 靴下を外して入る春炬燵  
 体温が伝わるように書く手紙  
 幼子も内緒話は大好きだ  
 ゆらゆらと生きよう二度とない余生  
 終章はわたし一人のファンファーレ  
 健康であれば今年も大丈夫  
 大注連の巨木に神の宿るかに

大阪府	池田市	芦屋市	西予市	河内長野市	鳥取市	三田市	河内長野市	和歌山市	鳥取市	鳥取市	広島市	出雲市	横浜市	大阪府	東かがわ市	大阪府	藤井寺市	西宮市	奈良市
桑田	栗田	黒田	黒田	黒岩	倉益	久保田	木見谷	喜田	岸本	岸本	岸本	岸	菊地	川端	川崎	河井	鴨谷	亀岡	加門
ゆきの	久子	能子	茂代	靖博	一瑤	千代	孝代	准一	孝子	宏章	桂子	政勝	一歩	ひかり	庸佑	瑠美子	哲子	萌子	萌子



花の土触れてやさしい手に変わる	愛というファジーなものが続く幸	古本の中へ帰って行きませんでした	やつとこさ好きも嫌いもない夫婦	傘寿の器に傘寿の夢を盛る	雑魚なりに真っ直ぐな橋渡り切る	曖昧な言葉で包む思い遣り	冬の景乙切りする虎落笛	触れ合えば分かち合う日がきつと来る	知らん顔少しは出来るようになる	運は天にひいてみまますかあみだくじ	五黄土星運命線が揺れている	子の老後心配したら笑われた	散りぎわも色艶失せぬ柿落葉	森においてよい時も守ってあげるから	くじ運は無いが戦地の生き残り	おこぼれの子の義理チョコはほろ苦い	安心して病気も出来ん世に向かう	抜け道の風は弱音を許さない	ぎくしゃくとして美しい一輪車
荻屋市	和歌山市	京都市	犬山市	吹田市	高槻市	高槻市	堺市	東大阪市	大阪市	篠山市	箕面市	堺市	弘前市	枚方市	平川市	米子市	松山市	明石市	堺市
竹山	武本	高島	関本	須磨	杉本	島田	澤井	佐々木	坂井	酒井	酒井	齋藤	今林	小西	小西	後藤	古手川	糞谷	栞原
千賀子	啓子	啓子	かつ子	活恵	義昭	千鶴子	敏治	満作	裕之	真由	紀華	さくら	愁女	わこ	雄々	美恵子	光	和郎	道夫



ボランテイア人に寄り添い福もらう  
 めんどうだから本当のことを言う  
 テレビ見てあそこは行ったなあ妻よ  
 精いっぱい動いて今日の絵を描こう  
 九条は守る戦火の生き残り  
 推敲を重ねて消える一生も  
 まな裏に家族揃っていた景色  
 十五夜に平和満喫するしじま  
 ありがとうひと声かける潤滑油  
 梅一輪春はまだかと雪に問う  
 うまい米尺貫法の父の汗  
 諸行無常 無欲になれず手を洗う  
 不謹慎な拍手を心の中にする  
 ぐんぐんと私ひっばる予定表  
 わだかまり溶ければ小さじ一と半  
 突然死同情したり妬んだり  
 夕立が去っても続く お茶タイム  
 叩きがいあるでしょマシユマロの武装  
 これ以上の楽園はない同居中  
 人並みの裏に上中下の意識  
 三桁の樹齡ただただ拜む御来光

熊本市	米子市	寝屋川市	生駒市	高槻市	高槻市	大阪市	羽曳野市	京都市	堺市	篠山市	大阪市	大阪市	大阪市	紀の川市	枚方市	和歌山市	鳥取県	大阪市	宝塚市
永	中	富	飛	富	富	栃	徳	都	遠	遠	寺	津	津	津	辻	丹後	玉置	竹	田
田	原	山	永	田	田	尾	山	倉	山	山	井	守	守	村	内	屋	置	信	口
俊	章	ルイ	ふりこ	保	美	奏	みつこ	求	唯	可	弘	柳	なぎ	志	次	当	照	章	章
子	子	子	子	子	子	子	子	芽	教	住	子	伸	さ	子	根	肇	彦	義	子



過去未来一緒に茹でているパスタ  
 半世紀僕も館も朽ちはじめ  
 月よ飲もう酒は天下の灘五郷  
 ひびき合う心は僕の宝物  
 手枕の孫はスヤスヤ夢の中  
 おしゃべりな友もしつとり京御膳  
 両親の旅路を辿るフルムーン  
 凱旋門何はさておきボンジュール  
 区画整理閑散とした街作る  
 真っ直ぐに柔らかく聞く孫の耳  
 言い訳や人のせいにはせぬつもり  
 自分史はグチぐち愚痴で満載に  
 泣き笑い紡ぐ仲です夫婦箸  
 大笑いして体まで軽やかに  
 徘徊の妻の手綱を捌けない  
 口出さぬ手出さぬ金をちよつと出す  
 地味な人ほど冴えている自己主張  
 古いだけで間引かれるのは罪ですか  
 眼裏に故郷を抱いて遠く住み  
 子に残す僅かばかりの自尊心  
 白鷺城黒田官兵衛街飾る

姫路市	大阪市	茨木市	京都市	豊中市	鳥取市	弘前市	箕面市	鳥取市	富田林市	鳥取市	大阪市	神戸市	吹田市	日高市	枚方市	枚方市	堺市	西宮市	鳥取市	川西市
古	伏	藤	藤	藤	福	福	広	平	肥	春	原	能	野	根	二	二	西	西	西	西
川	見	井	井	井	西	士	島	尾	山	木	田	勢	下	岸	宮	宮	村	口	川	内
奮	雅	正	文	則	茶	慕	巴	菜	一	圭	す	利	之	方	紫	山	り	い	和	朋
水	明	雄	代	彦	子	情	子	美	文	郎	子	子	男	子	鳳	久	つ	わ	子	月
																え	ゑ			



晴雨兼用の傘でお役で立ちましよう  
情報通も隣人の顔知らず

幸せをこつこつ探す汗かいて

春の潮ベースアップの渦生まれ

寺巡る度に鱗を置いてくる

ノラになる朝もゆっくりパンを焼く

生き様を語る鱗を剥ぐように

よろこばせごっこ心の和音から

団体の中で光っている無口

思い出は有象無象出来事に

どん底を言わぬ人生自然体

泥水が蓮の気品を包み込む

憲法の解釈変えてトテチテタ

観覧車星を掬ってくれないか

男一匹替え芯などは持っていない

花枯れて優しく散って行きました

モカの香に集えば彩りなくてよい

合図など要らぬ阿吽の呼吸です

ありがとうで今日一日を終わりたい

プロ野球スーパースターなく寂しい  
人生のついでには実に面白い

和歌山市  
さいたま市

古久保  
星野  
和子

鳥取県

細田  
裕花

東京都

まえで  
とよこ

米子市

政岡  
日枝子

京都市

榊本  
宏子

倉吉市

牧野  
芳光

神戸市

松井  
文香

豊中市

松尾  
美智代

大阪市

松尾  
柳右子

和歌山市

松尾  
和香

和歌山市

松原  
寿子

札幌市

三浦  
強一

豊中市

水野  
黒兎

海南市

三宅  
保州

八尾市

宮崎  
シマ子

八尾市

宮西  
弥生

堺市

村上  
玄也

八尾市

村上  
ミツ子

大阪府

山田  
盛隆

鳥取市

森山  
盛桜

ひと粒の麦になろうと書いて  
 降車ブザー誰か押すのを待っている  
 落丁も誤植もわたくしの狼煙  
 機嫌良く食べて明日へ汗をかく  
 一日に一回笑う種をまく  
 正体はツルだったのがあるがとう  
 ぬらりくらし迷彩服で生き延びる  
 友に触れころころ弾む毬になる  
 修二会から春の息吹が舞い上がる  
 朱が足りぬまま老いてゆく私の絵  
 スニーカーに履きかえ虹をさがそうか  
 民話の里鬼も天狗もいとおしい  
 決心はいつでも出来る今日は飲む  
 善し悪しをまだ聞き分ける両の耳  
 五欲まだめらめら燃えていて傘寿  
 反戦を叫ぶピカソの絵が叫ぶ  
 三猿に徹して気楽老いの知恵  
 昼寝から覚めると雨が降ったあと  
 やがていつか大樹となつて帰り来よ  
 いいんですひとりでぼちちが好きだから  
 庖丁は暗いところに眠らせる

和歌山市	大阪市	藤井寺市	松原市	藤井寺市	鳥取市	奈良市	大阪府	四條畷市	西宮市	奈良市	吹田市	富田林市	倉吉市	長岡京市	尼崎市	鳥取県	神戸市	河内長野市	高槻市	堺市	
木	江島	鈴	森	若	両	米	米	吉	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	安	矢
本	谷	木	松	松	川	田	澤	岡	本	本	本	野	中	田	田	下	口	岡	田	倉	
朱	勝	い	ま	雅	洋	恭	俣	義	昌	希	寿	康	葉	耕	節	光	富	忠	五	月	
夏	弘	さ	つ	枝	々	昌	子	修	子	代	久	之	子	子	治	子	久	美	子	子	

# 本社十二月句会

◇十二月五日(金)午後一時  
アウイーナ大 阪

あまのとりなさんから贈られた色とりどりの菊の花が飾られた会場で本年最後の句会が開催された。参加者百十三名(投句七名)。初出席は四条駿市の西川ひろしさん。

お話は鈴木いさおさん。題して「本社句会にみるユーモア句」。四年前から最近までの作品、約二〇〇〇句の中からビックアップしたユーモア句を紹介。テーマとして一番多かったのは妻と酒。最後にいさおさんの独断で佳句五句、天地人、軸吟が披露され会場を沸かせた。因みに天地人は次の通り。

家計簿は津軽海峡冬景色

地

哲学者の顔で立読みして帰る

人

私を絞るとポトリポトリ酒

完

月間賞は油谷克己さん(大阪市)  
(司会)蕉子・真理子 (脇取)千代・勝弘  
(受付)宏子・靖博 (清記)勝弘

座題「ひつじ」

佐々木満作 選

おだやかにゆっくりひつじどし折る  
純毛の服をまとうて優しい目  
まだ迷う羊にきつと明日がある  
ひ孫という小ひつじ暮に揃いぶみ  
ひつじ雲ながめて心やわらげる  
ひつじ年穏やかな世を請い願う  
けれんみない小ひつじの目にみせられて  
妻も羊も怒ったことはありません  
羊雲に乗ってゆらりと浄土まで  
午前2時ひつじも僕も不眠症  
三代のひつじを見張る母でした  
八十路来て迷い続けている羊  
モヒカンにしてとひつじから注文  
牧草をひつじの白がなこませる  
スランプの出口で群れている羊  
夕陽背に影追いかける羊飼いの  
メリーさんの羊で終わる娘のピアノ  
来る年の賀状を食べているひつじ  
会える人会わぬ人ありひつじ雲  
天国を見ているんだネひつじの目  
群羊が閑議でつくる自衛権  
羊毛に包まれぬくい夢をみる  
ウールだと言われ話はスフの事  
羊たち身ぐるみはがれ悲しい目  
未の刻はネコと昼寝のスキンシップ  
カシミヤの平和を願う羊たち  
抱きしめたいと思う羊の縫い包み

蕉子 順子 堅坊 一步 大子 美智子 蘭幸 朱夏 真理子 葉子 堅坊 はこべ シマ子 アキ 寿之 眞澄 淳司 好 扶美代 唯教 大子 見清 美智子 隆彦 求芽 女也

身の程を悟るひつじにあるケジメ  
争いはしない羊のまるい角  
ひつじ年優しく攻めていい年を  
草原をウールマークが駆け回る  
山の湖ひっそりと咲くひつじ草  
羊追う少年の夢無限大  
ひつじ雲すきな夫よ今いずこ  
ミレーの絵羊も鐘に祈るよう  
羊に羽つけて天空翔る夢  
ひつじ歳寅の妻には函が立たぬ  
佳

柳弘 朱夏 武臣 茂 美智代 朝子 耕治 進 裕之 恭昌 靖博 としお 直樹 舞夢 (矢)五月 妙子

兼題「器」

加川 靖鬼 選

方円の器を嫌う臍曲り  
大物の器で読めぬ腹の底

哲男 准一

アハハと任せなさいと言う器  
 小さめの器に盛つてある平和  
 欲の無い一膳を知る古茶碗  
 コーヒーカップの中にあるのは愛ですか  
 晩成の器が揺れる冬の空  
 控え目な器が料理ひきたてる  
 蓋付きにします幸せ入れる瓶  
 引き際が見事大きな器だな  
 上げ底のわたしはすぐに溢れ出る  
 耐えること字び大きくなる器  
 ぶり大根入る器は決めてある  
 凜として一輪の花ほこらしげ  
 カロリーを計つて味気ない器  
 ふく刺しが九谷の皿に花咲かせ  
 古稀すぎて未だ眠つている大器  
 竹筒にこころ模様寒椿  
 川柳塔卒寿の器ゆるぎなし  
 華やかな器に旨い京料理  
 大皿に絆いっばいてんこ盛り  
 地球から悲鳴聞こえる聴診器  
 夫婦茶碗大きい方が妻のです  
 物忘れ器の底が抜けている  
 とまずれば独り善がりになる器  
 水掬うときは器になる両手  
 波風に鍛え抜かれて来た器  
 古伊万里にちよこんと座る平和論  
 身の丈に合うた器と暮して  
 古代ロマン土器のかけらで夢はずむ

紀乃	今晩もあのぐい呑みが呼びにくる	かずお	勝ちたくて勝つたのでない勝ち拾う
千代	努力した日々が器に合つてくる	美籠	花束になつてカスミ草の勝負
奏子	不器用と知つているのはふくらばき	アキ	まだ勝つたことがないけど好敵手
蘭幸	のれんくれば湯気いっばいに並ぶ鉢	恵	時どきは夫に勝ちを譲つとく
紀華	無器用な木綿豆腐として生きる	朱夏	運命に勝ち金に勝ち妻に負け
大子	人間の器が分かる酒の席	敏治	誘惑に勝つて体重維持してる
かずお	器ではございませんと言う自信	和夫	勝つよりも自分に恥じぬ道選ぶ
完次	どん底で人の器がためされる	桃花	敵持たぬ人最後の最後勝つている
耕治	母の味盛ると安心する器	郁夫	ジャンケンに勝つて小さい方貰う
好	大器すぎて窯から出られない息子	眞澄	喫水線の下で逆転勝ち狙う
義子	妻の焼く夫婦茶碗で古稀祝う	裕之	敗れても賛辞惜しまぬ好敵手
加お里	人	楓	病に勝つこんな嬉しい事はない
瑠美子	ハブニング神に器を試される	楽	人生を楽しく生きて勝ち越そう
耕治	愛を盛る母の器に底がない	好	勝負には勝つたと胸に言い聞かす
いさお	天	寿之	癌との戦妻に勝利があるように
よしみ	軸	哲男	勝ち組のキミは淋しい顔でいる
紀雄	一对の夫婦茶碗にある歴史	英旺	すつきりと勝つて尻尾まで吠える
忠子	器からポタポタ水が漏れている	はこべ	言い勝つてせめて夫の靴磨く
寿之	兼題 「勝つ」 原田すみ子 選	直樹	声高に正義を叫ぶのは勝者
宣子	賞金と一緒に貰う勝ち名乗り	眞理子	そうだおんな泣いて勝つ手があつたんだ
保州	ためにならない東京の一人勝ち	篤	正論のきれいな色に勝てません
富美子	負けたさいこの人瞳光つてる	眞理子	足許の明るいうちに勝ち名乗り
柳弘	いっばいに開き意固地なグーに勝つ	眞理子	大根の白さに勝る白はない
蘭幸	負けたさいこの人瞳光つてる	眞理子	明日は今日のわたしを凌がねばならぬ
修	いっばいに開き意固地なグーに勝つ	眞理子	いくさせぬことが負けなくにつくり
完次	戦勝は人の命と引き換えに	眞理子	勝者ほど敗者劣る術を知らない
扶美代		眞理子	勝敗は時の運だと父自若
良子		眞理子	勝つた気がしないどんぐりの偏差値

わこ	アキ	かずお	桃花	見清	大子	みつ子	文代	忠子	ばつは	亜成	宏子	唯教	たもつ	ばつは	一歩	求芽	朱夏	弘一	宏子	文代	柳弘	千代	あきこ	天笑	正春	みつ子	眞澄
----	----	-----	----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	-----	----

勝ったから言える努力と汗の数  
勝ち逃げは許してもらえないこの世  
勝ったのは女負けのないのも女

佳

雑音の中で最後は愛が勝つ

やつと勝つライバル先に逝きはった

しんがりのあなたのお蔭ブービー賞

スタートラインみんな勝者の顔をして

勝ち負けはもういい二人仲直り

人

言い勝った帽子目深に冬の章

土石流に勝ったみんな逃げ切った

天

引き返す勇気が勝った登山靴

軸

我慢比べ勝つのはいつも母でした

兼題 「エコー」 長井 善純 選

お風呂場でエコーに酔った浪花節

たつぷりとエコーの効いた軒かく

私にアベノミクスのエコーなし

カラオケはエコーが頼り古希の会

シングルベル街中エコークリスマス

大丈夫君のひとつここだまする

カラオケにエコー入れても下手は下手

除夜の鐘何を祈るか百八つ

山彦も冬眠中の過疎の里

敏治

完司

六点

完次

勝弘

とーな

好

月子

アキ

美津子

日の出

天

脳検査

エコー

健さん

ママ

超音波

天も

昭和

エコー

鼻歌

ハルカ

小心

エコー

CT

元氣

こだまでも声が聞きたいあの声が

エコー効かせ彼の心をゲットする

気になるなエコー検査が長すぎる

アベノミクスエコーの結果知る選挙

真心はエコーのように通じ合う

心地よいこだまの声に騙される

ドンパチと変なこだまがするアラブ

山彦も迷子になった土砂崩れ

お葬式エコーは効かせないように

お風呂場のエコーで歌いのほせてる

サイレンの響きが村をまとめてる

エコーかけ今朝はご機嫌らしい妻

おーい笹君はわたしを裏切らぬ

ママの声お腹の子にはエコーする

脳検査エコー寂しい音を出す

エコー利かせて夜霧よ今夜も有難う

健さんへ愛のエコーは途切れない

ママ独演エコーのきいた終い風呂

超音波検査で写る腹黒さ

天も地もエコーが届く大宇宙

昭和史を繰ると反戦歌が響く

エコー検査足取り軽く縄暖簾

鼻歌がド演歌になる狭い風呂

ハルカスで叫べど返事なく

小心を隠すエコーを効かせてる

エコーには何も写ってない野心

CTもエコーも叱る不摂生

元氣だよ亡母の笹よう一度

みつ子

美籠

勝弘

ルイ子

保州

行兵衛

淳司

和夫

朱夏

大子

篤

とーな

義子

妙子

完司

いさお

たもつ

恭昌

淳司

日の出

富美子

万紗子

眞澄

正春

扶美代

靖鬼

楓楽

美津子

今回も検査の石は定位位置に

酔うてはるからエコーなど切つてやる

佳

やがて母命の鼓動聞くエコー

笑つたら山も笑つたのに噴火

ひと言がゆがんでこだます世間

エコーのおかげ双子の準備できました

おなかついたーエコーが四人二十年

人

初老の恋山彦だけで消えました

地

エコーかけて聞きたい褒め言葉

天

拉致の子のエコーをみんな待っている

軸

失恋の悔しさ山彦で晴らす

兼題 「気配」 河内 天笑 選

髪抜けて冬の気配がしのび寄る

とんずらの気配トイレが長すぎる

気配りの生きたガイドで倍楽し

立ち枯れの気配期待の都構想

灯明が揺れて仏が来た気配

大好きとそぶり見せぬが胸温い

コン泥の気配亭主の朝帰り

プロポーズされそう夜の観覧車

冬眠の気配が脳がストライキ

ゴキブリも気配感じて出てこない

よしみ

月子

黒兎

眞澄

眞理子

美津子

わか

ばっは

義

耕治

天

義

天

義

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

枕元ババのサンタの気配する  
寒そうな顔へ差し出す軍資金  
空気読む猫で膝からおりてくる  
空き部屋に人の妖気が今もある  
一波乱ありそう空気を震えてる  
髪切つて少女は羽化をする気配  
ひとことが別れの気配悟られる  
お若い連発役がくる気配  
足音の気配で分かる好きな人  
気配消し忍びよるのが詐欺師です  
提げてきたようだ休肝日がゆれる  
双眸に恋の気配がキラキラと  
立ち直る気配黙って見守ろう  
この季節ジャンボが当たる気配する  
垣根越しくさめ一発父帰る  
老母のね息聞いて安心そつと閉め  
気配りが細やか過ぎてうとまれる  
顔出すととたんに話変えてうと  
誰か来た気配やっぱり風だった  
仏壇の中にあなたという気配  
かあちゃんの気配がないと落ちつかぬ  
サンタはババだお酒の臭いしてたもん  
何時もより爛熱いめに雪催い  
喝采の拍手にただならぬ嫉妬  
神さまの人の気配を感じるお賽銭  
被災地に人の気配を感じない  
口下手も優しい気配漂わす  
酒が出る気配に上げた腰下ろす

進 朱夏 扶美代 正春 扶美代 楓楽 紀華 眞澄 則彦 ひろし 美津子 英旺 みつ子 勝弘 万紗子 ばっは 忠子 朋月 月子 あきこ 朝子 とーな 朱夏 保一 弘一 唯教 満知子 雅明

佳 蛇口から冬の気配がすぐそこに  
あの二人誰も気づかぬ仲だった  
さよならの気配に気づくお味噌汁  
ひろがった気がするあなたとの隙間  
仲なおりの気配類がピンクです  
人 今日あたりおでんと解かるのも夫婦  
地 じつと見つめられてる私がお好き  
天 干し大根風の気配に深呼吸  
軸 きな臭い風にのせられないように  
兼題 「のんき」 小島 蘭幸 選  
誰の子か知っているのは私だけ  
気分よし天気良好医者へ行く  
百歳は諦めました預金ゼロ  
のんきそうに見えてどこにも隙がない  
マイペースそんなあなたに救われる  
のんきな人だ付合つてみたくなる  
のんきだが記念日だけは赤いバラ  
賞罰ナシブライド無しでのんびりと  
左遷地の地酒うまいというメール  
のんびりと僕の遺影を選ぶ僕  
猫もねずみものんびり暮らしたい国だ  
のんき節唄うしかない素浪人

寿之 勝弘 奏子 理恵 五月 蕉子 倅子

車座のてつべんで呑気が笑う  
賞味期限など確かめたことはない  
食うや食わずの頭を知らない好き嫌い  
寝て起きて食べて喋つてもう師走  
ムーミンババ何をいうてもそうなんか  
年寄りやから車がよけてくれるわ  
年の瀬はのんきな私でも走る  
心配性のわたしが産んだ娘が呑気  
安月給のんきな妻よ有り難う  
昼行灯の振りをするのも楽でない  
のんびりですがしっかりと花芽つけている  
追伸にのんきなことを書いてくる  
のんきな人の周りに風の輪ができる  
師走でも出窓で猫は日向ぼこ  
王様はすっぱんぼんでご満悦  
寿限無寿限無羊そこまで来ているよ  
めし炊くの忘れて歌をうたっている  
ジングルベル世間は世間あわてない  
環状線何度まわつたのか昼寝 (矢)五月  
お姑さんはいいな日向で猫抱いて  
のんきなのか眉間にいつも雲がない  
友達もひとつは病気もついている  
ケセラセラ今日は五杯も食べました  
余裕綽綽クラゲになつて年を越す (楠)和夫  
昼寝から覚めたら戦争中だった  
佳 雨かないいや雪やなと炬燵から (矢)五月  
五十億キロ飛ぶのにわたくしは昼寝 見清

よしみ 完司 進 隆彦 勝弘 眞澄 千枝子 桃花 耕治 保州 美智代 完次 扶美代 満知子 とーな 朱夏 完司 修 五月 理恵 五月 葉子 宣子 和夫 真理子

今もお神話にしがみついている  
筋トレも脳トレもしてのほん茶  
のんきそうに振る舞うゆるキャラの激務

人  
のんき者と言われるほどに熟れてきた

地  
年賀状は紅白を聞きながら書く

天  
なまけものみたいな暮らし夢見てた

軸  
惚けないで欲しいのんきなお母さん

平成26年度本社句会皆出席者

(順不同)

- 足立 茂 安土理恵 油谷克己 居谷真理子
- 石田隆彦 市坪武臣 江見見清 江島谷勝弘
- 上山堅坊 榎本舞夢 大内朝子 指宿千枝子
- 加川靖鬼 小島蘭幸 熊代菜月 榎本日の出
- 黒田能子 坂 裕之 酒井紀華 太田としお
- 澤井敏治 島田誠一 新家完司 奥田みつ子
- 関よしみ 遠山唯教 栃尾奏子 片山かずお
- 中村 恵 西内朋月 西出楓楽 鴨谷瑠美子
- 藤井則彦 坊農柳弘 水野黒兎 古今堂蕉子
- 牧浦完次 村上玄也 矢倉五月 佐々木満作
- 山口光久 山崎武彦 山田耕治 柴本はつは
- 山野寿之 吉岡 修 鈴木いさお
- 飛永ふりこ 松尾美智代 山岡富美子

(50名)

# 句会 燦 燦

## 11月句会を読む 岩 崎 眞里子

月例会が百名を越えているとは、毎月大会を開催している  
ように凄いなあ。作品には楽しさと緊張感が溢れている。

善人と言われ小さく生きている  
楓 楽  
はこべ

作品を創り、投句する流れの中で幾度となく迷う。それは、  
創作の根底に否定し難い善があるから。句の中で自然に表出さ  
れた作者の柔らかな想いに触れると、川柳って良いなと思う。

街角に包丁研ぎが座る秋  
たもつ  
朱 夏

通りすぎた季節光ってしまいましたね  
光 久

突き刺すような寒風と包丁研ぎが、覚悟すべき強烈な季節を  
物語る。幾度となく繰り返される季節の中で、通り過ぎたから  
こそ解ることがある。特に、眩しく輝いていた頃は…。

句読点省き迷路に入りこむ  
光 幸

見抜かれていたこそこそそそわそわも  
玄 也

立ち止まり振り返ることも句読点の一つ。母や祖母は姿形も  
句読点のようで、見抜く力を秘めている。父ちゃんの釘を何と  
かしてくれる分別も智慧も、そこから出て来るようである。

こけしですちよつと訛りがございます  
祥 文

京言葉なんでも許しそうになる  
眞 澄

津軽にこけしの底に足形を描く工人がいた。たぶん、無口な  
訛だったと思う。津軽弁にとつて柔らかな関西弁は憧れでもあ  
る。好きな言い方はいろいろあるが、どんなお国訛りでも受け  
入れてくれるような関西訛りの大らかな雰囲気大好き！

群衆の中で訛りが立ち上がる  
焦 子

津軽にこけしの底に足形を描く工人がいた。たぶん、無口な  
訛だったと思う。津軽弁にとつて柔らかな関西弁は憧れでもあ  
る。好きな言い方はいろいろあるが、どんなお国訛りでも受け  
入れてくれるような関西訛りの大らかな雰囲気大好き！

# 老心ゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。  
編集部

## 川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

生命のラインを外す尊厳死  
期限切れそれはわたしのことですか  
これ以上脱ぐものがない野球拳  
じゃんけんで親の介護を回される  
赤道をくぐり見に行く十字星  
酔いざめの水が現実つきつける  
期限など決めなきや期限切れもない  
付いてくるライン崩した影法師  
またいのは自分だったと知る手綱  
またいのを優雅と読んでくれた人  
人が好きまたい列車に乗ってみる  
またいから冥土のバスに乗り遅れ  
期限切れなんて女に言わないで  
恋に酔う賞味期限もあとわずか  
人間も柿も吊して甘くなる  
戦争でなくじゃんけんで決めますよ  
ラインから外れ自分を取り戻す

洋々 一瑤 無限 蟹郎 野蒜 みゆき 清信 重忠 地佳平 善平 金祥 とも湖 文麗 雅香 秋月 天翔

母白寿期限はまだと貯金する

出掛けぬと損をするよな秋日和

戦争を知らぬ子供のおモチャ箱

法相の首が団扇で吹つ飛んだ

切れぬよう縁の糸を手繰りよせ

じゃんけんで決着などと怪しからん

幸せは夢中になれることがある

またいのでいざ鎌倉に手間がある

勝負時くつきり眉のライン描く

野球拳負けて裸ではずかしい

期限切れ気にせず食べる我が女房

期限切れ迫るが佳句生まれない

期限切れを待つて弁当貰い受け

メタボかな腹のラインが気にかかり

期限切れ嗅いで舐めたが大丈夫

期限切れしないで欲しいまだ元氣

人生に期限切れなど見当たらぬ

夕焼けに遇うと失恋よみがえる

※「またい」はのろい・鈍感の意

### 和歌山三幸川柳会 武本 碧報

お上手ねその一言で木に登る

頂上に立てばかすんでくる世間

時折りは上に流れてみたい川

気分上々ぐちも自慢も寄つといで

雨上がりペンキ塗らたて青蛙

やれやれの上にも一つあった上

上には上あったと知った井の蛙

穀

美恵子

節子

回春子

あしび

美佐枝

圭一郎

妻子

凱柳

振作

隆浩

昌鼓

由美子

孝二

茶人

幸子

茂登子

一粹

義雄

夢子

俣子

章子

きく

八重子

美子

上出来と褒められ嵌まる役どころ

上げ底と見抜けなかつた有頂天

組板の上で覚悟を決めている

上向いて歩き小石に蹴躓く

逆鱗に触れて一皮剥けました

それからの蛙柳を登り切る

それからと続くどめでもない我欲

それからの話が続き柿をむく

それからの先はそれから考える

それからと問えばこけしが横を向く

それからは月も仲間の輪に入る

和解してそれから流れ澄んでくる

来客にその後気になるサスペンス

流れ星それから夢を見る宇宙

それからは言わぬが花の楽屋裏

小走りの癖は直つた定年後

怠け癖ついて掃除機ひる寝する

気に入らぬ人には顔に出してしまう

捨てる癖ついてないのが戦中派

七癖の全てを妻に見抜かれる

他人の癖気付き自分の癖見えぬ

嘘吐きが他人の嘘に騙される

本当のことは言えない子のカルテ

思いやりあって大人の嘘をつく

善人の嘘は語尾から剥げてくる

何気ない嘘で親友遠去かる

みね

起世子

美羽

幸子

保州

昇

昭枝

美枝子

和子

絹子

菜摘

イセ

かず子

千鶴

剛

富香

次根

孝子

義泰

弘子

よしこ

当代

准一

智三

ひろ子

純子

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

明日こそは思つて背に力入れ  
 おだやかな山波いつか噴火する  
 サーフアー達大荒波を樂しそに  
 荒波を越えて茜の夕陽みる  
 日本丸景氣の波に乗り切れぬ  
 老いの波手足耳口すみついた  
 鳴り石が波に洗われ懺悔する  
 海峡に波立てているハングル語  
 拉致交渉さつぱりしない北の国  
 竹割った性格さつぱり好きだつた  
 さつぱりも寂しきもある独り旅  
 天国にのぼつて爽やかな風に  
 直球でハート狙つて実る秋  
 狙い撃ちされた矢尻がまだ残る  
 舌べろべろ俺を狙つている腹  
 人生の低め狙つて細長く  
 存分に生きて狙いは只一つ  
 美しい瞳の奥に置く手錠  
 氣の向くまま足の向くまま生きたら  
 米寿まで転ばず歩け神頼み  
 夕暮れはのれん恋しと足が向く  
 よく似てる大根足が干されてる  
 足の裏みれば見るほど人間味  
 人生を背負い歩いた足の裏  
 軽やかな足音今日をしめくくる  
 新生児まず足跡を紙に捺す  
 足音が揃うと背筋寒くなる

和 人 義 人 悦 子 陽之助 紀美恵 耕 治 完 司 照 彦 重 利 紀の治 石花菜 清 道 子 重 忠 野 蒜 節 子 三津子 美美子 久芽代 滋 貴 恵 幹 啓 龍 枝 美知江 玲 坊 芳 光

素足には土のぬくみがわかります  
 足音が胸の奥までついでくる

くにこ 美ツ千

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

波静か何かが起る前ぶれか  
 合図などてんでどこかぬ人でした  
 合図から長い月日の今がある  
 OB会仲間同志の肩たたく  
 文明の利器になかなかない  
 雲に乗り空中散歩夢でした  
 お月様雲を枕にオフタイム  
 穏やかに生きてゆきたい前向きに  
 雲流る思ひは過去の榮光か

澄 子 はるみ 恵美子 英 子 ちよえ 好 栄 かつ子 安 子 昌

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

喧嘩する相手にだけは恵まれる  
 青空をいつも相手にして暮らす  
 羽繕いたつた一人のためにする  
 天も地も僕も相手を拒まない  
 噴石が相手がかわまず雨と降る  
 ほほえんだ影に本音を言いそびれ  
 初恋の想いはみんな美男美女  
 ロボットが話し相手となる未来  
 パチンコを相手に芸のない話  
 辛抱を使い果たした妻の乱  
 生きたいと病氣相手にハッケヨイ  
 家族にも相手にされてる時が花  
 縄電車車掌も客もおりませぬ  
 年金を確かめ再婚腹決まる

慕 情 焔 人 龍 馬 京 子 芳 生 一 湖 隆 樹 井 蛙 呑 舟 重 虎 則 彦 つとむ

三 浦 強 一 選

お賽銭はずんで神を困らせる  
 カタカナのように面接固くなり  
 水はサービス日本文化のすばらしさ  
 人間を手と手でつなぐ手話がある  
 もず鳴いて二人の闇を深くする  
 海越えて臓器を賣う愛賣う  
 アイデアは逆立ちしたらきつと出る  
 戦する神よ疲れていませんか  
 泣ききつて心機一転次の恋  
 約束をいっばい残し逝かほつた

てるみ 椒 子 一 歩 美佐枝 柁 子 国 治 みつこ ダン吉 浩 二

佳句地十選

(12月号から)

渡 辺 富 子 選

氣を吐いた頃の炎は青かつた  
 折鶴を開いてらくにして上げる  
 揺れながら儀式のように米をとぐ  
 遠ざかることはできて忘れられない  
 日溜りに羽毛のようなひとといる  
 アイデアは逆立ちしたらきつと出る  
 ため息の向こうに高い山がある  
 はるかなる轍の後を行く日暮れ  
 針千本呑む気でしようか再稼働  
 砕いても角の取れないいま後期

次 根 静 風 和 香 子 哲 史 真 由 みつこ 公 弘 美智代 眞 澄 葉 子

ご挨拶素直に言える人が好き  
スーパリーの試食めぐりで生きている

地図片手楽しいうろろ一人旅  
父の樹に酒の芽がでる種がある

味見するユーモアちよつと植えておく  
ランドセル背中ではずむ一年生

満点とり息を弾ませ駆けて来る  
朝日浴び段々弾む力瘤

その汗に特別賞与出しましょう  
人間になろうと弾む青い蝶

震災の負を乗り越えて来た笑顔  
性善説好きな羅漢の笑い声

鈍感力ならば誰にも負けません  
無神論然れど目が向く易曆

米寿まで生きれば石も玉もある  
逆境の時は足音重くなる

写経する雪国の筆堅い意志  
失いしもの大きな虚脱感

**竹原川柳会(広島)**  
**古田**

安全です虫のお毒味済んでます  
懸命に生き禅の姿を残す蟬

虫喰いのズボンを穿いて出た迂闊  
てこずっております私の虫

長い長い廊下で虫が鳴いている  
呑み助は今日も茶碗酒である

親友の形見となったぐい呑みよ  
乾杯で家族みんなに祝われる

想い出を連れて盃箱の中

花匠

一花

和香子

一呑

柳子

小とみ

初枝

美鈴

規子

ひとし

ふさゑ

氏加子

霜石

洋子

龍人

花峯

雅城

五楽庵

**太虚報**

神前の盃しみじみ妻となる  
盃を交わして男対男

盃を持つと一番えらくなる  
握手して隙をちよつぱり見せておく

答弁は一分の隙もない総理  
隙がない覚悟を決めているらしい

三ヶ月若葉マークに隙が出る  
猪の隙に野菜をいただこう

隙すこし見せてにんげん味を増やす  
家守るヤモリ窓からこんにちは

彼岸花一輪咲いて母に逢う  
仲秋のうさぎ影絵のようにいる

泣くよりも言い訳よりも前を向く  
年だなあ土鈴の音で丁度いい

目が合えば笑う疲れて癒されて

**城北川柳会(大阪)**  
**近藤**

金貸した友はさつぱり寄りつかぬ  
あれこれと建前並べ本音見え

三度ある人生の時待っている  
弾む音いっぱいもつて孫が来る

自分史の原点探し練り歩く  
その先の修羅は勝手を許さない

どんな未来構想を練る白い画布  
さつぱりの心に新しいひかり

国境の向こうはバラ色に見える  
大臣もうちわの風にとばされる

国境を超えて花咲く恋もある

敬子

昭紀

静風

笑子

規代

力

輝恵

白狐

寛

歩美

厚子

あゆみ

栄香

千代美

半徳

史子

**正報**

実

縣 実

たもつ

集一

麗

柳弘

賢子

朝子

克己

五月

市会から区会に格下げイヤヤねん  
国境線引いて夫婦の布団敷き

コンサート咳が出だしてあめ探す  
ウィルスは国境なんかへのカッパ

六法が世の中冷たくしてしまふ  
さつぱりは流しきれないにこり川

救援隊に感謝の歌がこだまする  
借金を清算 寄席で大笑い

わだかまり溶けて青空晴れわたる  
大樹抱く命はぐくむ音を聴く

精神を錬磨している座禅堂  
今でしょ国境越えて救う拉致

世界中えこひいきなく陽の光  
ザックザックあの靴音が高うなる

楽しいな友と横丁練りあるく  
国境をふわりと越えた揚羽蝶

水琴窟ドレミの音が弾んでる  
練り上げた嘘に免じて貸してやる

たわいない話などして秋夜長  
月一の床屋帰りの男前

異常気象天動説も捨て切れぬ  
さつぱりと効果見えない核の傘

**川柳塔まつえ吟社(高根)相見**

綿あめのような男ですいません  
鮎もらう心の美しい順に

コンペイ糖角もとろけるいい話題  
土壇場を救ってくれた鮎ひとつ

鮎玉の断片残るわだかまり

弘風

あさ子

千恵子

榮子

求芽

志華子

一步

洋志

義昭

堅坊

野鶴

美智子

修

勝弘

いさお

満作

和夫

ルイ子

公平

博

正

柳歩報

芳山

柳歩

ちえこ

涼子

孝亮

沈黙の鉛の重さに震える手

鈴ちゃんは女のバッグたしなみに

疑問点舐めながらウヤムヤに

ハッカ眠った脳を揺り起こす

ドロップの缶振れば青春の音

拉致の国綱で晒してみましようか

古希すぎて本音晒せば荷が軽い

念願の入閣したら晒し者

あれこれと晒し大臣辞めさせる

逆光へ晒すありのままの私

もう時効過去の日記を陽に晒す

農業を離れていつも思うこと

収穫の喜び知ってみたい指

つくる気で作ったわけじゃない双子

川柳は毎回ドキドキ通信は

つるつると囁まずに秋を賞味する

つるつると頭で効かぬ発毛剤

貧乏性つるつる束子捨てられず

僕つるつる頭の回転は軋む

手の平をつるとりりと滑り落ちた運

成り行きで嫌でも老いの務めあり

嫌になる事は無いだろ米の飯

嫌なやつ切手が二円足りません

嫌いでも嫌でもないが好きじゃない

嫌なこと夕焼空に撒き散らす

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

損得を計れる位置にいつも居る  
リストラで培ってきた忍と意地

とも子

聡美

美智子

禮子

知恵子

畔

久絵

俊子

弘充

寿代

昌枝

雪代

雷代

繭

紗季

草庵

幸

哲子

たけし

浜丘

幸代

千里

博子

青帆

文子

怠けてるわけではないが亀の足

お怠けのスイッチぽんと直ぐ入る

人間の怠けを論す電子音

計画は杜撰挫折は入れてない

浅はかな女が一人冬を抱く

楽園と見た人生の落とし穴

身の丈のくらしも居る妻も居る

好きなひと出来て脱皮の怠け癖

計り事大袈裟にして都構想

楽園を心の底にそって置き

人間の浅い所にある邪心

不戦日本世界で稀な楽園だ

一台の酒が楽園連れて来る

無洗米手を濡らさず赤い爪

エボラ熱奢るヒト科を狙い撃ち

竹光を差す浪人の自尊心

そつのない黒子に託す大舞台

本番に弱いと言つて三浪目

円周をなぞり本音を探り出す

腰浅く掛けて産声待つ五人

好きなこと出来てる今が楽園か

楽園は神も仏もお留守です

浪人を覚悟ぶれない夢をもつ

立ち位置がずれて浪人うろたえる

考えが浅いな酸欠の金魚

眺め良し日当たりも良し我が家良し

天災という伏兵のいる地球

あの世では夫が先に待っている  
優しさがヒトの物差しなんだろう

博泉

堅坊

たもつ

恵

森子

千代

賢子

朝子

柳弘

茜

弘一

修

郁夫

寿之

直樹

武人

寿子

麗

壽峰

りえこ

鈍甲

かすみ

一子

淑子

后子

さち子

洋

美江  
ダン吉

エッヘッヘーやっとかかった王手飛車

怠慢の諦り甘受のキリギリス

これ以上の楽園はない同居中

伏兵になったり首を切られたり

富柳会(大阪)

古田 千華報

失恋のかけら芽吹きを待っている

小粒でもこころ輝く葉指

さよならを父は遠くで見送った

甘言の裏に隠してある欺瞞

霊峰は未だ入れる男子だけ

スクリーン真ん中辺にある妬心

人生は時に追い風向い風

あやとりの梯子で落ちたのはわたし

ちっぽけな欠片にもある自尊心

かけらほどの嘘が大きな悔いになる

ウィンドウ写っています悩みまで

消されては困るあの日の一行詩

間仕切の奥の密談気に掛かる

九条の是非英霊に問うてみる

スクリーン愛が溢れていま佳境

無言劇なれど障子に映す月

雨ぼつりこれから先はもう触れぬ

鬼灯の包みの中はまだ少女

俺の山星の欠片のブレゼント

引出しに苦いかけらを仕舞い込み

臨界をさ迷う霊のメッセージ

しあわせのかけら集めて生きている  
海ゆかばヨット上は慎ましく

弘風

高鷲

ルイ子

恵子

和子

武人

仲雄

壽峰

文重

壽之

登子

静子

慶子

正治

千恵

佳子

高鷲

一文

奏子

未知

仁

よしみ

清

七朗

恵

よりこ

千華

母の地図今日も戦の染みばかり  
人間の性根を磨く紙鏝  
百態の風人の顔花の顔  
銀幕のスターのように握れぬ手  
煽てられて多弁になったスクリーン  
浴け合せて春夏秋冬の味

信子  
欣之  
紅紫朗  
常男  
アキ  
森子

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

物忘れ菌痒いわたし老いの道  
現役にこだわり確と菌をみがく  
菌に衣を着せずいつでも日本晴れ  
菌には菌をそれからいつももめている  
食いしばる奥菌我慢の宮仕え  
菌痒いが手出しはしない子の仕付け  
年金の枠でなるべく麗しく  
今夜こそ誘いに乗らぬ妻の角  
評判の妻が夫を光らせる  
風評をつくるひとりになる私  
クチコミで繁昌さがす味自慢  
評判をじつと聞いてる招き猫  
レシビ通りすると人気がない我が家  
寒風へ我流の鍋が吹きこぼれ  
ヘルシーのレシビ眺めて先送り  
皿洗うこともレシビのけじめなり

和香  
泰女  
英子  
准一  
紀子  
克子  
富美子  
よしこ  
小雪  
佐一  
大輪  
紀久子  
寿子  
秀子  
保州

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

鬼太郎が住んでいそいな森がある  
安心と油断したねと計量器  
嫌がられていても知らずお節介  
鏡からふと目をそらす自己嫌悪  
好きな子に嫌がらせする餓鬼大将  
森の宮降りて彬の碑に会いに  
揚げ物が好きな親子で太ってる  
トトロからお招き受けて森の中  
紅葉の森でひっそりチャペル婚  
子の嬉し親なほ嬉し七五三  
リハビリのおかげ元気になりました  
わたくしを癒してくれる森に逢い  
森からの流れ出る富海育て  
自分のことをまるまる人に伝えます  
森中が紅く染まって秋本番  
森の中眠れぬ美女を捜してる  
星影のワルツで別れ締め括る  
まるまると書いた手紙がまだ若い  
聞いているまるまる嘘と知ってても  
鹿狼の棲み処荒してやせる森  
嫌った酒が古稀では腐れ縁  
嘘全部信じた振りをしてあげる  
流れ星願い終らぬうちに消え

高知川柳社 小川てるみ報

これ以上ごまかしきかぬ深い皺  
ごまかして埋めても出ます放射能  
平然とごまかすオレオレの怖さ  
ごまかしの効かないものに曲る腰

光男  
シルク  
泰子  
久仁子  
喜久子  
かつ美  
ちづる  
高鷲  
登志子  
美喜  
敏  
さくら  
猿杏  
雄太  
フジ  
真一  
庸佑  
悦子  
美代子  
千鶴子  
洋一  
六點  
章司

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

ごまかせば朝は元気になる五体  
ごまかされておこう恩ある人だから  
暖  
骨太と総理は言うが民は瘦せ  
お互いの年金頼り逃げもせず  
旅はいい行けば我が家もつといい  
婆ちゃん和熟女の間ゆれ動く  
深刻な話に猫は逃げて行く  
戦争を知らずのどかな日を生きる  
蟬時雨びたり読経とマツチする  
水入らずまでは気楽な箸だった  
一匹の蚊とは言っても侮れぬ  
買いだめが切れて税率8パーに  
シャープさをなくしたハサミ一人ぼち  
米の木が見たくて図鑑開く子ら  
宴会のささやきだけどちよつと揺れ  
連休が明けたそれではでかけよう  
かすみ草で終わる一生よしとする  
今にして農継ぐ話子らが蹴る  
平常心さらりパンチを受け流し  
ふるさとを恋え木霊がかえりくる  
罪の無い烏賊を捌いて干している  
猫二匹餓えさすこともなく暮れる  
俺はオレお前はオマエ悲しいね

陽子報  
純宏  
和之  
陽子  
葵  
真帆  
美恵子  
章子  
亜矢  
信平衛  
みちこ  
寿々子  
敦子  
慶一  
華蓮  
嘉子  
菜美  
真由  
一眸  
遊子  
公弘

こんどまでまたこんどまで投票所  
色眼鏡孫の資質に投資する  
酒仙だと鼻の頭に書いてある  
羽生の關志感動涙拭きに拭き

南大阪川柳会 津守 柳伸報

ポスト前まだ読み直す気にかかる  
重要なポストに就いて不眠症  
ポストマンみんなバイクでスマートで  
喜怒哀楽我が家のポスト知っている  
喜怒哀楽沢山食べてきたポスト  
手紙ならボクが出すもう手が届く  
絵手紙は丸いポストによく似合う  
日本にも竜巻起さる地球の変  
どうしたらいいのか竜巻に注意  
竜巻を束ねて蓋をするサザエ  
天変を來ねて渦巻走り抜け  
風塵を避けて竜巻避けられず  
煽てられいちびらぬように子に教え  
いちびつて孫を泣かしてもてあまし  
いちびつて精一杯の自己主張  
いちびりの言葉を彼は真に受け  
空気が読むいちびり会を和ませる  
いちびりも幼い頃は愛らしい  
お銚子に飲み過ぎタメと妻の文字  
七人の敵は親しい友である  
トラ勝つてギヤルの輪の中肩を組む  
死んだつて酒とは縁が切れません  
美人より心根優しい人が好き

四郎 蜂朗 松風 節子  
タカ子 弘子 ばつは あや子 祥昭  
直子 修

マネキンの案山子黄金の海泳ぐ  
一人者今日明日のこと聞いてやり  
都構想へイトスビーチええ勝負  
少しずつ歩幅伸ばして秋の暮  
決心が揺らぐゆらゆらする紫煙  
血圧をなだめすかして深呼吸  
保護色に溶け込み役をやりすこす  
幸せは戦をしない国に住む  
ありがとうが生きてる卒寿の秋祭り  
また一つ昭和壊してゆくユニホ  
我を折れば廻りやさしい風になる  
いい人だらう丸くなつてる影法師

川柳塔なら 坊農 柳弘報

音頭は上手に取るが汗かかず  
白鳥の羽を通して恋語る  
励ましが耳に残つて出るガッツ  
責任は転嫁手柄は独り占め  
我国を右へ右へと安倍音頭  
耳よりな話に欲が加勢する  
決心がついて白鳥北へ飛ぶ  
アベノミクス景気の音頭空回り  
耳よりな話疑似餌か毒針か  
嘘ひとつ移す連鎖の闇の中  
竜宮へ移る返事はまだこない  
隣席へ陽氣を移す人気者  
白鳥に二人の冬が深くなる  
その先の修羅は聴かないイヤリング  
はじめには負けるな君は白鳥だ

歌留多 百合子 和雄 ルイ子 昌紀 更紗 実 国和 柳弘 楓楽 志華子 たもつ  
博一 おたか ふりこ 貫一 史郎 薰 洋子 紀雄 比呂志 郁夫 日の出 次郎 辰雄 柳弘 萌子

白鳥をピンクに染めた艶話  
大好きな内緒話が聞こえてる  
時々想いを注ぐ一行詩  
白鳥の哀しみ溶かす海の青  
だましたらいやと小さいイヤリング  
一本締めにおとこのけじめつけている  
撮る位置を変えると妻が若返る  
原点に移す君との座標軸  
神様の音頭に合わせ踊る人  
幸せは耳を素通りする噂  
美しい白鳥美しい泥を吐く  
君以外心移したりしない  
九条が世界平成の音頭とる  
徘徊の母が上手にとる音頭  
耳障りな私語が火の気のない噂  
二次会へ移つてからの威勢よさ  
白鳥の出番にあひる顔を出す  
北国を絵にする冬の使者の舞う  
笛太鼓夫を上手に踊らせる  
耳打ちをすれば漂う乱気流

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

久子 美紗子 美緒子 純子 哲男 真由  
勝弘 堅坊 富子 真理子 喜太郎 倫 盛隆 將文 榎子 理恵 朝啓 順之 寿弥 惠美子 完次 國治 成子 良一

孫の手が痒い所にいきとどく  
草とりの草も実をつけいそぎます  
アトリエが卒寿と笑う手引帖  
逃げるから苦手そのままついてくる  
齢やなあ影が時どき嫌味言う  
正直さとても土には勝てません  
おふくろの味路地裏の定食屋

メモ帳に今日も一日無事でした肩のこり菌いたが知らず休養日一冊の手帳師と生き友と生き早世白菜虫に悲鳴をあげてます独り居の方には言えぬ留守寂し自分にも苦手な人が寄ってくる故郷のそぞろ歩きも心地良いこの手帳戦時の匂い消えやらす亡母偲ぶあの話しぶりあの笑顔

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

もめごとをみんな纏める太っ腹とり合えず名目つけて駄弁り会義理がたい疎らな拍手ありがとうカラフルに広げ仕分けの糖衣錠何にでも顔を出したい好奇心大根と比較しないでほしい足

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

エプロンのポケット主婦の愚痴詰まる一人旅供はポケットブックだけ後払い甘い言葉がワナだった意を正ししっかり払って敬意大声で歌いもやもや追い払うすねかじりいつまで親に払わせる押売りは無いナイで追い払う舞う落葉つくづく吾身重ねてる歯がポロリつくづく秋だなど思ふ紅葉をつくづく惜しむタムの村

多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかあ 照代 勇 美智子 まみ子 美千代 迦行 雅美 百合 かつ子 郁子 黒兎 順子 久子 正子 長一 正代 桂子 春代 美佐子

カラオケで音痴つくづくよくわかりこだわりが選んでしまう狭い道跡継ぎの居ない男の墓のこと柳壇に自分の名出ぬこの二年

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

あちこちで噴火地球はまだ若い若い頃貧乏神と闘った少年の視野には広い天がある若いもんには負けられぬスクワット若い人の足が長いね見惚れちゃう声だけが若いと言われ顔出せぬ若い気で年の瀬三日日記買う目立ちたくなくて葉っぱに化けている母だから子のオール五を目立たせたいジャイアント馬場も来ている参観日阪神の応援団は皆目立つ忘年会一人で飲んだような顔奇抜さにも驚くレディーガガ人目引くカラコーンは守り神富士山も癩癩玉を溜めているピアニシモ位ですんだ怒り声腹立てる度に私が小さくなる怒っても喧嘩相手のない独り叱られて反論してる胸のうち深層を託され咲いた曼珠沙華深深と降る雪眺め地酒飲む静まらぬエボラの脅威深刻だ御嶽山不明者残し深い雪

柳童 純子 守啓 信男 完司 重忠 節子 雄大 和子 瑞子 智恵子 鬼一 紀美恵 野蒜 けいこ 萩江 龍枝 祐子 石花菜 美知江 茶子 由紀子 康子 次男 英子 悠子 醉芙蓉

深き愛逝った夫から気付かされごめんねと言えずあれから深い溝おいでおいでするから目立つ芒の穂

ロース川柳会(兵庫) 亀岡 哲子報

歌好きが唄う音程はばからず適当に選んで置いて文句言うキッチンで鼻唄似合う北帰行もみじ映ゆ秋には秋のうたごころ選んだ時はたしか蝶蝶であった筈

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

赤ちゃんはずべて上手にマイベース波に乗り一気に入昇り大成功マイベース易しいようで難しく十粒の種にも見えるマイベースもう少し生かしてもらおうマイベース明日もまた忘れ上手なマイベース湯の宿でしこりが溶けた酒の味貫禄のある人どこか温かい何事もなし一日をマイベース

好榮 澄子 はるみ 恵美子 英子 かつ子 ちよえ 安子 昌 陽 泰子 あや乃 みちる 幸

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

老いて今気づく夫のありがたみ駄目もとと軽くウインクゴールインほんやりと降りて気付いた忘れ物軽はずみ今まで幾度詫びたやらあと十年生きる預金が軽くなり気付いても気づかぬ振りの嫁姑

陽 泰子 あや乃 みちる 幸

ほんわかとやさしさ気づく老二入 やすの  
 ごめんねのねが軽いから許せない 薫  
 金木犀香りで秋を気づかせる 敬子  
 気付くまで待つてやるのも思いやり 昭好

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

母の死に押し入れて流した涙 房子  
 涙ぼろぼろこんな筈ではない別れ いわゑ  
 デートから涙のあとを持ち帰る 智恵子  
 神に背を押されて歩む熊野道 久仁雄  
 いざという時まで涙溜めておく 昌紀  
 私の土台になった瘦せ我慢 光久  
 本当の涙はとでも塩辛い たもつ  
 辛い日は涙かくして酒を注ぐ 加お里  
 何度泣いても同じ過ちしています 美智代  
 平和だなワサビで泣いている涙 扶美代  
 この歳でこんなに世話になるか辞書 蕉子  
 疲れましたと私の影が言う 希久子  
 秋深む涙腺すこしゆるみがち 義子  
 嬉し泣き乙女の涙真珠色 みつ子  
 ロボットが涙流す日きつと来る 楓楽

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

おまけより値引きの方がありがたい 文子  
 賞味期限過ぎたあたりがうまいんだ としお  
 ビリの子の親世の中を知っている 健吾  
 大根を買ったら葱をくれはった さくら  
 肩叩き孫がおまけと五六回 かりん  
 粗品だけ貰って帰る特売日 雅明

いい年しておまけにつられ無駄を買う 世紀子  
 見送つてからの暮らしはおまけです みつこ  
 散髪後のトントン気持ちいい 澄空  
 ゆつくりと飯も食えない宮仕え 光  
 約束を忘れのんびりパンを焼く 舞夢  
 おまけだと八百屋娘をくれました 憲彦  
 店よりも客が育てるほんまもん 願  
 ゆうゆうと眼はスマフォだけ見て歩く ひろ子  
 おまけなど付けぬ老舗の心意気 五月  
 長生きのおまけにもろた物忘れ 誠一  
 揺るぎない名人の手を見えています 朋月  
 北斎の赤富士をみて立ちすくむ 唯教  
 原発ゴ一議事堂うたう呑気節 敏治  
 寅さんといつてみたいいな風まかせ ゆみ子  
 真贋は見えぬところの差で決まる 好子  
 しあわせな一日夕焼けのおまけ 憲  
 愉快犯目立ちたがりで身勝手だ 和夫  
 本物の宗教ならば戦せぬ 永久  
 高額のお布施に長くなる読経 ヨシ枝  
 勇気あるめんこい嫁を見直した 清  
 呑気なこと言うてる割に抜け目ない 月子  
 正月が来るのに何もせぬ嫁だ 日の出  
 母さんのんき家族は気を遣う ばっは  
 夕焼けだめそめそなんか見せんとこ 時雄  
 ゴルフ場からの電話で目が覚める 八千代  
 それからのおまけ話に油断する 扶美代  
 わたくしに残つてるのはおまけだけ 玄也  
 あの実顔作り笑ひと思えない 天笑  
 免許証の写真がほんもののわたし

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

足音の中に不遜も混じつてる ダン吉  
 小菊ひと枝折つてころに植えました 美花  
 春菊は名脇役の鍋の友 花笑  
 どや顔で直立不動菊ならば 直子  
 野菊にも凜と一輪意地がある 大輔  
 菊一片入れて地酒の酔心地 義泰  
 菊花賞いずれ種馬御苦勞さん たかこ  
 人のエゴ菊花展まで順位つけ たもつ  
 株分けして隣近所は同じ菊 シマ子  
 菊花展その丹精に襟正す 忠昭  
 野路菊が咲いて里から米届く 哲男  
 菊一輪供え懺悔の慰霊祭 壽峰  
 増税の足音狂いだすりぞム 祥昭  
 足音でボチが尻尾を振っている 秀夫  
 木枯らしが消した不審者の足音 克己  
 乱暴な足音たてて再稼働 ひろし  
 戦ひそかに立てぬ足音 とーな  
 花婿は八十路資産家子無しとか 美春日  
 憎しみがあから怯むことはない 誠  
 憎しみの川渡られず闇の中 すみ子  
 方便の嘘で憎まず憎まれず キキ  
 憎しみをベールに包むときおんな 紀乃  
 憎いとも言えず踏んでる影法師 のぶ久  
 マララさん十七歳のいつくしみ 生枝  
 大義無き師走選挙の風が吹く 和雄  
 アベノミクスの破綻はもはや隠せない 鈍甲  
 日本では損ばかりする左利き 楽生

彗星フライエようわからんがおめでとう  
うらやまし葉っぱ落ちて又生える  
はくはくと焼芋匂う落葉焚き  
枯れ落ちてから愛される偉い人  
柘葉舞い過去を語りぬ吹き溜まり  
御報謝の遍路落葉を踏み鳴らす  
いっばしの詩人気分で踏む落葉  
落葉と一緒にタイガースも散った

京都塔の会

樹本 宏子報

消すのには惜しいが落書きだ消そう  
雨漏りにちゃわん並べて子だくさん  
好きな物最後に食べるお楽しみ  
ホーム内生伴奏で愛唱歌  
まだ古希だやっど喜寿だと酒を飲む  
楽しんだ後はしつかり主婦の顔  
アドリブで丁丁発止これぞジャズ  
一坪の庭で楽しむ妻の四季  
友人消して淋しい秋の夜  
消えかけた夢を見させてくれるトラ  
慌てます舌が勝手に動きます  
消遣にまだまどろんでいる火種  
お屋敷が消えて六軒のおもちや箱  
楽しもうよ明日があるとは限るまい  
鴨川の岸で楽しむ独り言  
絶妙なアドリブだった幕が開く  
連なつて行くバス眺めてる柿すだれ  
シナリオはもう無いアドリブで生きる  
月食を楽しんでいたお月様

紅 見 弘 悦 義 益 英 保 忠 満 弘 葉 宏 則 万 公 啓  
 清 子 子 子 昭 昭 旺 子 子 子 之 子 子 彦 紗 子 子 子 子

テレビ消し今夜も聞いている深夜便  
緊張を解くアドリブのタイミング  
アドリブを巧みに活かす名コンビ  
アドリブがひよいと飛び出す年の功  
アドリブで言つてしまったプロボス  
君が好きと書いたところは消しておく  
其の面影消えず夜半に寝付かれず  
これからは楽しい事だけをつまむ  
患者でも会話楽しむ熟女たち

長柳会(大阪)

坂上 淳司報

一桁の利息通知に保護シール  
隠すほどへそくり持たぬすかんびん  
幸せも詰めてて欲しい福袋  
福袋億のダイヤは見るだけに  
恋心胸に隠した片思い  
畏怖エボラ予断許さずいまだ苦慮  
落葉降る寺を巡つて遍路旅  
三ツ星より慣れ親しんだ妻の味  
粗食でも困らんあつた昭和の期  
本性を隠して迫る詐欺男  
コンビニのおでんも旨い妻の留守  
富士山のマグマがじつと隠れんば  
かくれんば足が見えてる里の秋  
湯豆腐のほっこり染みて外は雪  
落ち葉掻き掻けど掻けども容赦なく  
日に三度世界遺産を料理する  
手料理にコロリ参つて恋に落ち  
逃げる子をつかまえて叩く天花粉

泰 欣 庸 朝 福 堅 美 津 堅 淳 孝 幸 克 靖 久 隆 輝 正 修 直 正 友 正  
 夫 之 佑 子 子 坊 津 坊 司 代 子 三 博 彦 子 子 子 子 樹 美 子 博

姑をどう料理する嫁の才  
岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報  
まろやかにつた亭主がものたりぬ  
物理学賞LEDの青光る  
拳骨を開けば皆まあるい手  
鳥獣戯画の薬味兎の目  
雨を褒めお日さんを褒め土に生き  
話にもしゃれたスバイス散らす人  
言われたい君がきれいで嫁にした  
毒舌の政治対談なつかしい  
誉められてやたら張りきる孫五歳  
辛口もいいがユーモアひとつ添え  
先ず誉めるところを探す通信簿  
倦怠期に利くスバイスを模索中  
誉められてヒト科が人になつていく  
被災者の我慢いつまで続くのか  
8%の税が我慢の限界だ  
我慢なら昭和一桁お手のもの  
我慢してカタカタ鳴つた胸の中  
まろやかな笑顔で仰ぐ菊日和  
人恋しひとり遊びに飽きました  
今は我慢きつとチャンスが来るだろう  
運動会四等でしたよかつた

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

雲流れ人は生まれて人は逝く  
いわし雲我が煩惱の数知れず  
年寄りが山車曳く村の秋祭り

正 益 香 勝 和 一 和 大 幸 喜 和 一 勝 香 益 正  
 子 祥 代 彦 夫 子 輔 子 美 子 夫 彦 代 祥 子 子 子 子 子 子 子 子

消えてゆく雲の軽さに気を休め  
やぶ医者がもう歳ですとサジを投げ

弘 茂

生き甲斐の酒控え目に訳がある  
なじんだ靴履いて世間を闊歩する  
お化粧の途中を見せて得意がる  
母さんのマフラーなんて暖かい  
御辞儀の角度相手によつて変える  
諦めた夢が俄に饒舌に  
きつちりとおむつに包む自尊心  
なじむまで見えない線を引いておく

庸 正 明 坊 ひとみ 知恵子 ヨシエ 歌留多

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

爆発が世界遺産を飛ばす危惧  
山巡り松茸目指し湿地狩り  
薄い背でふりむく母は田の案山子  
墨薄いハガキ受取る十二月

千賀子 弘子 邦子 繁義 浩司 洋一 道子 博史 武臣

魔女帰りは次はサントがやつてくる  
切り抜けた大阪弁が手助けす  
一人身に手料理なじむフライパン  
板前の威勢のよさだ味のうち  
晩学の指になじんだ電子辞書  
二千円札はなじんだままに消え  
夫婦仲理解誤解であきもせず  
あいまいな解答をすすり抜ける  
呼び寄せた親が新居になじまない  
タバコが旨いそんな時代に生きてきた

健二 美佐子 武彦 守啓 正彦 美龍 則彦 巴子 久子 葉子 靖鬼 玲子 耕治 紀華 茂 千鶴子 美智代 さらり

お休みなさい今日の仕事はまた明日  
古希過ぎてこころで一休一休み  
古時計休みたたくても刻む時  
サア一遊は今月分の句は出来た  
働き蜂あの世でゆつくり休みます  
休んだ日仲間と呑めず気は晴れず  
一休みが心の疲労ふき飛ばす  
全没にめげずお休ませぬ句会  
休みたい想い欠伸を誘い出し  
休み休みがこの頃の合い言葉  
沈んだ陽一休みしてまた昇る  
定年後妻運転手僕車掌  
馬鈴薯もボクもころがる日曜日  
張り替えた襖に嫁が体当たり  
あの人のトンチンカンでみな狂う  
ノール賞大穴当てたマララちゃん  
あの人の儲けた話聞き飽きた  
大穴からポロリと生まれ変わる朝  
頂上へ自分のベイス崩さない  
七十年の平和のベイス守らねば  
B型乙女座マイベイスです私  
二人三脚ベイスそろわぬままゴール  
ときどきははずばら休みもしてみたし

みつこ 壽峰 高鷲 シルク 悦子 清之 雄太 六太 彦弘 フジ子 キーキー 紀雄 龍一 光男 勝弘 一文 喜代子 瑠美子 庸佑 一歩 いさお 扶美代 美代子

我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

利子 和郎 文香 ひろし じろう 美恵子 能子 無限 光久

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

秋の夜長本が睡眠薬になる  
人見知り爺じに甘く婆に泣く  
コンビニへぶらり息抜く小さな旅  
のびのびと育てと小言控え目に  
我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

欣造 英和 武臣 道子 博史 武臣

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

美龍 則彦 巴子 久子 葉子 靖鬼 玲子 耕治 紀華 茂 千鶴子 美智代 さらり

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

利子 和郎 文香 ひろし じろう 美恵子 能子 無限 光久

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

利子 和郎 文香 ひろし じろう 美恵子 能子 無限 光久

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

利子 和郎 文香 ひろし じろう 美恵子 能子 無限 光久

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

我が人生ライブルはないマイベイス  
ゼロ戦の話題の端に仲間入り  
虎の尾を踏んでたじろぐ慌てん坊  
たじろがず先を信じて蟻の列  
宇宙でのほんの一部で生きている  
自分史の一部に鍵をかけてある  
浮き雲が好きなお方の許へ行く

利子 和郎 文香 ひろし じろう 美恵子 能子 無限 光久

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

今日もまた閲覧室の隅の席  
絵手紙に夕日がなじむ老いふたり  
控え目にしてたら病気かと聞かれ  
冷え込んだ空気笑顔で解きほぐく  
きつちりと結果が出るリトマス紙  
控え目な人で強かさも見せる

佳恵 比ろ志 見清

悪人も最後は澄んだ水になる  
目も舌も世界で一位和の料理

慶子 一文

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

鴨谷瑠美子報

受け皿になりきる零さない覚悟

饒舌な言葉の端にある殺意

倍返し何をお返ししたかしら

二十四色全部使って秋を描く

日本はカジノ誘致で自己破産

薄味に慣らされました妻の技

里納税期待以上に来る土産

捨てるもの捨ててひらりと風になる

奉賀帳最初の寄付の難しさ

澄んだ水足音聞くと濁りだす

百才になるまで打楽器のリズム

黄泉に向け俺の心は澄んでいる

一灯を点す貧者の慈善鍋

川柳さんだ(兵庫)

田中

童子報

候補者がベビーと握手選挙戦  
当選の礼を言われて気が咎め  
解散の風に吹かれて散る議員  
自衛権あなた民意は聞かなんだ  
そんな手もあつたかないと口惜しがる  
習近平義理の握手でそっぽ向く  
脱サラの軍手だんだん手に馴染む  
目の前の手が握れないあかんたれ  
歯止めされ歩きなはれと万歩計  
ブレーキに錆出はじめた高齢期  
追いつくの嫌でしばらく立ち止まる  
ブレーキを静かに踏んだ赤い薔薇  
こめかみのブレーキ壊す反抗期  
アフリカへ二の足踏ますエボラ熱

好文 淑子 聖也 ヨシエ 美籠 つな子 耕治 キヨミ 雅和 健二 和雄 修平 歳子

恵峰

壽峰

朋子

耀一

紀雄

清雄

安男

かこ

常男

寿之

森子

高鷲

欣之

足踏まれ踏んだ痛さがよく解る

踏み込んだからには頂上御来光

うどん粉は踏まれて腰が強くなり

玉砂利を踏んだら神の音がする

故里や限界集落の土を踏む

知事替わり辺野古の海はタタラ踏む

リフォームに踏み切る夫の生命線

朝食を茶づけでます二日酔い

元氣だね他人はあつさり言うけれど

観客になつてしまえば楽である

あつさりと私を越えていく息子

あつさりと先祖を捨てて無縁墓

あつさりと自説を畳む多数決

あつさりと死にたいけれど今日はいや

ふる里をあつさり捨てて恋しがり

目の奥を覗かれていた嘘一つ

マツサンを見ずに一日始まらぬ

八十路来てまだまだ欲しい美女と金

活火山麓の父母を呼び寄せる

凭れ合いながらも続く口喧嘩

疲弊する地方を救う五能線

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

乳飲み子の笑顔疲れも逃げてゆき

忘れないうで時々揺らす母の鈴

一言の意見にゆれて不眠症

さよならはちゃんと言わせて欲しかった

百薬の長が時々効きすぎる

伯備 淑子 キヨミ ひとみ 秋果 恭子

俊昭

美智子

野薫

朋月

婦美子

徹

宣子

祐康

幸香

ひとみ

忠

一子

紀乃

廣子

順子

茂山

雄太郎

晃

隆

哲男

雅尚

雅尚

雅尚

雅尚

雅尚

雅尚

雅尚

五杯目で話の筋が揺れてくる

だんまりの空気が揺れる仲直り

靴紐が切れて部屋から秋をみる

ダメージは自分自身の水鏡

恋しくて心の揺れが止まらない

人間臭い男に太い芯がある

マイウエイ時の流れに添って秋

恋は過去一つの咳に揺れる今

不機嫌へ頓服薬の孫が来る

ダメージの深さ心に雨止まず

生きている証し心が揺れている

これからは本番ですと咳ばらい

ダメージを物ともせずに花は咲く

においがして政治とカネに釘をさす

お肌プルプルスッポンのコーゲン

揺れている一人ぼっちの赤い月

冬木立闘志の顔で立っている

危険ドラッグ悲惨なニュース効果なく

現金という最高の痛み止め

叱るより褒めたら子供光りだす

乳呑み児を抱けば未来のにおいする

明日がある希望がもてる病みあがり

体臭の中をたたかう終電車

ホツカイロを買おうふところ寒いから

継続の力信じて五七五

シンプルなおかず新米引き立てる

過去形になって気が付く幸せと

弘子 茂子 千代 文香 利子 無限 浩子 千賀子 洋次郎 宏造 武臣 いわゑ 紀華 じろう 哲男 美津子 比ろ志 朋月 求芽 光子 歳子

直

光子

歳子

求芽

比ろ志

朋月

美津子

比ろ志

美津子

哲男

紀華

じろう

いわゑ

武臣

宏造

洋次郎

千賀子

浩子

無限

利子

文香

千代

茂子

弘子

茂子

千代

文香

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

乙未何かいい事ありそうだ  
 税務署へ羊の顔になって行く  
 羊年いい風吹いてくる予感  
 一番のリハビリ恋をすることだ  
 リハビリを頑張る母に負けられぬ  
 足腰に鍼灸効かずどくだみ茶  
 何事も腰低くしてさからわず  
 足腰は元氣歩いてあの世まで  
 人生路歯を食いしばり生きてきた  
 年金がごっそり失せる歯の治療  
 ゆっくりと噛んでゆっくり歳をとる  
 丸腰で生きて来たから慕われる  
 ライバルは一才リハビリの歩み  
 関節痛リハビリ泣いた四十代  
 条件を鵜呑みに出来ぬ重い腰  
 今日よりは明日にリハビリノルマ上げ  
 美しい歯並み大抵総入れ歯

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

眠れない夜は右向き左向き  
 良い人と勝手に思うふしがある  
 見回りの猫にポリスト名をつける  
 半分になったひとりの朝の音  
 大・中・小俺の器はどれですか  
 包丁も亭主も便利よく使う  
 飲み会のアッシー一人キープする  
 使いこみいずればバレると覚悟決め

主一郎 重忠 天翔 一瑤 幸安 蟹郎 節子 たぬ 菖子 敏子 清帆 一粹 茶子 和子 弘子 雅子 美恵子

愛人は小型にしますミニトマト  
 ポケットに小さな悪魔入れている  
 里山も使い捨てする資本主義  
 退職の日からみんなの使用人  
 おいほれに鞭打ち呆けた妻を見る  
 丁寧な御辞儀あわててもう一度  
 使うのが大好きな金貯めている  
 安楽死せず生き抜く這つても  
 眠られぬ耳に山から冬の音

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

普段着のモラルと余所行きのモラル  
 道徳の通りに生きて出世せず  
 儲けたらバラのお庭に白い家  
 職人の気概儲けを度外視す  
 儲け話元本保証詐偽電話  
 勇気出し真実語る目が光る  
 知恵もなく勇気だけでは生きれない  
 勇ましき無知と無謀が縁続き  
 母として火にも水にもなる勇気  
 手招きを無視して通過する勇気  
 十度切り布団出るのに勇気いる  
 耐え忍ぶ寡黙の健に勇気見る  
 無言劇の翌朝おはようが言えた  
 人恋し名残の月を見る刹那  
 すぐ情に流されてゆく母の掉  
 人生の速度緩めて床に臥す  
 大股に歩き老いから遠ざかる  
 あつさり辞任そうやつたんか裏事情

幹啓 雄大 石花菜 野蒜 重忠 鈴野 久子 仁美 完司

義 日の出 舞夢 弘子 善之 照子 けんえい 和夫 希久子 理恵 公平 恭昌 眞澄 満作 志華子 捷也 浩二 桃花

刃こぼれを晩酌で研ぎ直して  
 肌寒い秋を肴に酒を酌む  
 面白い面を被って生きてます  
 平均寿命生き抜く老いの強かさ  
 ハルカス展望涅槃の風が舞う  
 働いた自負を背骨にして生きる  
 川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

まだ若い平均寿命越したとこ  
 友見舞う命ほしいと言われた日  
 何あれどゆずった家督員となる  
 I C U言葉かわさず逝つた姉  
 七五三いつかその子に手を引かれ  
 忘れたらあかんと言われ忘れてる  
 名を呼ばれやつと出て来た存在感  
 大丈夫あんなの強いおかんです  
 松茸ごはん腹いっぱい也是中国産  
 カラフルな色に負けない水墨画  
 子が巣立ち犬とふれあう日々楽し  
 完走やゴールは既に人居らず  
 ふれあつて孫が元氣になるお風呂  
 窓に月やつと落款押せる書が  
 古稀過ぎて知らないことは恥とせず  
 朝からのトラブル長い日が暮れる  
 へそくりを数えてみたら減つていた  
 いろいるな人がいるからこの世です  
 退職金持つてばあさん逃げました  
 負けること覚え学んだ保身術  
 七坂を越えて自由な風に会う

千代子 美浪 咲貴 つな子 富夫 幸香 和子 洋子 柳明 雪菜 初音 修平 よしひさ 里江 紀乃 祐康 ひとみ 五月 野鶴 ヨシエ

みちのくに歎喜黄金の稲を刈る  
 ばあさんが探す私をバアさんと  
 ショックですあなたのオシメ替えたのよ  
 敗戦がたくましくする甲子園  
 秋冷に古里恋し柿すだれ

急停車着けたカツラが駆け落ち  
 産土の神とふれあう七五三  
 黒枝豆妻もビールのお代わりと  
 やっと来た内諾雄叫びをあげる  
 引退でやっとなかたつた処世術

晩秋の道でふれあう石仏  
 拉致の子といつふれあいが出来るやら  
 人生の積み木をやっと組み終える

野 薫  
 キヨミ  
 靖 鬼  
 宏 造  
 純 茂  
 比 志  
 正 和  
 美 籠  
 見 清  
 朋 月  
 哲 男  
 歌 留 多

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

(前々月分)

みつちりと仕込んだ奴が今上司  
 一目見て役者の趣味が出る楽屋  
 みつちりとしほられたあとのむビール  
 あぜ道に忘れず咲いたひがん花  
 拜んでも拜まなくても土砂崩れ  
 言い寄られ今は私が誘う恋  
 走りピリ泣く孫連れて寿司に行く  
 ペテランと自負する者の滑稽さ  
 青空に歩きなさいと誘われる  
 誘われていやと言えないなわノレン  
 秋夜長生きすぎたとは思わない  
 アクシオンは鈍いが喋り負けてない  
 お願いのポーズで花が水誘う

つ な 子  
 和 子  
 よ し ひ き  
 幸 香  
 里 江  
 雪 菜

虫の声台風去ってそつと聞く  
 ダンボール開ければそこは秋の風  
 活火山地球の悲鳴ほとばしる  
 逆らわず風にまかせて八十路坂  
 カレンダーにみつちりつまる予定表  
 写経する度に鱗がはがれ落つ  
 宇宙葬一瞬光り風になる  
 古書店でイスラム国へ誘われる  
 弁当は私が作るから誘う  
 秋の陽に誘われ史蹟訪ね見る  
 まつすぐに歩いてひとつ徳を積む  
 恍惚とハナカマキリの餌になる  
 みつちりと練り上げた手打ちそば  
 哲学の道を掃いてる秋の風  
 うわさにも作詞編曲音頭とり  
 たまちゃんがそわそわ雨戸開けてやる  
 みつちりと鍛えた腕の逆転打  
 緊張が走る座長の楽屋入り  
 友達はお酒で釣つた人ばかり  
 口堅い弟子が支えている楽屋  
 苦節十年やっとな私の風が吹く  
 砂漠にも風紋と言う抽象画

柳 明  
 ひとみ  
 り こ  
 純  
 五 月  
 靖 鬼  
 野 鶴  
 正 和  
 千 津 子  
 キヨミ  
 ヨシエ  
 哲 夫  
 野 薫  
 比 志  
 見 清  
 耕 治  
 朋 月  
 宏 造  
 か ず お  
 美 籠  
 茂  
 哲 男

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

(前月分)

まっ白に塗るわたくしの生きた色  
 整えているのはボクの形だけ  
 足の先まで性善説に包まれる  
 凜然と女葬る冬の陣

朋 子  
 か こ  
 ダ ン 吉  
 惠

お先にも倍飲みさきに帰る人  
 風呂敷に包んだ愛はそのまんま  
 豊穡の大地蝕む温暖化  
 好きですす苜か細くキ・ラ・イ・デス  
 幾重にも袱紗に包み来る遺恨  
 里の秋豊かに実り嫁太る  
 命とや世界に問うた安楽死  
 原発に風呂敷かぶせ再稼働  
 おーいと言えはーいと答え妻元氣  
 豊作も不作も風の抛り所  
 太陽の包容力を持つ器

常 男  
 寿 之  
 壽 峰  
 高 鷲  
 仁  
 安 男  
 慶 子  
 清  
 耀 一  
 森 子  
 欣 之

事務所便り

新しい年になりました・今年も川柳塔誌のご愛読を宜しくお願い致します。この欄でも何度かお願いしておりますが、毎月の原稿締切日十五日が土日祝日に当る場合は、事務所が休日のため、前倒しの週日が締切り日になります。従って十一月は十四日が締切りでした。塔誌は毎月二十七日に(同日が土曜の場合も)必ず発送致します。同日が日曜の場合は土曜の二十六日が発送日です。原稿の整理、選、校正、印刷等の作業や郵便事情、経費等も併せて同日がぎりぎりの締切日という事情をとうぞご理解下さいませ。(山岡富美子)

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	13日(火) 13時30分締切 式・磨く・甘い	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔すみよし	17日(土) 14時15分締切 縁起(連記)・ニュー ひそひそ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
岸和田川柳会	17日(土) 13時30分開場 年輪・栄える・楽しい アングル	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中國香代
川柳塔みちのく	17日(土) 17時締切 明るい・うとうと・挨拶	弘前市稲屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦
川柳ねやがわ	18日(日) 13時締切 オープン・夢・目玉	寝屋川市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳藤井寺	18日(日) 14時締切 のし袋 共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	19日(月) 13時50分締切 ロマン・問う・どっこい 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳さんだ	20日(火) 13時30分締切 盃・ルーツ・酔う・はるばる 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
和歌山三幸川柳会	24日(土) 12時開場 一・スター	会場 = 和歌浦「万波」 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの市川柳会	25日(日) 14時締切 冷気・眉・成長・ダンス	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳ふうもん社	25日(日) 13時30分開場 軸足・バトカー・いとおしい	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	26日(月) 18時開場 今・競う・ほっこり・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	26日(月) 14時締切 クラス・ほちほち・茶	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

# 1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
倉吉 川柳会	3日(土) 14時締切 ワッショイ・清らか・漲る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 な	8日(木) 14時締切 進む・体・始発	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 若さ・色・正月・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さかい	9日(金) 13時開場 しぶとい・揃う 折り句=れいぎ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	10日(土) 14時締切 しみじみ・光・気合	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
城北 川柳会	<b>新年句会</b> 10日(土) 10時50分締切 地平線・挑む・あっさり・自由吟	錦城閣 3F 地下鉄京阪天満橋駅 キャッスルホテル 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	<b>新年句会</b> 10日(土) 13時締切 ひつじ・触れる・自由吟	がんこ寿司 (大阪狭山店) 集合場所=近鉄南大阪線「富田林」駅北口 11時30分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
川柳塔 打吹	10日(土) 13時締切 翼・開ける・コトコト	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳塔 まつ社	10日(土) 13時45分締切 朝・雪・日本・ピカピカ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	11日(日) 14時締切 日向・縄・慌てる・雑詠	八尾市洪川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	11日(土) 14時10分締切 兼題=賀状・車・チャンス 課題吟=宝	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 圧力・覚える・あっさり 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋の池町10-18-104 福島弘子
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 始める・札・ちょこちょこ 自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼

# 柳界展望

★出雲総合芸術文化川柳大会は11月15日、出雲市のパルメイトで開催。同人の天位は次の通り。

森山 盛桜  
天はハンカチ思い切り泣いてみる  
新家 完司  
傾いた家で今年も冬籠り

★第34回川柳塔みか月川柳大会は11月30日、鹿野町総合福祉センターで開催。出席者109名、投句者22名。同人の成績。

第一位 小島 蘭幸  
日々発見 一年生よ走るのだ  
第四位 福西 茶子  
よく笑い大きくなれと結ぶ飯  
第七位 石橋 芳山  
平成の脆さ貧乏を知ら

★第56回和歌山県文芸まつり同人成績次の通り。  
堀 富美子  
道草をしながら脱反繰り返す

## 朝日新聞社賞

宇野 幹子  
ノスタルジー雲の峰まで追いかける

## NHK和歌山放送局賞

北山 絹子  
充電をしてから明日を組み立てる  
文化協会賞 古久保和子  
この星の隅お借りして白ごはん

三宅 保州  
ネジ全部ゆるめて古里へ帰る  
柏原 夕胡  
目を伏せたとき己にも負けている

田中 みね  
賑やかなカルテも生きている証  
玉置 当代  
生きてゆく方程式がまだ解けず

★第一回川柳カード誌上川柳大会には応募者144名があり、同人成績。  
特選 寺川 弘一  
神さまよりも早く生まれてみたかった

## ▽ご芳志御礼△

○前田洋子さん(誌友・日置市)から金一封を拝受しました。

## ▽出版△

◇東奥日報創刊125周年記念企画・東奥文芸叢所川柳句集『大地』著者・斉藤 菟。B6判124頁、一二〇〇円＋税。

## ▽新誌友紹介△

弘前市 三浦 義光  
紹介者 福士 慕情  
東海市 島津 敏子  
茨木市 松本 光江  
石原 歳子  
田中 章子  
今井 初音

竹原市 小島 蘭幸  
紹介者 錦織 松子  
広島市 小島 蘭幸  
紹介者 北村 善昭  
福山市 小島 蘭幸  
紹介者

笠岡市 藤井 智史  
紹介者 小島 蘭幸  
岡山県 紫しめの 富田林市  
紹介者 小島 蘭幸  
京都府 櫻崎 篤子  
紹介者 都倉 求芽  
長野市 榎本 宏子  
紹介者 小島 蘭幸

平成26年度 業務分担表		平成26年11月現在	
	常任理事	理事	事務
総務部	水野 島田	黒兎 誠一	久保田千代 坂 裕之
企画事業部	片山かずお	久保田千代	足立 茂 木満作 柿花 和夫
編集部	木本 朱夏	森松まつお	江島谷勝弘 鈴木いさお
句会部	古今堂 蕉子	山崎 武彦	居谷真理子 長井 善純
同人誌友部	坊農 柳弘		河内 月子 鶴田 遠野
渉外部	河内 月子		松原 寿子 山崎 武彦
会計部	鈴木いさお		坂 裕之
発送部	江島谷勝弘		足立 茂 佐々木満作
事務部	森松まつお		

◎太字は部長(部長以外は50音順) アンダーラインは新常任理事

登別市 小島 蘭幸  
紹介者 小島 蘭幸  
富田林市 小出 修三  
山岡富美子  
常任理事会 12月5日(金) ①21回川柳塔まつり ②高山山合祀報告 ③定例確認事項 ④各部報告 ⑤その他  
次回 11月7日(水) AM10時

新年おめでとうございます

# 西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子

亀株片長小緒江梅上井市伊石足浅秋奥西  
岡元山川倉方谷澤垣上坪田原立野元田口  
哲玲 哲 美勝盛 キじ武 歳 房 て み い  
子子忠夫藍津子弘夫ミう臣毅子茂子る子ゑ

春能西難七長富都田竹白酒小黒蔵久北河  
城勢内波田浜山倉中山山川田林田田田野井  
年利朋伯順美ルイ求章千賀淑浩わ能光千哲庸  
代子月備子籠子芽子子子司こ子子代男佑

両山山山山山山丸松松牧堀古藤藤藤福  
川本田田崎崎口山下井測 川本岡井島  
無義婦耕武君光一 比文富正奮 り宏弘  
限り子子治彦子久之志香子和水直こ造子

あけましておめでとうございます

# 竹原川柳会

会長 小島蘭幸

監査 時広一路

会計 岩本笑子

古田太虚

石原淑子

山内房子

ほか会員一同

あけましておめでとうございます

## きやらぼく川柳会

会員一同

事務局 〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹村紀の治

あけましておめでとうございます

# 川柳塔鹿野みか月

会 員 一 同

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

森 山 盛 桜

明けましておめでとうございます

# いずも川柳会

会 長 竹 治 ちかし

会 員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町423 伊藤玲子方

TEL0853-23-3200 FAX0853-23-3201

明けましておめでとうございます

# 川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々  
会員一同

- 事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3  
中村金祥  
TEL 0857-59-1056
- 月例会：毎月第4日曜日 13:00～
- 会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

謹賀新年

## わかあゆ川柳会

会長

松本昌

事務局

松本はるみ

和泉ハル子

永見安子

奥谷澄子

河原恵美子

松本英子

渡部好江

菅田かつ子

島根県雲南市木次町木次一〇一

明けましておめでとうございます

## 川柳塔さかい

会長 河内 天笑

山本半銭	村上玄也	宮本かりん	増田わこう	伏見雅明	樋口冬虹	西村りっえ	西内朋月	徳山みつこ	田部和幸	高木世紀子	柴本ばっは	齋藤さくら	古手川光	河内月子	柿花和夫	大谷篤子	太田としお	榎本日の出	出海素頓馬
米澤俣子	矢倉五月	向井清好	升成ヨシ枝	増井ヨシ枝	日野清愿	原野清晋	中野健吾	遠山唯教	谷川誠一	島田敏治	澤井敏治	小山永久	源田八千代	加島由一	奥時雄	太田扶美代	榎本舞夢	梅本澄空	

あけましておめでとうございます

## 翠洋会

佐々木満作	小谷集一	古今堂蕉子	奥田みつ子	太田昭	大久保眞澄	大川桃花	榎本舞夢	榎本日の出	岩本浩二	井上照子	阿部紀子	安福和夫	安土理恵	浅井公平
渡辺富子	米田恭昌	吉田知之	横山捷也	山本希久子	前川善之	藤井正雄	原田すみ子	能勢良子	西出楓楽	寺井弘子	津村志華子	辻内げんえい	谷口義	高杉千歩

明けましておめでとうございます

## 河内長野市川柳協会

肥 辻 松 谷 梶 石 木 山 黒 坂 村 山 水 会 員 有 志 顧  
山 村 岡 原 田 見 谷 室 岩 上 上 岡 谷 尾 問  
一 ヒ 久 弘 隆 孝 光 靖 淳 直 富 正 岳  
文 口 篤 美 光 彦 代 弘 博 司 樹 美 子 子 人

明けましておめでとうございます

## 川柳あまがさき

野 足 藤 北 扇 片 都 宮 矢 山 堀 加 藤 古 酢 村 松 鶴 奥 松 山 西 長  
口 立 井 野 野 山 倉 崎 野 本 川 田 川 谷 山 村 田 村 下 田 田 内 浜  
晶 つ な 宏 哲 よ し ひ さ 求 咲 野 幸 正 靖 雪 奮 亀 与 里 遠 五 比 耕 朋 美  
子 子 造 男 さ お 芽 貴 薫 香 和 鬼 菜 水 子 江 野 月 志 治 月 籠

今 入 足 川 平 竹 藤 内 北 山 長 酒 江 阿 田 九 大 上 中 渡 大 上 谷  
西 江 立 端 井 林 岡 田 川 川 井 見 野 原 鬼 浦 田 井 辺 岸 垣  
廣 修 蔦 富 千 り 美 也 ヨ シ エ 哲 健 見 寿 寛 洋 初 ひ と 楓 柳 和 子 祐  
子 平 茂 子 夫 子 こ 子 純 エ 夫 二 清 美 子 郎 子 音 み 花 明 子 ミ 康

明けましておめでとうございます

# 富 柳 会

河野	前田	林	藤田	栃尾	中村	関	山野	古田	中崎	中井	池
彦次	登子	澄子	武人	奏子	恵	よしみ	寿之	千華	深雪	アキ	森子
	都筑	岡本	佐々木	岸本	松本	廣谷	田嶋	井澤	久世	石橋	肥山
他	一文	静子	七朗	慶子	正治	千恵	伸雄	寿峰	高鷲	未知	一文
一同											

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
緩和ケア（ホスピス）  
サービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

初心者にもベテランにも役立つ！

# 川柳の理論と実践

B 6 判・326頁 税込 1680円（送料込 2000円）

新家完司川柳集（六）

## 平成二十五年

税込 1050円（送料込 1000円 + 80円切手 3枚）

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司

TEL0858-52-2414 FAX0858-52-2449

きづがわ けい 著  
木津川 計 著

『ことばの身づくろい』 —— 話す為に・書く為に ——

日本語を愛するがゆえの熱い思いが全編に横溢している。（序文・難波利三）

目  
次  
か  
ら

- 1 ことばの化粧とことばの襟
- 2 心配りのことば学
- 3 知識の宝庫としての漢字
- 4 ユーモアなくして生きられない
- 5 ことばにどう向き合うか
- 6 土地の文化を生み出した地域語（方言）
- 7 ことば遣いの達人に学ぶ
- 8 ことばへの無関心

ことばの  
身づくろい

— 話す為に・書く為に —  
木津川 計

日本語を愛するがゆえの  
著者の熱い思いが全編に  
横溢している。

—— 難波利三

発 行『上方芸能』出版センター

TEL 06-6441-3337

FAX 06-6447-0900

B 6 判 352頁  
定価（1,429円 + 税）

# 川柳葦群

## ■主な内容

同人作品「葦群抄」  
近詠作品「葦の原」  
作品鑑賞 新家完司・大西泰世  
柳論 エッセイ 句会報 ほか

■A5版 37頁 季刊(年4回)

年間 4000円(〒込)

発行人・編集人 梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426 TEL.0944-72-6046

振替口座 01760-2-120254

E-mail house7@cello.ocn.ne.jp

山 仁 坂 吉 北 岩  
口 部 本 冨 村 崎  
高 四 蜂 節 松  
明 郎 朗 子 風 實

川柳塔唐津

謹賀新年

あけましておめでとうございます

## 川柳塔みちのく

### 主幹 福士慕情

季刊柳誌「川柳塔みちのく」100号を記念し、誌上川柳大会を企画しております。奮ってご参加ください。

事務局 〒036-8275 弘前市城西1-3-10

稲見則彦 (☎0172-36-8605)

# 大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方  
TEL 06 (6303) 7297

安井	森口	本田	藤井	内藤	伊達	竹森	大堀	碓氷	池田	井上	足立	世話人	磯野	代表
英華	美羽	智彦	満洲夫	光枝	郁夫	雀舎	正明	祥昭	武彦	かれん	淑子		いさむ	

※会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

あけましておめでとうございます

## 川 柳 塔 な ら

加	飛	安	渡	居	中	高	森	江	坊	中	米	大
門	永	土	辺	谷	西	畑	中	島	農	原	田	内
会	萌	理	富	真	賛	お	博	勝	柳	比	恭	朝
員	子	恵	子	理	郎	た	一	弘	弘	呂	昌	子
一	こ			子		か		弘		志		

## 謹 賀 新 年 川 柳 塔 奉 つ え 吟 社

主 幹 石 橋 芳 山

同 人 一 同

事務局 〒690-0001 松江市東朝日町206-7 石橋芳山 方  
TEL.090-2003-5846

川柳茶ばしら

謹賀新年

関	金	脇	板	早
本	子	田	山	川
かつ	美	雅	ま	遡
子	千	美	み	行
	代		子	

あけましておめでとうございます

京都塔の会

会員一同

迎春

川柳ささやま 一同

代表 北澤 稠民

創立50周年を迎えました

# 南大阪川柳会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）  
原則として第4月曜日・6時から

新年おめでとうございます

はびきの市民川柳会

会長 塩満 敏・会員一同

あけましておめでとうございます

サークル 檸 椽

吉村	山本	山本	山本	山口	松尾	前	西村	西出口	西出口	長浜	古今堂	久保田	片岡	奥田	太田	井丸	浅野
久仁雄	義子	希久子	加お里	光久	美智代	たもつ	哲夫	楓楽	いわゑ	美籠	蕉子	千代	智恵子	みつ子	扶美代	昌紀	房子

明けましておめでとうございます

# 豊中もくせい川柳会

## 会員一同

明けましておめでとうございます

### ほたる川柳同好会

水野	黒兔	藤澤	長一	宮田	輝	田中	螢柳	栗田	久子	寺井	柳童	多田	契子	中山	春代	神野	宇乃子	松尾	美智代	笠田	幹治	池田	純子	貝塚	正子	荒木	郁子	樋口	順子	南	正代	上田	陽子	永森	美佐子	句会	第二火曜日	午後一時より		勉強会	第四火曜日	午後一時より		場所	豊中市蛍池公民館		
----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	-----	----	-------	--------	--	-----	-------	--------	--	----	----------	--	--

明けまして

おめでとうございます

## 六甲川柳会

## メダカの学校

世話人

井上	忠貞	梅澤	盛夫	輿水	弘	竹山	千賀子	山崎	武彦
----	----	----	----	----	---	----	-----	----	----

あけましておめでとうございます

本年もよろしく願い申し上げます

# 川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪方  
電話・FAX 073-462-7229

謹賀新年

## 和歌山県川柳協会

会長 三宅 保州

副会長 川上 大輪

【お問い合わせ先】 事務局長 古久保 和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17  
TEL 073-423-8930

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

主 幹 三宅 保州  
副主幹 古久保 和子  
副理事長 喜田 准一  
理事 田中 みね  
事 務 玉置 当代

川上 智三  
楠見 章子  
武本 碧  
磯部 義雄

事務局 〒640-8111  
和歌山市新通七一七

古久保 和子 方

TEL 073-423-8930

例会 毎月第四土曜日 12時30分

和歌山商工会議所

「バス停 和歌山市役所前」

謹 賀 新 年

# 会 柳 川 北 城

森	藤	平	綱	板	永	小	江	近	伊
田	原	嶋	島	東	井	林	島	藤	達
	千	美	榮	倫	縣	杖	勝		郁
麗	恵	智子	子	子	笹	香	弘	正	夫

年 賀

# 寺 井 藤 柳 川 ぎ さ さ み 柳 川

代 表 高 田 美 代 子 会 員 一 岡

# 会 柳 川 き っ あ

(鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす(会則))

◆毎月②金 13時開場  
 ◆(財)大阪保育運動センター  
 ◆「あかつき」月刊300円  
 ◆〈会報〉

宮 塩 山 松 前 西 中 鈴 杉 塩 阪 加 江 荒 岩 近 森 川  
 崎 満 本 本 田 川 里 木 谷 田 井 山 島 川 佐 藤 村 端  
 シ 昌 本 千 紀 紀 昌 一 美 勝 勝 鈍 ダン 美 一  
 マ 代 鶴 子 雄 子 行 世 久 弘 甲 吉 正 花 歩  
 子 敏

新年おめでとうございます

# 川柳塔すみよし

会長 鶴田遠野

例会 毎月第4土曜日（但し会場の都合で変更になる場合もあります）

大川桃花	大内朝子	榎本舞夢	榎本日の出	江島谷勝弘	宇都満知子	内田志津子	魚住順子	岩崎公誠	井丸昌紀	板尾岳人	磯島福貴子	石丸正太郎	石橋直子	荒川博行	荒川繁子	浅井公平
高杉千歩	柴本ばっは	澤田定子	阪井美世子	坂今堂裕之	古今堂蕉子	甲田靖子	吉川哲矢	北村賢子	川端一歩	河井庸佑	奥村五月	奥田チエコ	大西晴雄	大谷篤子	大隅克博	大治重信
坊農柳弘	藤原昭	藤島たかこ	橋本典子	萩尾紀子	西村りつえ	長浜美籠	中島栄子	中尾伸子	中井萌	土井舞蹴	鶴田遠野	谷川安昭	田中ゆみ子	田中廣子	立石郁子	田口和代
			宮村満寿恵	若本安代	山本半錢	山根妙子	山岡富美子	矢倉五月	森松芳香	森松まつお	村田恵子	宮本かりん	宮崎シマ子	増田啓次	増田隆昭	堀田温子

# 賀 正

## 川 柳 塔 社

名譽主幹  
 主 幹  
 理 事 長  
 副 主 幹  
 副 理 事 長  
 副 理 事 長  
 副 理 事 長  
 常 任 理 事

河 内 天 笑  
 小 島 蘭 幸  
 新 家 完 司  
 川 上 大 輪  
 河 内 月 子  
 木 本 朱 夏  
 鶴 田 遠 野  
 足 立 茂  
 居 谷 真 理 子  
 片 山 か ず お  
 古 今 堂 蕉 子  
 佐 々 木 満 作  
 鈴 木 い さ お  
 坊 農 柳 弘  
 水 野 黒 兎  
 山 崎 武 彦

江 島 勝 弘  
 柿 花 和 夫  
 久 保 田 千 代  
 坂 田 裕 之  
 島 田 誠 一  
 長 井 善 純  
 松 原 寿 子  
 森 松 ま つ お

川柳塔社常任理事会

# 編集後記

★元旦の母なる川は朱金（ハルカ）の帯 薫風

★編集長を拜命して五年度の新年。気力・体力・能力の衰えを実感しておりますが、本年もよろしくお願ひします。

★俳人・伊丹三樹彦氏は毎月のように川柳塔の読後感をお送りくださる。「川柳を読むとリラククス

できます。人生如何に楽しむべきかも。木津川さんは無論ですが小栗さん、新家さんも誇るべき書き手ですな。蘭幸さんの句

集紹介では、亡父の靴／おふくろは元氣だ／が申し分なき佳句」は一二月号の感想です。

★木津川先生の「川柳塔の讃歌」は一〇一回を迎えた。先生が立命館大学を退職されたのは一〇年前。一人語り劇場の構想を熟っぽく語られた先生に、

当時の編集長・西出楓楽さんと連載をお願いしたことを思い出す。先生の

ペンは厳しく、やさしく、ほのぼのと心に沁みてホ

ロリとすることも……。★印象吟インスピレーション・ナビ第一回は応募者一〇〇名。難しいと敬遠された方も多いよう

ですが、リラククスとして挑戦して頂ければ……。選者の大西泰世さん出演のNHKラジオ第一放送

の「土曜はつとタイム」の「ほやき川柳」は毎週土曜日、午後3時5分からもお楽しみ下さい。

★インスピレーション・ナビのタイトルは高瀬霜石さんから紹介頂いた

平本勝彦氏の手になります。氏は平本勝彦デザイン室主宰。「亀田の柿の種」のパッケージは余りにも有名。インターネットで「けなげ組」を開いてみてください。お馴染の柿の種がほっこりと癒してく

## ある句会

### ひとこと

誘われて、ある句会に出た。驚いた。そこでは私には理解できない句が、次々と披露されていく。まるで象徴詩を読まされているように感じた。それらは私の発想、思考の域外にあった。解説をつけて納得させてくれ、といった気分だった。当然、私の句は一句も抜けなかった。自分の句が下手と言うことを差し引いても、どう声がかかるといふか、肌合いが違うという印象の句会だった。衝撃を受けた。だが刺激もあつた。こんな川柳もあつたのかと。川柳を始めて、即ち、川柳塔の仲間に入れてもらって十数年。すっかり川柳塔の色に染まっていた。生涯一誌友と決めているが、この度、同人になつた。いまだに句づくりの迷路の中でもがいている。「もつと勉強しなはれ」という声がかかってくる。(清水秀旺)

れるでしょう。

★2月号からナビの課題は平本氏のイラストになります。なお氏から「け

なげ組」(サンマーク出版九五二円+税)をご寄贈頂きました。ご希望の方は葉書で編集部宛お申込みください。抽選で五名の方に差し上げます。締切りは一月一日必着。

(朱夏)

◇。校正。を「広辞苑」でひいてみると「①文字の誤りをくらすこと。

②校正刷と原稿を引き合わせて、文字の誤りや不備を調べ直すこと」とある。

◇私たちが編集部では毎月塔誌発行に際し、何回も繰返し校正作業を行うが、その内容は②の印刷物と原稿とを照合するのが中心である。

◇この校正作業で最も難儀するのが、読みにくい原稿に出会った時で、判読に時間がかかったり、作業が途中で中断したり、

◇達筆も結構だが、先ずは濃い鉛筆で、大きな字で、崩さないで楷書で原稿を書いていただくことを切望してやまない。(いさお)

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(3月号)

地名

市都  
道府  
姓  
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「羽ばたく」(1月15日締切)

3月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都  
県道  
府 姓  
号

地名

市都  
県道  
府 姓  
号

切らないで下さい

きりとせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

3月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選  
 水煙抄 (8句) 西出楓楽選  
 愛染帖 (3句) 新家完司選  
 檸檬抄「羽ばたく」(2句) 牧野芳光共選  
 (2句) 古久保和子選  
 インストレーションナヒ(2句) 大西泰世選  
 一路集 (3句) 「氣迫」「手探り」「トンネル」  
 長浜美籠選  
 小川てるみ選  
 山口野之選  
 山光久担当  
 初歩教室 「占う」(3句) 山口光久担当

4月号

檸檬抄「学校」  
 一路集「目立つ」「助走」「バセリ」  
 初歩教室「真っ直ぐ」

## 本社1月句会

とき 1月7日(水) 13時開場・13時40分締切  
 ー開場時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。  
 ところ アウィーナ大阪 3階 葛城の間  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
 おはなし「私の句の背景にあるもの」  
 兼題「祝」「恋しい」「クリーム」「仰ぐ」「ピカピカ」  
 新柿黒伊安木小  
 家花田達土本島  
 完和能達土本島  
 司夫子郁理朱蘭  
 選選選選選選  
 会費 1000円 投句料 500円(切手可)  
 (各題2句以内)

本社2月句会  
 5日(木) 午後1時から  
 兼題「散歩」「くどい」「どんどん」  
 「真似る」「北国」

## 第32年度 夜市川柳募集

第8回「傾く」日野 愿選  
 ハガキに3句 1月20日締切  
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料94円)  
 半年分 五千円(送料共)  
 一年分 九千八百円(同)

二〇一五年(平成二十七年)一月一日発行

発行人 小島和幸  
 編集人 木本朱夏  
 印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七  
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社  
 電話(06)六七七九一三四九〇番  
 振替〇〇九八〇一四一五八四七九番

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

# 川柳募集

「ごま」にまつわる  
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選

応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表

本紙4月号にて発表いたします。

締切り

2015年1月31日(当日消印有効)

投句先

〒54310052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニガキの

手作りの味わいに  
こだわり続けて  
五十七年

つぎはごま



株式会社 オニガキコーポレーション  
〒862-0951 熊本県中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎0120-30-5050

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

bikenart@ea.mbn.or.jp